私と姉さんと召喚獣

秀吉組

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私と姉さんと召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ９２２４Ｔ

【作者名】
秀吉組

【あらすじ】
姉さんとまた一緒に暮らすため、そして昔、病弱だった私を励ましてくれたあの人を追って文月学院に編入した。

このお話は霧島翔子の妹、霧島夢希が主人公の友情に恋にバカ騒ぎとドタバタストーリーです

主人公設定（追加設定しました）（前書き）

この作者は全くの素人なのでキャラクター設定がおかしなところや誤文などあるかもしれませんがどうか暖かい目でみてやって頂いたら幸いですｍ（＿＿）ｍ

主人公設定（追加設定しました）

主人公説明

名前　霧島　夢希

（きりしま　ゆき）

身長は姉の翔子と同じくらいで普段は髪型はポニーテールしているが髪を下ろすと瓜二つの姉妹のため姉の翔子と見分けがつかなくなる。唯一雄二だけ見分けがわかる。

性格　姉の翔子に比べると活発で姉の魔の手（笑）から雄二を守ろうとして見えるが実はそれ以上に状況を悪化させる天使の姿をした小悪魔な性格。しかし好きな人の前だと顔を真っ赤にさせ恥ずかしがったり困ってる人を見たら見捨てることが出来ない一面も持つ。

趣味　ポイントカードのポイントを貯めること

ウィンドウショッピング

お菓子作り

カポエラ

翔子が祐二の目潰し等攻撃的な所を見るとこ

好きなこと　秀吉と過ごす時間

姉と雄二のいちゃいちゃしてるところ（拷問も可）を見ること

友人達とわいわい騒ぐこと

嫌いなもの　秀吉を傷つけるもの　姉を傷つけるもの

概要　幼い頃は病弱で治療のために翔子とは離れて暮らしていたが完治しまた姉と暮らしたいと思い帰ってくる。雄二とは幼なじみの関係。秀吉とは治療中の滞在先で出会い夢希を励ましてくれた相手でその時夢希が一目惚れ今でもずっと想いを寄せている。

普段は隠しているが強力な蹴り技を持っている。

一話　学校初日（前書き）

なんだかゴタゴタな作りになってしまいましたが暖かい目でみてやって下さい（－・－；）

一話　学校初日

「ここが文月学園か」

校舎へと続く両脇を桜が咲き誇っている坂道を上がるとその建物はあった。

今日から私が通う学園、私が大好きな姉さんが通う学園、そして、私を励まし生きる希望を与えてくれた人、私の初恋の男の子木下秀吉君がいる学園……、秀吉君…私のこと覚えてくれてるかな?……それとも忘れちゃったかな?と思いにふけながら校舎の入り口に入ろうとした時

「そこのお前、ちょっと待て」
と呼ばれたので振り返ってみるとそこには

浅黒い肌をした短髪のスポーツマン然としたマッチョさんがそこにいました。

「あ、あの、ど、どちら様でしょうか?:;」いきなり現れたマッチ

ョさんに私は驚きを隠せないまま質問していた。

「ああ、驚かせてすまん。俺は西村　宗一この学園の生活指導担当の教師だ。お前が編入してきた霧島夢希だな？」

…まさか出会い早々一発目からこんな濃い先生に会うとは流石文月学園。普通の学校とは一味違うということですか；

「うん？どうかしたか？」

「い、いいえ！なんでもないです！霧島夢希です！よろしくお願いします！」

「？まあいい、それより、ほら、編入試験の結果だ受け取れ」

先生が懐から封筒を取り出し、私に差し出してくる。宛名には「霧島夢希」と書かれてあった。封筒を開け紙を開くとそこには

「霧島夢希　　Ａクラス」

と書かれていた。

私の文月学園の学生生活の初日が始まろうとしていた。

一話　学校初日（後書き）

感想や誤文字とかありましたらメールを送って下さいm（＿＿）m

二話　学校初日その2（前書き）

今回はちょっと長く書いてみました。相変わらずのゴタゴタな作りですが暖かい目でみてやって下さいｍ（＿＿）ｍ

二話　学校初日その２

霧島夢希　Ａクラス

「よかったなＡクラスに編入出来て。Ａクラスにはお前の姉の霧島翔子もいるぞ。が、この結果に慢心をせず、常に己を研鑽する事を忘れんようにな。」

とマッチョ、いや違った；西村先生が自分のことのように喜ぶように私のＡクラス編入を祝ってくれた。

「は、はい！ありがとうございます！」

姉さんのことだからＡクラスなのは予想できていた。姉さんと同じ文月学園に編入するのだからどうせなら姉さんと同じクラスになりたいという一心で猛勉強を頑張ってきた。猛勉強の末にこうして晴れてＡクラスになれたこに、努力が実ったことが本当に嬉しかった！

…ま、まあそれで秀吉君と同じクラスになれたら最高なんだけどな～と思っていたのは秘密である；

「では、これから職員室に案内するのでついて来るように」

「はい！」

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

「職員室には担当の高橋先生がいるので高橋先生の指示に従うように。では、俺はここで失礼するぞ。これを渡さなきゃならんバカが一人いるのでな」と西村先生は一つの封筒をヒラヒラさせながら去っていった

私は去って行く西村先生に一礼すると職員室の扉を開いた

「し、失礼しまーす；」

「お待ちしていました、霧島夢希さん。私がＡクラス担当の高橋洋子です。よろしくお願いします」

職員室に入るとそこには髪を後ろでお団子状にまとめ、眼鏡をかけてスーツをきっちり着こなした知的女性の代表な先生がいた。

綺麗な女性(ひと)だな～、あれが眼鏡美人ていうのかな？なんて考えていると

「ん？どうかしましたか？」

「ふぇ？あ、いいえ！？何でもないです；霧島夢希です！よろしくお願いします；」

いけないいけない；考え事するとつい止まっちゃうな私；

「そこのソファーに座って楽にしてください。ふふ、そう緊張しなくてもいいですよ。」

「あ、はい；」ううう、緊張していることバレて気を使われてしまった…恥ずかしい；

「では簡単にこの学校について説明しますね」

「はい、お願いします」

私は高橋先生からこの学校の特色　召喚獣その召喚獣を使って行う試験召喚戦争　そしてその戦争の勝利のメリットと敗北した時のデメリットの説明を受けた

「では、そろそろ教室のほうに移動することにしましょう。」

「では、外で待っていて下さい。Aクラスの生徒と少し話をしたら呼びますので呼ばれたら入って来て下さい」

高橋先生はそうとAクラスに入っていった。しかし何だろうこの広い教室にこの設備は；

壁を覆うほどのプラズマディスプレイにノートパソコンに冷蔵庫、リクライニングシートなど他にも色々な設備がありまるで高級ホテルだよこれは；と唖然としている所に「どうぞ、入ってきて下さい」と高橋先生の声が聞こえた

…この教室に姉さんがいるんだ。ふふ、姉さん驚くだろうな～、なにせ私がこの文月学園に編入することはおろか帰ってくることも伝えてないのだ！いわゆるドッキリを決行しようとしているのだｗ

私はポニーテールにしていた髪を解き髪を下ろし無表情を装って教室に入った

教室に入ってみると予想通りの反応が起こっていた

「え！？代表？代表が二人？」

「え！？……夢希？」

私はクラスの反応と姉さんの反応を見ると無表情から一変して笑顔でこう言った

「今日からこの文月学園に転校してきた霧島翔子の妹の霧島夢希です！よろしくお願いします！」

二話　学校初日その2（後書き）

感想おまちしてます

三話　学校初日その３（前書き）

ちょっと翔子の設定が変わってるかも知れませんが暖かい目でみてやって下さい

三話　学校初日その3

「……ぶす～（「３「）」

「機嫌直してくださいよ～、姉さん～；」

私のドッキリ作戦は見事成功したのだけどご覧の通り姉さんが拗ねてしまいました；。姉さん、自分は怒ってるんだぞという顔をしてるつもりなんでしょうが可愛すぎです姉さん！と言うと余計拗ねちゃうので言いませんが…

「……いつ、こっちに帰ってきたの？」

「え、え～と昨日の晩には（＾―＾；）」

「……教えてくれたら迎にいったのに」とまた拗ねちゃう姉さん；。なんとか機嫌を直して貰わないと；

「で、でも今日からまた同じ学校で学生生活を送れますよ；」

「……また、一緒に暮らせる？」

「はい、姉さん」

「……おかえりなさい、夢希（ニコ）」

「……ただいまです、姉さん（ニコ）」

なんとか姉さんの機嫌を直せてホッとした所に「いや～本当にそっくりだよね～、どっちがどっちなのか分からないよ～」と言われて振り返ると色の薄い髪をショートカットした、ボーイッシュな女の子がいました。

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

「霧島夢希です。こちらこそよろしくお願いします」

「さっきの話ちょっと聴いちゃったんだけどまた一緒に暮らせるとか言ってたけど離れて暮らしてたの？」と工藤さんがきいてきた

「私、幼いころは病弱でその治療のために姉さんとは離れて暮らしてたんです」

「そうだったんだ…、で、もう身体は大丈夫なの？」

「はい！もうすっかりと」

「そうなんだ～、あれ？離れて暮らしていた妹との感動の再開の割には代表、その、なんというかリアクション低くない？」

「ああ、確かに離れては暮らしてましたけど連絡は取り合ってたんですよ。手紙とか携帯のメールやらあとテレビ電話とかで。だから」

「……でも一緒に暮らすのと離れて暮らすのとでは違うこともある」

寂しいないと言おうとしたら姉さんが横からこう言ってきた…しかし、

「……でも夢希は帰ってきてくれた。また一緒に暮らせることが出来て私は本当に嬉しい」と嬉しそうに言ってくれた。

姉さん寂しいかったんだな、でもそう言ってくれてとっても嬉しかった。……私も寂しかったのかな…

「本当に仲のいい姉妹だね～」

「……私たち最強姉妹（Vサイン）」

「あはは、そう言ってもらえると嬉しいです工藤さん」

「愛子でいいよ～、　あと敬語もなし。私たち同じクラスメートなんだからね！だから私は夢希て呼ばせてもらうから。改めてよろしくね、夢希」

「ええ、よろしくね愛子」と会話が盛り上がってきたその時

「あら？何の話してるの？代表、愛子」

「……え！？」

そこには想いを寄れる人と同じ顔をした女の子がそこにいた。

三話　学校初日その３（後書き）

翔子がシスコン気味に（＾―＾；）　感想おまちしてます

四話　学校初日その４（前書き）

前回長く書いてみたら思いのほか疲れたのでこれからはマイペースで書いていこうと思います　ｍ（＿＿）ｍ

四話　学校初日その４

「あら？何の話してるの？代表、愛子？」

「え！？」

そこには想いを寄せる人と同じ顔をした女の子がそこにいた

「ひ、秀吉君！？……な、何故女子の制服を？；」と私が言うと

「…慣れてるけど、あのバカと同じ目で見られるのはムカつくわね、慣れてるけど（小声）はあ、まあ双子の姉弟なんだから仕方ないか」と秀吉君（？）は溜め息混じりに呟いていた

「あの～秀吉君じゃ？」と聞くと

「残念だけど私は秀吉じゃないわよ。私は木下優子、木下秀吉の姉よ。ちなみにうちの弟なら最低クラスのＦクラスよ」

「ええ～！？秀吉君にお姉さんいたんですか～！見分けつきませんでしたよ！」
と言うと

「あ、あのさ、そのセリフ、あなたには言われたくないんだけど；」

あ、そうでした；私たちも、双子なんでした；

「す、すみません；見間違えちゃって；私、霧島夢希です、よろしくお願いします；」

私は木下さんに謝りながら自己紹介した

「ああ、別にもういいわよ。慣れてるから（小声）。こちらこそよろしくね。あと私も優子でいいから。ところでどうしてあれのこと知ってるの？」と聞いてくると

「あ、ボクも聞きたいな～、優子の弟君とはどうゆう関係なのかな～？」

「……私も詳しく聞きたい」

う、愛子ちゃんや姉さんまで聞いてきました；

「あ、あはは、そこは乙女の秘密ということではだめですか；？」

『　だめです　』

即答ですか（。□。；）

じわりじわりと迫る三人の悪魔（？）落ち着つきま…ちょ…待っ…、い、いや～～

秀吉君との出会いや秀吉君に一目惚れしちゃったなど全て知られてしまいました；

四話　学校初日その４（後書き）

感想待ってます（T＿T）

五話　私とあの人が出逢うとき（前書き）

相変わらずのゴタゴタな作りですが暖かい目でみてやって下さいm
（＿＿）m

五話　私とあの人が出逢うとき

色々聞かれて思い出した、思い返すように私は秀吉くんと出逢ったあの日のことを振り返っていた。

三年前の春、私は公園のベンチでふて腐っていた

「やっぱりもう無理なんだよ……歩くことなんて…」

私が中学一年の時に病気にかかり、治療のために実家を離れた大きい病院で治療していた

二年の歳月をかけて病気は治療出来たのだがお医者様によると「治療は出来ましたが治療するまでの間に身体の筋力が大幅に下がっています。リハビリで身体を戻していくしかありません。リハビリは

はやく直したいということ本人の意志が大きく関わってきます」と言われた

最初のうちははやく直すぞという意気込みでリハビリに望んでいたがなかなか動かない自分の身体、上手くできないリハビリなどでどんどん意気消沈していき、ここ最近では絶望感も出始めあまりリハビリをしていなかった

気分転換を進められ車椅子で来た公園のベンチでかつての自分を思い出したり、リハビリがうまくいかない悔しさや、無気力な自分が情けなくなり泣きそうになった、その時だった

「どうしたのじゃ？どこか痛いのかの？」
とちょっと普通とは違う口調で心配そうにこっちを見つめる女の子のような顔つきの男の娘がそこにいた。

「え？男の娘？」と知らずに呟いていると

「お、お主！儂が男だとわかるのか？」と少々興奮気味に聞いてきた

「う、うん；そうだけど？」と答えると

「う、嬉しいのじゃ～！儂のことを一目で男だとわかってくれるのはそうはいないのじゃ～！」とあまりにも嬉しかったのだろう、涙目で熱く語ってきた

……どうしよう、今の目の前のこの子を見ると「やっぱり女の子に見えたよ」と言い出しそうな自分がいる；と葛藤していると

「ところでどうして泣いておったのじゃ？もし良かったら儂に話してはもらえんかの？（ニコ）」

「！！！！？」その男の子（娘？）の笑顔を見た瞬間顔が暑くなって心臓がドキドキと激しく鳴り始めた。

私は慌てて顔を背けると落ち着け落ち着けと自分に言い聞かせた

ようやく落ち着いて顔を戻すと彼は黙って私が言い出すのを待ってくれていた

思い切って話してみようと思って口を開くと自分の病気のことやリハビリが上手くいかなくて悩んでいることなど自分でも不思議なくらい話していた。話している途中さっきまで我慢していた涙がポロポロと出てきて抑えることができなかった

そんな私を彼は黙って話を聞いていてくれた

話終わると黙ってポケットからハンカチを取り出すと涙を拭いてくれた

「あ、ありがとう（〃〃）」

「……そのリハビリ儂も手伝ってもいいかの？」

「え！？」

「そのかわり、儂の練習を手伝ってくれんかの？」

「れ、練習ってなんの？」

「儂は演劇をやっておっての、一人で発声の練習とかしておるのじゃが誰かにちゃんとできておるか見て欲しいのじゃ、だめかの？」

「いいけど、そのくらいで私のリハビリ手伝ってもらうの悪いし、それに、その…私たち初対面だし」

「なに、これも何かの縁じゃ！……だめかの？（上目使いで）」

う、その顔でその上目使いとは、卑怯じゃないかな〃〃〃

「え、え～と、じゃあ、お願いしてもいい？；」

「うむ！お、そうじゃまだ名を名乗ってなかったの。儂は木下秀吉じゃ」

「わ、私は霧島夢希」

「よろしくなのじゃ」

「うん、よろしくね！」

これが秀吉君との出逢いでした。

五話　私とあの人が出逢うとき（後書き）

過去話は難しいですね～（^―^；）　次回に続きます

私とあの人が出逢うとき（その2）（前書き）

過去話はなかなか難産で難しい（－．－；）相も変わらずのゴタゴタな作りですがみてやって下さい

私とあの人が出逢うとき（その2）

秀吉君との出会った次の日からお互いの練習が始まった

「う、くっ、んぐ」

「慌てなくてよいからまずはゆっくりと」

今私は車椅子から立ち上がって、両手を手すりに捕まって右から左、左から右と行き来していた

秀吉君はそのたびに私の行く先に居て、励ましてくれたり私が倒れないように見てくれている

「さっきより、上手くなってきたのじゃ」

「本当!?よし、それならもっとペースを上げよう!」

「そろそろ休んだほうがよいぞ？もう何時間も練習しておるのじゃぞ？無理は禁物じゃ」

「大丈夫だよ！」と言ってまた歩き出そうとした時、まだ動き慣れてない足を無理に動かそうとしたため足が躓き、踏ん張ることが出来ない私は来るであろう痛みに備えて目を閉じた……

一向に痛みが来ることがなかった。その代わりに来たのは暖かい感触だった。目を開けてみると

「ふ～、ギリギリ間に合ったのう。怪我とかないかの？」

そこは秀吉君の腕の中でした（〃〃）

「う、うん、ありがとうね（〃〃）大丈夫だから」と激しく鳴り始めたドキドキを鎮めるために静まれ静まれと念じていると

「なんじゃ？顔が真っ赤じゃぞ？体調でも崩してしまったかの？」
と私の額に手をおいていた；

「だ、大丈夫たら大丈夫だよ；体調も崩してないから！うん平気だから！」と少々テンパりながら答えると

「そうかの？ならよいが、さっきみたいになっては駄目じゃから休憩じゃ！よいな？」とちょっと強めに言われちゃったので大人しく従うことにした

「それじゃあ夢希が休憩してる間儂の練習を見て貰おうかの、よいかの？」

「うん、喜んで！でもどんなことするの？」

「なに、そう難しいことではないのじゃ、あいうえお順に発音していくのでそれを聴いておかしなところがあったら教えて欲しいのじゃ」

「でも、私そういうのよく分かんないよ?」

「はは、別に難しく考えなくてもいいんじゃ、なんとなく感じた程度でよいのじゃ」

「そうなんだ。うん、わかった」

それから私は秀吉君の発音の練習に付き合った。秀吉君の声はとっても綺麗で目を閉じて聴いていた。

「どうだったかの?おかしなところはなかったかの?」

「ううん、全然!とっても綺麗な声に発音と言うことないよ~」と言うと

「そ、そうかの;そう言って貰えると嬉しいのじゃ(〃〃)ありがとうのう」と恥ずかしそうにお礼を言ってきた。ああ、そんな仕草をするから女の子に見えちゃうんだよ~と言いそうになったのは秘密である

「あとこんなのも出来るのじゃ」というと少し息を吸うと

「お前のやったことは、全部まるっとお見通しだ！」ととあるインチキマジシャンが主人公のドラマの名台詞を言った

「す、凄いよ！本物と見分けつかないほど瓜二つの声だったよ！」

「声真似は儂の十八番じゃからな！」

こんな風に楽しくリハビリの日々は過ぎていった。ひとりでリハビリしていた時とは想像出来ないくらいにリハビリが進んでいた。これも秀吉君のおかげだと思う。……そして秀吉君のことが好きだとおもう（〃〃）多分最初に会ったときに一目惚れしちゃったのかな；。告白とかどうしようかなと考えていた時

終わりは突然やってきた。

私とあの人が出逢うとき（その2）（後書き）

まさかまだ続くとは（。□。；）　次回で過去話終わる……予定です…多分

私とあの人が出逢うとき（その3）（前書き）

感想送ってくれた方々ありがとうございます（＾Ｏ＾）励みになりますのでこれからもよろしくお願いします。グダグダな作りですがどうぞ

私とあの人が出逢うとき（その3）

「今日で…お別れなのじゃ」

いつものように秀吉君に会うと、そう申し訳なさそうに、そして、悲しそうにそう言った

ここに滞在していたのは家の事情で来ていたらしく、家の用事が済んだので帰らなくてはならなくなったらしい

「そうなんだ……、そ、それなら仕方ないよね…」

「すまぬのじゃ…最後まで手伝うことが出来なくて…」

本当に申し訳なさそうにしている彼の顔を見るのが辛かった…、あの楽しかった時間はもう終わってしまうのかと思うと悲しくなった

私は秀吉君に心配させまいと気丈に振る舞って話を変えた

「あ、あのさ、秀吉君はどこに進学するの？歩けるようになったらさ、遊びに行くからさ」

その後秀吉君が何か言っていたけど聞こえなかった。顔は平気そうに装えても心はもう限界にきていた。秀吉君に告白も出来ないままもう会えないのかと心が悲しみに包まれようとしていた

「儂は文月学園に進学するつもりじゃ」

その一言を聞くまでは……

「文月学園！？それ、本当？秀吉君！」

「う、うむ；学費が一般よりも安いようじゃし、なにより普通の学校とは何か違うことがあるらしいしの」

文月学園……以前姉さんと電話で話していた時姉さんが進学する学校として名前が挙がっていたのでその存在は知っていた。その文月学園に秀吉君が進学する！それを知ったとき私の中で既に悲しみはなくその代わり喜びと3つの目標が出来た

「実は家族に待ってもらってここに来たのじゃ…、そろそろ行かねばならん。夢希、げんき」

「秀吉君！」

だから私は「さよなら」ではなくこう言った

「秀吉君！「またね！」」と

「3つの内の2つ、身体を思いっきり動けるようにすること、文月学園で姉さんと同じクラスになること。　この2つはなんとか達成、あとは」

「あとは何なのかな～？」といきなり後ろから現れた愛子；心臓に悪いよ～；

「そ、それは、その…、ひ、秘密！（〃〃）」

「え～、教えてよ～夢希～♪」

「甘えた声出してもだめ～；」

三つ目の目標は秀吉君と再開して告白すること！　この恋が叶いま

すように！

私とあの人が出逢うとき（その3）（後書き）

と、とりあえず過去話終了です；なにか強引なところもありましたがご容赦を（。□。；）

第六話　学校初日その5（前書き）

書いては消して、書いては消してと少しスランプ気味でしたがなんとか形になりました（。□。；）　作りは相変わらずのグダグダですが、良かったら見てやって下さい

第六話　学校初日その5

「それじゃあ、そろそろ愛しの秀吉君に会いに行くのかな～？夢希♪」

昔のことを色々聞かれた（尋問に近かったような気がするが；）後、愛子がニヤニヤと私に聞いてきた

「う、うん。（〃〃）で、でも向こうは私のこと覚えてないかも知れないし、それがちょっと怖いんだ」と不安そうに言うと

「だーいじょぶだよ！ボクはまだ、木下君にあったことないけど聞いた限りじゃ誠実そうだし、何より押し潰されそうな夢希を見て声をかけてくれた、夢希は夢希で木下君を男の子として認めた。認めてくれた事そんなに嬉しかったなら向こうもきっと覚えてるって☆」と愛子が私の不安を振り払うように言ってくれた

「うん、ありがとう。少し勇気出たよ！……Fクラスに行って来るね！」

「残念だけどそれは無理よ」と振り向くとプリントの束を持った優子がいた

「優子、どうして無理なの？」

「FクラスがDクラスに宣戦布告したからFクラスとDクラスで戦争が起こるからよ。その間私達は自習よ」と持っていたプリントの束をペラペラさせてそう言った

「ありゃあ～、残念だったね、夢希」

「仕方ないよ、召喚戦争中は他のクラスは手出し無用だしね」

「ところでFクラスとDクラスどっちが勝つと思う？」と愛子が聞いてくると

「私は是非ともDクラスに勝って貰いたいわ！なんの努力もせずに

設備を変えようなんてそんな虫のいい話はないわよ」と機嫌悪そうに優子が答えると愛子は

「Fクラスは Dクラスとの戦力差を知ってるはずだからなにか意外な切り札を持ってるかも！という訳でボクはFクラスかな」

「……私はFクラス」

「うわ！？……代表いたんだ；」いつの間に後ろにいたんですか；姉さん；

「Fクラスの代表は雄二、あの雄二が何の策もなく戦争を起こすなんて有り得ない。だから必ず勝てる切り札を持ってる」と姉さんは自信に満ちた顔で答えた

「え？Fクラスの代表て雄兄なんですか？姉さん」

「うん、Fクラスの代表は雄二」

Fクラスの代表はあの雄兄だったのか、だったらこの戦争の勝敗は分からなくなった。かつて神童と呼ばれたことがある雄兄のことだ、姉さんのいう通り何の策もなく仕掛けるなんて有り得ない。なにか有るのは確かだろう。あ、ちなみに私が雄兄と呼んでいるのは幼い時にお兄ちゃんみたいな存在だったのでそう呼んでいて今に至るという訳です。って誰に説明してるんだろ、私；。

「私の予想は「Fクラス（だよね～）（でしょ）（…）」…あう；」
何故か言う前に言われてしまった

「好きな人に勝って欲しいってのが恋する乙女の考えだしね～」（コクコク）
と言う愛子に頷く姉さん

「べ、べつにそう言う意味で言った訳じゃ…」

「顔真っ赤にしてそう言っても全然説得力ないわよ、夢希」と反論しようとした所を容赦なく潰す優子；

「はいはい、余計なおしゃべりはここまで。自習のプリントやるわよ」

『は～い』と言うと私達は自習のプリントをやり始めた。プリントをやりながら秀吉君達が勝つように祈ったのはないしょ（〃〃〃）

下校時間になり、Fクラスは下校中の生徒に混じっての戦闘を開始した。Fクラスの皆がDクラスの面々を取り囲み、次々と討ち取っていたがDクラスの本隊が動くと状況は一変した

「本隊の半分はFクラスの代表を狩りにいけ！他のメンバーは囲まれているやつを助けるんだ！」

「Fクラスは全員一度撤退しろ！人ごみに紛れて撹乱しろ！」

「逃がすな！個人同士の戦いになれば負けはない！追い詰めて討ち取れ！」

「どうやら、Ｆクラスが追い詰められてきたようね」と優子が戦局見ながら言うと

「でもＤクラスが追討にかかった分、戦力が分散してＤクラスの代表の防備が手薄になったから奇襲を仕掛ければまだ勝ってるかもしれないよ！」私がそう反論すると

「夢希、クラスの代表はそのクラスの最高成績者なの。Ｆクラスの本隊が囲まれて動けないこの状況で単独でＤクラスの代表を討ち取れる戦力がＦクラスにあるのかしら？」とすかさず反論してきた

確かにその通りだ、雄兄がいる本隊はＤクラスに囲まれて動けないし、ほかのメンバーも、個人同士の対戦にもっていかれ次々と戦死していく状況。万事休すかと思われた時、木刀を持った召喚獣を連れたＦクラスの男子が奇襲を仕掛けようとしたが、近衛部隊に阻まれて失敗に終わってしまい、今度こそ終わったと思ったが気がつくとＤクラスの代表の後ろにピンク色の背中まで届く柔らかそうな髪をした女子生徒がそこにいて、床から魔法陣が現れＤクラスの代表と戦闘を開始

『Ｆクラス　姫路瑞希　ＶＳ　Ｄクラス　平賀源二

３３９点　ＶＳ　１２９点　』

一撃でＤクラス代表を下して、戦いに決着がついた。

第六話　学校初日その5（後書き）

感想お待ちしています。励みになりますのでよろしくお願いしますm（＿＿）m

第七話　再会（前書き）

おかげさまでＰＶアクセス１万を超えました！これも見て下さる皆様のおかげです！ありがとうございますｍ（＿＿）ｍ
作りはグダグダなお話ですがこれからも見てやって下さい

第七話　再会

「姫路さん!?どうして姫路さんがFクラスに?」優子が大声だして驚いていた

「え?そんなにすごい人なの?」と私は愛子や姉さんに聞いてみた

「うん、入学して最初のテストで学年二位を叩き出したからね」

「……その後のテストにも上位一桁以内に常に名前があった」

最初のテストでいきなり学年二位で、しかもその後のテストも上位一桁をキープ!?;;なんでそんな凄い人がFクラスにいるんだろう?

「あの話、本当だったみたいね」優子がなにかを思い出したように言った

「あの話？優子何か知ってるの？」

「聞いた話なんだけど、姫路さん振り分け試験の途中で高熱出しちゃったみたいでね、それで試験途中で退席して無得点扱いになったみたいなの」

それを聞いて、理不尽だと思った。具合が悪くなって退席するだけで無得点扱い。それはあんまりだと思っていると

「確かにテストに備えて体調管理も重要だとはおもうけど、体調を崩して退席で無得点扱い、てのは理不尽だとは思うけどね。まあ、それがこの学園の方針なら仕方ないんだけどね」と意外にも優子がそう言っていた

「へ～」

「な、なによ？；」

「いや、意外だな～と思って優子なら「体調管理が出来ないのが悪

い！」とか言うのかなと思って」

「あ、あのね；私だって鬼じゃないのよ？；そりゃ常日頃体調管理には気をつけなきゃいけないけど、完璧な管理なんて出来ないし、小さなきっかけで体調を崩すことだってあるしね。そういった時は再試験とかあればいいんだけどね」

「優子って、なんだかツンデレみたいだよね」

「な、なに言ってるのよ！？」

「厳しいこと言ってるな～と思ったらさっきみたいに優しいこと言ってるし」

「別に厳しいことなんて言ってないし、姫路さんのことを思って言ってるんじゃないんだからね！勘違いしないでよね！」

「まさにツンデレそのものじゃないですか～♪」と言うと

ぷるぷるぷる＃＃（身体が震えてる）

あ、まずい；弄る加減間違えたか；こうなってしまったら私が取る方法はひとつ！

「人をからかうのはいい加減にしなさーい！＃＃」

「ご、ごめんなさ～い；」

急いで鞄を取ると全力で教室を抜け出した；

その後　なんとか逃げ切り、気がつくと屋上に居た。ま、まさかあそこまで追って来るなんて今日ほどリハビリを止めずに頑張ってきた自分を誉めてやりたいと思ったことはなかった；

「しかし、ここ眺めいいな～、夕日は綺麗だし、風も気持ちいい」

うーんと背を伸ばし流れる風を身体で感じていると屋上に上がってくる足音が聞こえた。もしや、優子！？と思い急いで隠れると

「やれやれ、今日のDクラスとの戦争でだいぶ時間を取られたのう。今日は発声練習だけであがるかの」

再会を夢見た相手がそこにいた

ひ、秀吉君！？；な、なんて声掛けよう；と思いながらも思い人の顔をこっそり見ていた
昔に比べて一段とカッコ良くなって、また一段と、お、女の子ぽくなっちゃってました；
もう少し見ようと近付こうとしたとき、恐らく、ここで誰かが飲んでいたのだろう、空き缶を蹴って音を出してしまった

「誰じゃ！？誰かおるのか？」

気付かれてしまった私は気まずい顔をしながら
出た
「あ、あはは；こ、こんにちわ；」とこれまた気まずい挨拶で前に

「お主は、Ａクラス代表の、霧島？　じゃがなにやら感じが違うような？」

どうやら姉さんと勘違いしているみたいだ。多分優子に追いかけられている時に髪留めが外れて髪が下ろしてしまったためだろう。でも！；こういう時は一発で見分けて欲しい；
うう、姉さんと瓜二つなこの容姿が恨めしい；…姉さん悪くないけど；
なんとか気付いて貰わないと！と思い

「昔みたいにインチキマジシャンが主人公の、あの名台詞言える？秀吉君」と
もし、あの大切な思い出を忘れられていたらどうしようという不安を隠しながら言うと

「もちろんじゃ！って、どうして、お主が……え？」

「久しぶり、秀吉君」と私は髪を元のポニーテールに戻しながらそう言った

第七話　再会（後書き）

感想おまちしております（＜＿＞）

再会　その２（前書き）

普通免許の学科試験で投稿が遅れました；結果は…察してやって下さい；仕事がある身で平日休んで行くのは少々キツいですね；
なんとか出来ましたので見てやって下さい

再会　その2

「も、もしかして、夢希、　なのかの？」と驚いた顔で秀吉君が聞いてきた

「うん、そうだよ！久しぶりだね、秀吉君」と満面の笑みでそう答えた

「足のほうは、もう良いのか？」心配そうにそう聞いてた。あー！もう可愛いです！秀吉君！

「うん、これも秀吉君のおかげだよ。あの時、秀吉君が励まして、私にまた希望をくれたから。だから、秀吉君が帰ったあとでもリハビリを続けることが出来て、今はこの通りに動けるようになったからね」とその場で一回転し、元気な姿を見せた

「良かったのじゃ、儂もとっても嬉しいぞ♪（ニコッ）」

！！！？　その笑顔は反則だよ；；（〃〃）

急いで顔を背け真っ赤になった顔を隠した

「?どうかしたのかの?」

「う、ううん、な、なんでもないから;;」

「そうか?ならいいんじゃが。あ、ところでどうして夢希はこの学園に居るのじゃ?」

「うん、それは、ハッ!(落ち着け、私。この状況をよく見ろ、綺麗な夕日に、だれもいない屋上、2人っきり…こ、これは、告白するに千載一遇のチャンス!秀吉君に好きだって告白しよう!)そ、それは、ね(〃〃)」

「それは?」

「そ、それはね!」

「それは？；」

「そ、それは、……ね、姉さんがこの学園に進学するて聞いて、わ、私もここにしようと思って；は、ははは；（私のバカ～；；せっかくの告白のチャンスが～（Ｔ＿Ｔ））」

「そうじゃったのか、なるほどのう」

「と、ところで話は変わるんだけど、秀吉君、やっぱりここでも演劇部に入ってるの？」

「うむ！儂にとって演劇部はなくてはならない存在じゃからな」と嬉しそうに答えた

「なら、昔やってた発声練習とかは止めちゃった？」

「まあ、確かに回数は昔に比べたら減ったが、放課後、部活が終わった後にたまにこうやって屋上でやったり、休日は部屋の中や天気が良ければ公園や川辺などで練習したりするぞ」

「な、ならさ、また昔みたいにさ、その練習手伝ってもいい？」またあの時みたいに秀吉君の手伝いをしたいと思い、そう言うと

「良いのか？夢希は何か部活とか入らぬのか？」

「うーん、これだ！ていうのがなかったし、それにあの時は秀吉君のほうより私のリハビリのほうに時間かけて貰っちゃったでしょ？今は自由に動けるようになったし、今度は私が手伝いさせてくれないかな？」それを聞いた秀吉君はしばらく悩んだ後に

「…なら、お願いしても良いかの？出来るときだけでいいからの」

「うん！喜んで！また宜しくね！」と手を出し握手を求めた

「こちらこそ、また宜しくなのじゃ！また夢希と会えて嬉しいのじゃ！」そう言って握手してくれた。
だ、だから、その笑顔は反則、ごにょごにょ…
顔を再び真っ赤になって耐えられなくなってきたので

「え、えーと、そろそろ帰るね；；、また明日ね、秀吉君！；」そう言って全速力で階段を下りた

一階まで下りるとようやく落ち着き

「や、やった～♪」と小さくガッツポーズしていた

告白は失敗しちゃったけどまた秀吉君と一緒にいられる口実出来たし、少しは前進だよね！と喜んでいると

ガシッと肩を掴まれ振り返ると

「夢希～、見～つけた」とどこぞの世紀末覇王のオーラを纏った優

子が笑顔でこちらを見ていた…

「Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！？（。□。；）」

優子にきつくお説教を受けた後家に帰った…うう…ひどいよ～

家に帰ると姉さんに手伝ってもらって荷物を片付けている途中で秀吉君との事を思い出してニヤニヤしていると姉さんから

「…夢希、ちょっと、怖い；」と言って少し引かれてしまった。失礼な！

今日一日ドタバタと忙しいかったけど、秀吉君と再会できていい一日なったなと思いながらベッドに入りました

おやすみなさい～

再会　その２（後書き）

ご意見ご感想ありましたらお願いしますｍ（＿＿）ｍ

第八話（前書き）

なんとか出来上がりました（^＿^；）相変わらずのグダグダな作りですが見てやって下さいｍ（＿＿）ｍ

第八話

秀吉君との再会を果たして数日が経った。その数日は昔と同じように秀吉君の練習の手伝いを再開したり、姉さん、愛子、優子の三人に学校を案内してもらったりとどれも内容の濃いものだった。そんな日々を過ぎたある日のこと

「え？私を秀吉君の友達に紹介したい？」

朝、学園に行く途中に秀吉君会うとそうお願いさせた

「うむ、夢希はここに編入してまだ日が浅いから知り合いとか少ないじゃろと思ってな。…迷惑じゃったかの？（上目使い）」

だ、だからそれは；（以下省略）

「ううん、迷惑じゃないよ♪私のことを思って考えてくれたんだから嬉しいよ！私からも是非会ってみたい」

「そうか！なら、今日の昼休みに屋上で、どうかの？」

「うん、わかったよ！楽しみにしてるね♪」

「では、またの」

「またね～」

学園につくと、それぞれの教室に分かれた

秀吉Ｓｉｄｅ

「で、その編入してきた秀吉の友人を俺達に紹介したいと？」背が１８０センチくらいで意志の強そうな目をした赤い色の短い髪をした男、坂本雄二、うちのクラスの代表で男らしいところは密かに憧れておる

「うむ、編入したてで知り合いがあまりおらんから友人なってあげて欲しいのじゃ」

「でも、大丈夫なの？その子Ａクラスなんでしょ？上級クラスの連中って下級クラスを見下す奴とか少なくないでしょ？」ポニーテールでボーイッシュな顔立ちで胸は『男』の儂と同じ、ギロ！？……ふくやかな胸をした女子：、島田美波。ドイツからの帰国子女で日本語があまり読めなかったらしくそのせいでＦクラスになってしまった気の毒な女の子じゃ

「大丈夫じゃ、夢希はそういうことは言わん娘じゃ」

「相手は女子！、…まかせろ、何があっても必ず行く！」

会う相手が女子と分かると途端にやる気を出し何故かカメラをチェックし出したのが土屋康太、異名の寡黙なる性識者（ムッツリーニ）で有名な男子じゃ。どうしてか儂の写真を撮り売ろうとしているのじゃ、儂の写真なぞ買うやつなどおるわけ

「秀吉が言うのだからきっとその子も秀吉と同じく、『美少女』だよね～♪」

…居たのじゃ；

この者は吉井明久、この学園の観察処分者、つまり学園一のバカじゃな

「秀吉？なんか今、凄くひどいこと言われたような気がするんだけど？」

「気のせいじゃあ、気にするな♪　ところで明久よ、何度も言うようじゃが儂は『男』じゃぞ？：；」

「何を言ってるんだい秀吉？どこからどう見ても美少女じゃないか♪」

「…で、会う女の子が木下君と同じく可愛い子ならどうするんですか？ナンパでもするんですか？吉井君？」

ピンク色の背中まで届く髪をし、誰もが守ってあげたくなるような可憐な容姿をした女子、姫路瑞希…だったのじゃが今は黒いオーラを発しながら明久を問い詰めていた；

「それは、ウチも聞きたいわね、吉井」

どうやら島田まで加わったらしい；島田まで黒いオーラを発して；

「だ、だから、それは誤解だよ～；；、ア、アーーーーーー（。□。；）！！」

…明久よ、強くいきるのじゃぞ；

「……」

ふと振り返るとなにやら雄二が考え事をしていた

「どうしたのじゃ雄二？何かあったのかの？」

「ん？ああ、いや、なんでもねぇ。ちょっとな。（まさかとは思うがな…）」

「それでは、皆、今日昼休み、屋上に来れそうかの？」

「ああ、いいぜ」

「ええ、いいわよ」　「…当然！」

「はい、構いませんよ」

「オ、オッケー、…ガクッ；」

皆来てくれるようじゃ♪　昼休みが楽しみじゃ

第八話（後書き）

感想をお待ちしてます（T＿T）　短い文でも励みになりますので；
m（＿＿）m

第九話　初対面ともう一つの再会（前書き）

ちょっとした不具合で、どうやら話が上がってなかったらしいので急いで再投稿しました；　見に来て下さった方どうもすみませんでしたｍ（＿＿）ｍ　相変わらずの作りですが見てやって下さい

第九話　初対面ともう一つの再会

夢希Ｓｉｄｅ

今日の昼休みに秀吉君のお友達と会うことになった。

しかし、私一人だと緊張してしまうので誰か一緒に来て貰おうと考えていた。

優子はＦクラスを嫌っている節があるので

もしＦクラスのメンバーとギクシャクするようなことが起きれば元も子もないので

…とりあえず却下；

本当なら姉さんも一緒に連れて行きたいけど…

もし、今日会うメンバーの中に雄兄が居たら、恐らく姉さんを見たら避けるか、逃げるかもしれない。

雄兄があの勘違いをやめてくれたら、姉さんの恋も早く実というのに…

となると、愛子なら大丈夫かな。
愛子は上級クラスとか下級クラスとかそういうことは考えないだろうし…

「という訳で、今日の昼休み空いてる?愛子;」

「いきなりだね、夢希;。まあ、今日は予定入ってないし構わないよ」

「ありがとう~、愛子。一人だと緊張しちゃうからさ」

「あっはっは、別にいいよ~気にしないで♪ボクもFクラスを見てみたい理由があるから。」

「理由?」

「気になってたんだよね~、だってさDクラス相手とはいえ格下のFクラスが勝者だよ?気にならない訳ないじゃない♪」

「そうなんだ。じゃあ、お昼食べた後に行くとしてせっかく天気もいいんだし、屋上で食べようよ。」

「ん、ＯＫ♪」

そして、昼休みになり、私は愛子と一緒に屋上に向かった。

屋上に向かうとそこには、秀吉君を含む男子三人がいた。

「あ、あれ？どうして霧島さんが？確か秀吉の友達が来るんじゃなかったの？秀吉；」

秀吉君を除いた二人の男子のうち、女装が似合いそうな男の子が慌ててそんなこと言っていた。

「霧島翔子は、私の姉さんだよ。私は妹の霧島夢希です。よろしくね」

「そうだったんだ；、僕は、吉井明久、よろしくね、えーと妹さんて呼んでもいい？名前はちょっとまずいから；」

「なんでまずいの？」

「呼んじゃうと、ちょっと、というかかなり危ない集団になにされるか分からないから；；（小声）」

「???」

そんな話をしていた時、

カシャカシャカシャカシャカシャカシャ！！！！！

「え、え?:;、な、何?:;」

いきなり周りでカメラのシャッター音が溢れんばかりに鳴り響いた。

「ムッツリーニ、その辺にしときなよ?妹さん、驚いちゃってるよ?」

吉井君がそういうとさっきまであれほど鳴っていたシャッター音が消え、振り返ると、そこには背丈が吉井君と同じくらいで片手にカメラを持った男の子がいた。

「…土屋康太、よろしく」

「う、うん、よろしくね:;、ところで、さっきのムッツリーニて?」

と、吉井君に聞いてみると

「あ、ああ～、ただのあだ名だよあだ名；（ムッツリスケベって意味は教えたほうがいいのかな？；）」

「へ～、君がムッツリーニ君なんだ♪なかなか面白い男の子だね～♪」

「…誰？」

「おっと、自己紹介がまだだったね」

「ボクは、夢希と同じくＡクラスの工藤愛子、以後よろしく～♪今日は、夢希の付き添いで来たんだ」

愛子はスカートの裾を摘むと

「じ・つ・は、この下、…何も履いてなかったりして♪」

「ブッハァァァ！？（鼻血の滝が）」

「つ、土屋君！？だ、大丈夫！？血が大量に；」

私が慌ててそう言っている隣で、吉井君が慌てることなく

「ああ、大丈夫だよ、妹さん。いつものことだから。秀吉、ムッツリーニの鞄から輸血パック取って」

「うむ、これじゃな」

二人とも慣れた感じで輸血パックを取り出し、輸血していく。

「な、なんだか手慣れてるね；」

「まあ、毎回やってればね…」
「慣れてくるというものじゃ…」

『はあ……』

二人とも、何かと苦労してたんだね；

「もう～、愛子も変な冗談言っちゃだめだよ？」

「あはは、ごめんね～♪　実は、スパッツ履いてたんだよね～」と

スカートを捲りスパッツを見せる

「くっ！謀ったな！」

土屋君、鼻血を出しながら怒られても全然怖くないんだけど；

「もう、何やってるのよ、土屋、それに吉井達も」

「あ、あの～、土屋君、大丈夫ですか」

振り返るとそこには、ポニーテールにボーイッシュな顔立ちの女の子に、Ｄクラス戦で勝利を決めた、姫路さんがそこにいた。

「はろはろ～、ウチは島田美波よ。よろしくね」

『（あなたが）（キミが）島田美波さん？』

私と愛子は同時にそう言っていた。

「え？なになに？ウチのこと、知ってるの？」

「う、うん、話で聞いたことがあったから」

「話って、どんな話なの？」と期待している目で聞いてきた。

「え、え～とね、Ｆクラスに帰国子女の可愛い女の子がいるって話を聞いてね；、ねえ？愛子」

「う、うん；そうそう、それで島田さんのことを知ったんだよ。あはは」

「可愛いだなんて、ちょっと恥ずかしいな（〃〃）」

『（い、言えない、男子の会話の中で、彼女にしたくないランキングでよく聞く名前だから、なんて言えない；）』

と、私と愛子は心の葛藤と戦っていた；

「美波ちゃん、可愛いですもんね。あ、自己紹介がまだでしたね、私は」

「姫路瑞希さん、だよね？見てたよ、Ｄクラス戦。サッと現れたと思ったら、あっという間Ｄクラスの代表倒しちゃうしね」

「そうだね～、いきなりＦクラスとして宣戦されるんだから、Ｄク

ラス代表も意表つかれまくりで、唖然としてたしね」

「あはは；、振り分け試験の時、私」

「ああ、その話は優子から聞いたよ。で、どう？Fクラス楽しくない？」と愛子が聞くと

「そんなことないです！今、私すごく楽しいです！」と言っている瑞希の視線の先を読み取った愛子が

「そうだよね～、……好きな人も一緒だしね♪（小声）」

「え、ええ！？（〃〃）え、え～と、と、ところでお二人は？」

瑞希が照れ隠しにそう言うと

「ああ、自己紹介がまだだったね。ボクはAクラスの工藤愛子。それで、隣にいるうちの代表にそっくりなこの子は、代表の妹の、霧島夢希♪　よろしく～♪」

「霧島夢希です、よろしくね、姫路さん、島田さん」

「はい、こちらこそよろしくお願いしますね、工藤さん、霧島さん」

「『霧島さん』、それだと私か姉さんか、わからなくなるから、夢希でいいよ」

「ボクも、工藤さん、じゃなくて、愛子でいいよ♪」

「それじゃあ、私のことも、瑞希て呼んで下さいね、愛子ちゃん、夢希ちゃん」

「ウチのことも美波て呼んでね♪その代わり、二人のことも、愛子、夢希、て呼ぶからね」

などと女の子どうしで盛り上がっていた時

「まさかとは思っていたが、……こっちに戻って来てたんだな、夢希」

振り返るとそこには「よっ♪」と柔らかい表情をした、幼なじみの雄兄がいました。

「はい、お久しぶりです、雄兄♪」

こうして、Fクラスの面々との初対面ともう一つの再会があったのでした。

第九話　初対面ともう一つの再会（後書き）

ご意見、ご感想がありましたら、どしどし送って下さい。あともう一回だけ再会の話続きますのでｆ＾＿＾；

初対面ともう一つの再会　その２（前書き）

なんとか出来上がりました（^＿^；）

見てやって頂ければ幸いです（。□。；）

初対面ともう一つの再会　その2

「もう身体は大丈夫なのか？」雄兄が似合わないくらい心配そうな顔で言ってきました。

「はい、もうこの通り、大丈夫ですからそんな心配そうな顔しないで下さいよ♪　全然似合いませんよ？」

「う、うるせーな、似合わなくて悪かったな！」

こんな風に昔と同じように雄兄と話していると吉井君が

「あのさ、雄二、ちょっと聞きたいことがあるんだけどさ？」

「？どうした、明久？」

「なんか妹さんと親しい感じで話してるけど、どういう関係なの？」

「ああ、こいつと姉の翔子は、俺の幼なじみだ」

「ふーん、そっかぁ。」

何だろう?吉井くんとそのうしろの土屋くんの雰囲気が…

と、私が思ったその時

「殺せ!!!!!」

そう言うと、いきなり、吉井君と土屋君がカッターナイフを取り出し、雄兄に襲いかかった

「うお!?、いきなり何しやがる!?明久、ムッツリーニ!!」

「うるさい!!、妹さんみたいな可愛い子だけじゃなく、そのお姉さんとも幼なじみとは!!」

「…許すまじ!!」

どうやらあらぬ誤解で雄兄がピンチのようです。私がなんとかしないと

「ちょ、ちょっと、待って下さい!雄兄と私は本当にただの幼なじみなだけです!二人が考えているような関係じゃないんです」

「「…本当に？」」

「はい」

「夢希、…うんうん♪人は長い歳月によって成長するというのは本当だな。俺は嬉し」

「あ、姉さんと雄兄は、お互い裸を見せ合った仲ですけどね」

「おいぃぃぃぃ！！」

「あ、それは幼い、」

幼い頃の話と言いかけた時

バン！！と屋上の入り口が開いたと思ったら、いきなり周りが暗闇に包まれ、気がつくと黒い覆面をして鎌を持った集団に囲まれていた。

「え、ええ！？な、なんなの？この人達！？というか、ここ、屋上なのにどうやって暗くしたの！？」などとパニクる私をよそに

「これより、異端審問会を開く、坂本雄二、汝は、我らとの血の盟

約を破り、幼なじみの女子の裸を見るという大罪を犯した。と言うわけで…即刻死刑！！」

「お前らと血の盟約なんざ、結んでねえし、みたのは幼いガキの時だ！　夢希！状況を更に悪化させるんじゃねぇぇぇ！！」

勢い良く走り出すと階段を駆け降りて行き、黒い覆面集団が凄いスピードで追いかけて行った。

「……失敗しちゃいましたね、えへ♪」

「えへ♪、じゃないわよ；、坂本大丈夫かしら；、うん？そう言えば、土屋と吉井は？随分静かだけど？……こういうことね；」

「ん？、…なるほど」

美波の視線の先を辿るとそこには鼻血を出して倒れてる二人が居た

「ところで、瑞希、美波、どこに行ってたの？」

「あ、はい、私と美波ちゃんと坂本君とで学食にパンと飲み物を買いに行ってたんです」

「だから、場所取りと買い出しに分かれてたのよ」

「そっか、じゃあ、そろそろ、お昼食べようか、雄兄もそろそろ帰ってくる頃だと思うし」と言っていると後ろから

「ぜぇ、ぜぇ、夢希、お前という奴は！」

「あ、あはは、まあまあ、雄兄、ひとまず落ち着いて、お昼でも食べましょうよ、食べないと時間なくなっちゃいますし；」

そう言うと、まだ不満げな顔をしつつも、なんとか座ってくれました。

「ほれ、明久もムッツリーニも起きるのじゃ、はやく昼食食べねば、時間がなくなるぞい」

そう言って、秀吉君がなんとか二人を起こし、お昼を取ることになりました。

「「いただきまーす」」

「あれ？夢希と愛子はお弁当なの？」

「うん、私はいつも、自分で作ってくるよ」

「あはは、私は、お母さんが作ってくれたのだけどね；部活とか忙しいから」

「ところで、吉井君は何も買わなかったの？水筒しかないみたいだけど？」

「何を言っているんだい？妹さん。これが僕の昼飯さ」

……水（塩入り）

何だろう、猛烈に吉井君の生命の危機を感じるのは私だけだろうか……

「あ、あの～、吉井君？良かったら、どうぞ」

私はそう言うと少しお弁当を吉井君に分けてあげた。

「え！？いいの？ありがとう、妹さん！」と嬉しそうに受け取ると

「「「なっ！！」」」と美波と瑞希、そして何故か秀吉君が大きな声を上げていた

「吉井君！！私のパンもあげます！」

「ウチもあげるわよ！吉井！」

「ど、どうしたの？姫路さんに島田さんも、って、痛い、痛いよ！；どうして背中を叩くんだよ？秀吉～；」

「姫路や島田からパンが貰えるのじゃから、べ、別に夢希の弁当、食べなくても、良いではないか；（〃〃）（小声）」

「はは～ん、そう言うことなんだ♪」

愛子が何かに気がついたみたいで、ニヤニヤとした顔で秀吉君に近付くとなにやら言ってるみたいだ

「弟君は、夢希のお弁当をもらった、吉井君を嫉妬したのかな♪？（小声）」

「な！！そ、そんなことないのじゃ！！」

「まあ、そういうことにしておくね♪（夢希、全然大丈夫、脈大ありだよ～♪）」

なにやら、愛子が私に向けて（ｂ＾ー。）しているみたいだったけど、私は意味がわからず首を傾げるのだった

初対面ともう一つの再会　その２（後書き）

こういう秀吉もどうでしょうか（笑）感想お待ちしてます

主人公設定その2（前書き）

主人公の得意科目や特技などを詳しく書いておきました。これを見てこういう奴なんだなと参考にして下さい

主人公設定その2

名前　霧島夢希
（きりしま　ゆき）

得意科目　国語　日本史　現代社会

苦手科目　数学　保健

特技　料理……かなりの腕前で、どんな料理も再現できる。そう、それが殺人級な料理でも……

カポエラ…足のリハビリが順調にいき、調子が出てきた頃にテレビでカポエラを見て、リハビリと同時に護身術にならないかと思い、その頃から習い始め、姉と同じく天才肌なためかめきめきと上達し、今では雄二の意識を一瞬で刈り取るまでになっている

ポイントカードのポイント集め……買い物をした時必ず集めるほど好き。ポイントカードは人類の英知の結晶らしい（本人談）

姉の翔子に比べて、電気器具の扱いは上手いので、よく姉の翔子にやらされてる

主人公設定その2（後書き）

次はいよいよ試召戦争です。うーん；戦闘シーン上手く書ければいいんですが；　良かったら見てやって下さいｍ（＿＿）ｍ

第十話　これが私の召喚獣（相棒）（前書き）

試召戦争に入りたかったのですがその前にひとつ話を入れて起きたかったので；

相変わらずな感じですが見てやって下さいｍ（＿＿）ｍ

第十話　これが私の召喚獣（相棒）

雄兄達とのお昼の一件から数日が経ったある日の放課後

「そういえば、夢希、夢希はまだ自分の召喚獣出したことなかったわよね？」

優子にそう言われ、考えてみると

「ああ！！、言われてみれば、私、まだ召喚獣出してないよ！！」

「いや、編入してもう何日か経ってるんだら、気付こうよ；」と愛子にまで突っ込まれてしまった。

「こ、こういうので、イメージトレーニングとか必要なのかな；？」

「別に、そんなに大層に構えなくても大丈夫よ、慣れよ、慣れ。手っ取り早く、模擬戦でもしましょうか」

ええ！？いきなり模擬戦から始めるの！？と狼狽しているうちに優子が西村先生を見つけると

「西村先生、模擬戦を行いたいので、承認をお願いできませんか？」

「模擬戦か？いきなりまた、どうしてだ？」

「はい、夢希さんがまだ自分の召喚獣を出したことがないので、模擬戦を行って、その中で、夢希さんに色々教えてあげて、私、夢希さんの力になってあげたいんです」

「困っているクラスメートを親身になって助ける…、まさに生徒の見本！流石だな、木下」

先生の前だと瞬時に優等生の仮面を被り、演じる優子を見て、秀吉君と互角な演技派ではないかと考えていると

優子がこちらを見つめてきて、『余計なこと言うんじゃないわよ、言ったら…分かってるわよね？』

と笑顔だけれど明らかに笑ってない目で警告されてる

これ以上の詮索は危険なので止めにする；

「わかった、では、どの科目での模擬戦をするんだ？」

「夢希、得意科目は何？」

「　え～と、国語と日本史、あと現代社会かな」

「では、西村先生、国語での模擬戦の承認をお願いします」

「わかった、…では、国語勝負の模擬戦を承認する！！」

「え～と、どうやって呼び出したらいいのかな？；」

「こうやって、やればいいのよ、…試獣召喚（サモン）！！」

優子の喚び声に応えて、優子の足元から魔法陣が現れ、そして、西洋風の鎧を装備し、ランスを持った優子そっくりの顔をした召喚獣が現れた。

「はい、次は夢希、今みたいにやれば出来るはずだから、呼び出してみて」

「うん、わかった。……、試獣召喚（サモン）！！」

優子の時と同じ様に私の足元に魔法陣が現れ、そして、召喚獣が現れた。

黒い法衣服に黒いブーツを履いて、シルバーのトンファーを装備し

「へえ～、それが夢希の召喚獣ね、武器はトンファーか」

右腕に黒い腕輪を装備していた。

Ａクラス
木下優子３４７点
ＶＳ
Ａクラス
霧島夢希５１１点

「な！！４００点超え！！てことは、夢希、あんた、『腕輪』装備してるの？」

「う、うん、一応；。まだ使ったことないからわからないけど；」

「だったらちょうどいいじゃない？その『腕輪』の効果、一体どんなモノなのか見せて貰うわ！行くわよ！夢希！」

……

……

……

「夢希！！もう一回勝負なさい！！」

……

「まあまあ、少しは落ち着きなよ、優子。夢希がとどめを刺さずに終了したから良かったものの、刺されたら鬼の補修だよ？」

「うっ；」

「あはは；；」

あの後、私は『腕輪』の効果で優子を追い詰めた。とどめを刺してしまうと西村先生の鬼の補修を受けることになるので止めておいた；

「まあ、いいじゃない、夢希が戦力になるのはわかったし、『腕輪』の効果も使い方次第で私たちに有利になるしさ」

愛子がなんとか優子を宥めてくれて、ひとまず落ち着きを取り戻した

「……わかったわよ、確かに夢希が戦力になるのもわかったし、なにより『腕輪』の効果があれだけのモノなら対戦した価値があると言うものよ」

優子がこれほど誉めてくれるとは…なんか照れくさいな〃〃

「あ、でも！いつか必ず再挑戦するからね！勝ち逃げはさせないからね！」

……どうやらそこは全然諦めてはいないらしい；

とにかく、初めての召喚獣の呼び出し、対戦、そして『腕輪』の使用…、それらが上手くいって、改めて、文月学園の生徒として学校生活を送ってだなと心も軽やかに家に帰った

しかし、翌日、そんな私の意思も関係なく、試召戦争は突然やってきた……

「木下優子！！！！出てきなさい！！！」

続く

第十話　これが私の召喚獣（相棒）（後書き）

次こそ必ず試召戦争に入りますので（。□。；）『指輪』の効果などは次回明らかに♪　ご意見ご感想ありましたら是非お願いしますm（＿＿）m

第十一話　試召戦争Ｃクラス編　その１（前書き）

アニメ二期が始まりましたね。相変わらずの内容で安心しました（ー∀ー）

なんとか話が出来上がりました；また長々と引き伸ばしていますが良かったら見てやって下さいｍ（＿＿）ｍ

第十一話　試召戦争Cクラス編　その1

「木下優子！！出て来なさい！！」

そう大きな声で、ひとりの女子がうちのクラスに入ってきた

「貴方は確か、Cクラス代表の小山さん？」

優子がそう言うと物凄い剣幕で

「さっきはよくも言いたいことを言ってくれたわね！木下優子！！」

「ちょ、ちょっと待って；、一体なんの事？」

「惚ける気！！私達を豚小屋呼ばわりしたくせに！！」

「豚小屋って、……優子…」

「ちょ、ちょっと；；、そんな目で見ないでよ！！違うってば！」

「大丈夫だよ、優子。優子がどんな趣味を持っていようが、私達は

友達だよ（ニコッ）」

「そうだよ、優子。ボク達はいつまでも友達だよ（ニコッ）」

「後退りしながら言っても全然説得力の欠片もないわよ！！違うって言ってるでしょうが！！」

「私を無視するなー！！」

あ、小山さんがキレた

「とにかく！私達Ｃクラスは、Ａクラスに対して、宣戦布告するわ！覚悟しなさい！木下優子！！私達を豚小屋呼ばわりしたこと後悔させてやるわ！」

「だ～か～ら～；、私そんな事言ってないってば；」

とりあえず、小山さんを落ち着かせようと、声をかけようとすると、ギロッとこちらを見て

「学年首席だからっていい気になってたら痛い目見るわよ！」

「へ？私！？」

どうやら、私を姉さんだと勘違いしたらしい、ううっ；なんか怖い；

「では、準備が整い次第、開戦よ！覚悟なさい！！」

そう言うと、小山さんは出て行った。

「……どうかしたの？夢希？」

教室を出ていた姉さんが帰ってきた。どうやら今起こっていることに把握出来てないらしい

「姉さん、…ちょっと厄介なことが起きちゃいまして；」

「どうやら、優子がＣクラスを豚小屋呼ばわりしちゃったみたいでね～」

「だから～、私は言ってないって言ってるでしょうが！！」

そんなやり取りを見て、少し考える仕草をすると姉さんが

「……じゃあ、誰がそんなこと言ったの？」

姉さんがそう聞くと愛子が

「そりゃあ、優子じゃないとしたら、優子に似てる人、あ；；」

と愛子は気がついたらしいが時すでに遅く

ゴォォォォォォ！！！

ガタガタガタガタ（。□。；）

……、今、この教室に、殺気と怒気と闘気が入り乱れて、教室にいたみんなは蛇に睨まれた蛙のように動けなかった…

「ククク、そう……、あのバカの仕業だった訳ね、ああ…秀吉、姉さん今すぐ秀吉に会いたいな、…会いに行って殺りたいわ…」

…これ以上優子をほっておくと、本気で秀吉君の命が危ないので当面の話を進めることにした；

「あ、あのさあ、優子？Ｃクラスはどうするのかな？；」

「もちろん、殺るわよ！あそこまで言われたんだから、徹底的に思い知らせてやるわよ！ＡクラスとＣクラスの格の違いをね！！」

あの、優子？一文字漢字間違ってるよ？；　殺しちゃだめだからね；？

「それで、Ｃクラスとはどんな戦略で戦うの？」

愛子が優子にそう尋ねると、優子は自信満々に

「本来、Ｃクラス位なら力押しでも勝てる相手だけど、今回は勝ち方に拘ってみるわ」

「拘る？勝ち方？」

「そう、戦死者誰一人も出すことなく、完膚なきに叩きのめす！誰の目にも明らかなぐらいにね！」

「策とかあるの？向こうはこちらとの点数差知ってるから、一対多の戦いに持ち込むと思うから、そう簡単に動かないと思うけど？」

私がそう聞くと揺るぎない自信にあふれた顔で

「大丈夫よ、策ならあるわ！　私と夢希が策よ！」

「優子と私？」

「みんな！集まってくれる？策の説明をするわね、まず　…」

そして、時が満ち、試召戦争の開戦である。

ＣクラスＳｉｄｅ

「行くぞ！俺達を豚小屋呼ばわりしたＡクラスに目にもの見せてやれ！」

「おおおおお！！！！」

「お、おい！あれを見ろ！」

そこにはＡクラスにいるはずの代表、霧島翔子と木下優子がそこにいた

「Ａクラスの代表が何故、前線に？しかも護衛が一人しかいないぞ

？」

こちらが困惑しているとと

「あなた達くらい、私達二人で十分よ」

木下優子がまたしても、こちらに対して暴言を言ってきた

「おのれ～、またしても！」

「…、それじゃあ、頼んだわよ、代表！」

そう言うといきなり木下が走って後退して行った

「逃がすか！追え～！」

そう言って追おうとした時

「……待って、あなた達の相手はこっち。…この場にいるCクラス全員に国語勝負を申し込みます、…試獣召喚（サモン）！」

魔法陣が現れ、出て来たのは、

黒い法衣服を着て、黒いブーツを履き、シルバーのトンファーに黒い腕輪を装備した召喚獣だった

第十一話　試召戦争Ｃクラス編　その１（後書き）

戦闘前で終了；　前回のあとがきで腕輪の効果見せると書いて見せてない…、すみませんでした（。□。；）！次回、次回こそ書きますのでお許しを；；；

どうか見捨てないで見てやって下さいｍ（＿＿）ｍ

第十一話　試召戦争Ｃクラス編　その２（前書き）

と、とりあえずなんとか形になりました（。□。；）

見てやって下さいｍ（＿＿）ｍ

第十一話　試召戦争Ｃクラス編　その２

「くっ、木下優子を逃がしたわ！」

「別に気にするな、代表さえ倒してしまえば俺達の勝ちだ！」

そう言うとＣクラスの面々は周りを取り囲み、召喚した

国語

Ａクラス　霧島翔子（？）

５１１点

ＶＳ

Ｃクラス　総勢２０人

総合３９００点

「なっ！５１１点だと！半端じゃないぞ！あの点数！」

「落ち着け！点数が高かろうが所詮一人！この人数で掛かれば勝てる！行くぞ！」

そうCクラスの誰かが言うと、一斉に飛びかかった

「…それじゃそろそろ、始めましょうか！『幻影』！！」

そう言うと右腕の腕輪が光を放った…

優子Ｓｉｄｅ

「夢希一人だけど大丈夫かな？優子」

愛子が心配そうに夢希がいる前線を見つめながら、そう呟いた

「大丈夫よ、むしろ一人だからこそあの『腕輪』を使うことが出来るんだから。もし、あの中に私達が入れば私達までやられかねないもの」

「そうだったね；、あれは人数が多いと悲惨なことになるしね」

前回、私と夢希の対戦を見ていたためか苦笑いで愛子がそう答えた

「さてと、私達も位置につくわよ！目指すは完全勝利！！」

『おお～！！！！』

夢希Ｓｉｄｅ

姉さんに化けて、敵の視線をこちらに向けさせ、優子を前線から離すことに成功し、今こうして敵前線を『腕輪』の効果範囲内に誘い込むことに成功していた

「な、なんだ！前がよく見えない、霧か？」

「ぐっ！？な、何するのよ！？こっちは味方よ！」

「霧島翔子はどこに！！」

『腕輪』の効果範囲内に入ってきたＣクラスは、撹乱、同士討ち、などに陥って混乱していた

『幻影』…霧を発生させ、その中で自分の召喚獣に似た影をいくつも作り出して霧の中に入り込んだ者を撹乱させる

これが私の『腕輪』の能力

さて、これからどうするかと思考していた所に、こちら見つけたのだろうCクラスの一人が迫ってきた

「見つけたぞ！霧島翔子！かく、ご…？」

あちらは、どうやらこちらを見て驚いているみたいだ

今の私は髪を元のポニーテールに戻し、闘志を燃やす目つき、やる気に満ちた口調で

「ええ、それじゃ、…いくわよ！！」

そう言うと召喚獣が足に力を入れ、そして一気に飛び出して相手の召喚獣に迫った

「お、お前、本当に、あの霧島翔子なのか？ファンのやつらから聞いていたのとは違うし、召喚獣も！？」

「私は、霧島翔子の妹の、霧島夢希！宜しく、ね！！」

敵の召喚獣の攻撃を避け、そして

「ぶはぁぁぁ！？」

綺麗に回し蹴りが決まり、相手の召喚獣が消滅した。そして

「戦死者は補習だー！！！！！」

「い、いやだぁぁぁぁ！！！！！！」西村先生に連行されていった

Ｃクラス Ｓｉｄｅ

「ぎゃあああ！！」

「し、しまっ、ぐはぁぁぁ！！」

次々と味方がやられる声が聞こえてきている

「くっ、たかが一人と思って油断した！このままだと無駄に戦死者を出すだけだ。…一時後退だ！！霧を抜けて体勢を立て直すぞ！」

残存している部隊を引き連れ後退し霧を抜けるとそこには

化学担当の布施先生を引き連れた、メガネを掛けたAクラスの女子と数名のAクラスの生徒が立ちふさがった

「布施先生！私、佐藤美穂はじめ、ここにいるAクラス、この場にいるCクラス全員に物理勝負を申し込みます！」

「な、なんだと；；；；！！！！！」

Cクラス本陣

「何ですって！！前線部隊が前後挟まれて身動きが取れない！？」

「は、はい；腕輪によって発生したと思われる霧の中で激しく撹乱されたみたいで、立て直すべく後退した所を急襲された模様で；」

「なら、ここは私と数名の近衛部隊だけ残して後は救助に向かいなさい！早く！」

「り、了解；；！！」

どうしてこうなった？ええい！！これも全て、あの木下優子のせいに違いない！きっとそうだ！

「おのれ～木下優子！！」

あまりにも感情的になりすぎて、小山友香は冷静さを無くしていた

「あら、全て私のせいにされても困るわよ？小山さん」

「木下優子！？どうしてここに！？」

「どうして？そろそろ、この試召戦争を終わらせようとおもってね。

あ、そうそう、さっきの救援に向かった部隊を呼び戻そうとしても無駄よ。

うちの伏兵部隊が足止めしてるわ、クラスで一番保健体育得意な子が率いてる部隊で担当の教師付きだけど……もしかしたら全滅してるかもね」

「くっ；、木下優子～！」

「それじゃあ、終わりにさせて貰うわ！木内先生！

Ａクラス、木下優子がこの場にいるＣクラス全員に数学勝負を申し込みます！承認をお願いします！」

気がつくと、そこには数学担当の木内先生が立っていた

「了承します！」

「代表をやらせるな！」

『試獣召喚！！（サモン）』

数学

Ａクラス　木下優子

３７６点

ＶＳ

Ｃクラス

近衛部隊　Ａ　１４２点
近衛部隊　Ｂ　１２８点
近衛部隊　Ｃ　１３７点

「ちょ；、俺達のこの扱い酷くない！？；」

作者がいい名前思い付かないのでこうなりました。すいませーん（－∀－）

「雑魚に名前なんて必要ないわよ！」

「ひどっ！？（。□。；）」

武器のランスを構えると突撃し、近衛部隊を弾き飛ばし、一気に小山に迫った

「くっ！試獣召喚！（サモン）」

Ｃクラス　小山友香
１８１点

和服にプリーツスカートを合わせた服装に三叉戟を持った召喚獣が現れた

「くっ！」

「くぅぅ！！；」

激しく激突するランスと三叉戟

しかし、それも長くは続かず、ついに…

「くっ！？、しまっ！！」

「貰ったぁぁぁぁ！！」

優子の召喚獣が三叉戟を弾き飛ばすと、そのままランスを小山の召喚獣に突き立て召喚獣は消滅した…

これにより試召戦争は終結した

第十一話　試召戦争Ｃクラス編　その２（後書き）

初の戦闘シーンの構想や数々のやり直しやボツなど難産でした（。□。；）　ご意見やご感想ありました是非お願いしますｍ（＿＿）ｍ　それらが作者の支えになりますので；

第十二話　戦後対談

ＡクラスとＣクラスの試召戦争はＡクラスの勝利で終結した
夢希達は戦後処理のため、Ｃクラスの教室を訪れていた

「さて、さっそくだけど戦後対談に移りたいんだけど、その前に誤解を解いておきたいの。小山さん」

黙ってはいたが、未だに睨むように優子を見ている小山さんがそこにいた

「何度も言うようだけど、私はあの時、Ｃクラスに行っていないわ。」

「じゃあ、貴方じゃないなら一体誰だって言うの？」

「私にはね、容姿が私と瓜二つの双子の弟がいるの。Ｆクラスにいるんだけどね。秀吉て言ってね演劇部に入っているんだけど」

優子がそう言うとＣクラスの中から

「そう言えば、木下秀吉て演劇部のホープじゃないか？」

「そう、アレは勉強を疎かにするほど演劇にハマってるの。今では他人の声を完璧に真似まで出来るぐらいにね。そして、その声真似と変装で私に化けて貴方達を挑発してこちらに戦争を仕掛けるようにした……てのがＦクラスの計画なんでしょうね」

「それじゃあ何？私達は、貴方の弟、木下秀吉、つまりＦクラスにいいように利用されてたって訳？」

「まあ、そうなるわね。まだ信用出来ないなら一度演劇部に行って見に行けばいいわ。
勉強そっちのけでやってるからその分大した物よあれは」

「くっ！Ｆクラスめ！」

小山さんは親指の爪を噛みながら悔しさを露わにした

「それで、私から貴方達に言わなければならないことがあるの」

そう言うと、さっきまでとは違い優子の目つきが真剣なものになっていた

「言わなければならないこと?」

「……ごめんなさい」

優子は深々と頭を下げていた

「ど、どうして貴方が頭を下げる必要があるのよ;;?」

いきなりのことに小山さんは慌ててそう訪ねると

「今回、あの愚弟のことは、姉である私が止められなかったことにも責任の一片はあるし、作戦とは言え貴方達を愚弄するような事を言ってしまったのも事実……だから改めて、本当にごめんなさい」

そう言うと優子はもう一度深々と頭を下げた

「も、もういいから;;!?わかったから!?頭を上げて;;;、せ、戦後対談するんでしょ!〃〃」

と顔を真っ赤にさせながら頭を上げさせた小山さん……

小山さん、実はいい子かも……、そんな小山さんにキュンとするC

クラスの男子が数名いたりもするし；；

「そ、それで私達はどうなるの？やはり設備のランクを下げる？」

覚悟は出来ているといった表情で小山さんがそう尋ねると

「ああ、その件なんだけど、夢希？」

「うん、その事なんだけどね？小山さん。今回は和平交渉で終結したいの」

「和平？うちとしては有り難いけど、どうして？」

「もちろん条件は有るけどね、それはＢクラスに戦争の準備をしてあると警告してＢクラスを監視して欲しいの」

「どうしてＢクラスを監視するの？」と愛子が姉さんに尋ねていた

「……雄二は、Ｂクラスとも和平交渉で終結させている。何かしらの策で、Ｂクラスを使って自分達に有利な条件で私達に挑んでくる…、その為の防御策」

と、まあ表向きはこんな理由だけど、実は裏では姉さんが小山さんを警戒して監視しやすくするためと言うとんでもない真実があったりする；

どうやら、小山さんが雄兄のことが気になる発言をしたのを姉さんの耳に入ったらしく、今強く小山さんを警戒しているのだ……、姉さんどこからそう言う情報を集めてくるんですか；；

そんな理由だとは思いもしないで小山さんは少し悩んでいた

「あ、そっか、Ｂクラスの代表は小山さんの彼氏だったけ？

やっぱり彼氏のクラスを監視なんて出来ない？」

愛子がそう尋ねると何やら決意した顔で

「いや、やるわ！それに結果的とはいえ、Ｃクラスがクラスに利用されてた事は間違いないし、恭二には意趣返ししてやらないと気が済まないしね」

ちょっと意地悪い顔をしてそう答えた

「……それじゃあ、そう言うことでよろしく。では、これで戦後対談を終了します」

姉さんがそう言い、戦後対談は終了した
戦後対談が終了してふと見ると優子と小山さんが話をしているのを見かけた

「本当にごめんなさいね？小山さん」

「だ、だから、もうその話はいいってば；」

「あ、それとあの愚弟のことだけど」

ゴォォォォォォ！！

あ、あれ？この場面に何故か既視感が；；

「あの馬鹿の始末は任せておいて……、たっぷりお灸を据えておくから！」

ガタガタガタガタ（。□。；）

「う、うん、お任せするわ；；」

小山さんどん引きしてるし；

「あ、あのさ、Ａクラスの代表がさ、ずーっとこっち見てるんだけど？……私、『そっち』の趣味はないんだけど？；」

振り返って見ると、ジーと小山さんを見つめる姉さんが；

姉さん？そんなことしてるから同性愛者て誤解されるてわかってます？；

と、とにかくこうして、戦後対談とＦクラスに対する防御策が講じられた

その日の夜

木下宅

「ただいまなのじゃ～」

「お帰りなさい～、秀吉（ニコッ）」

「ど、どうしたのじゃ？姉上」

「あのさ～秀吉、Ｃクラスの小山友香さんて知ってる？（ニコニコ）」

「はて？誰じゃ？（ダラダラと汗が；）」

「ふ～ん、そっか♪ガシッ（秀吉の腕を掴む）」

「ど、どうしてワシの腕を掴むのじゃ？；」

「アンタ、Ｃクラスで何をしたのかな～？どうしてあたしがＣクラスの人達を豚呼ばわりしてることになっているのかな？（ニコッ）」

「はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測し、てぇぇぇぇぇ！？（真上に投げ飛ばされる）」

「やっぱり、あんたの仕業、か！！！？（下に落ちてきたところを、アルゼンチンバックブリーカー！！）」

グキ！！　ぐはぁぁぁ！！

人知れず漆黒の夜に一輪の尊い命と言う花が散った…

第十二話　戦後対談（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております（「∀ー」）

第十三話　悩み（前書き）

今回は短めです（^＿^；）　相変わらずの出来ですが見てやって下さいｍ（＿＿）ｍ

第十三話　悩み

Aクラスとcクラスの戦後対談が終わった翌日の朝

「……おはよう、夢希」

「おはようございます、姉さん。もうちょっとしたら朝ご飯出来るんで先に顔洗ってきたらどうですか？」

「うん、そうする」

朝食を作っている途中で、姉さんが眠たそうな目で起きてきました。

珍しいですね、あの姉さんが。夜遅くまで起きていたのだろうか？

姉さんが顔を洗っているうちに朝食が出来上がった

パンにコーヒー、サラダ、ハムエッグと朝食の王道的なメニューだ

『『いただきます』』

「姉さん、なにかあったんですか？姉さんがそんなふうに起きてくるなんて珍しいですし」

「…うん、ちょっと悩み事があって、…色々考えていたら眠れなくなったから」

「悩み事、ですか？」

「…うん、…ねえ？夢希、今日のお昼時間ある？少し相談に乗って貰っていい？」

いつもの姉さんとは違って、なんだか不安で心配そうに聞いてきた

「ええ、わかりました。それじゃあ、朝ご飯食べましょう！朝はしっかり食べないと力が出ませんからね！」

「うん」

悩み事って、一体何だろう？

朝食を済ませ、姉さんと一緒に家を出て学園に向かっていると前方を優子と腰をさすりながらトボトボと登校している秀吉君を見つけた

「ううん、昨日はひどい目にあったのじゃ；」

「あんたのせいでしょうが！自業自得よ」

「優子、秀吉君、おはよう～♪」

「…二人とも、おはよう」

「あ、代表に夢希、おはよう」

「二人とも、おはようなのじゃ」

「秀吉君、どうしたの？腰でもって打ったの？」

「う、うむ、実は昨日、あね」

「昨日、足を踏み外して、階段から転んじゃったのよ、ねえ？秀吉♪」

「いや…昨日は、姉上が…」

「そ・う・よ・ね?秀吉?(ニコッ)」

「そ、そうなのじゃ、足を踏み外してしまっての…あ、あはは…」

「そうなんだ、気をつけなくちゃ駄目だよ?秀吉君。(ニコッ)」

どうやら昨日、酷くお仕置きされたらしいな、あれは…

「代表?どうかした?なんだか元気ないみたいだけど?」

どうやら優子も姉さんの異変に気付いたようだ

「…うん、大丈夫。ちょっと寝不足なだけだから」

「そう?あまり無茶しちゃ駄目よ?代表」

しばらく歩いていると優子がそっとこちらに近づいてきて、姉さんに聞こえないように小声で

「ちょっと、代表どうしたの？」

「なんか悩み事があるみたいなの。今日のお昼休みに話を聞くつもりなんだけど優子も相談にのって貰える？」

「ええ、わかったわ。あと愛子にも声かけておくわね、意見は多い方がいいし」

私が頷くと優子は姉さんに気付かれないようにそっと離れた

お昼休み　屋上

「…夢希、待たせてごめ、……優子に愛子？」

私以外に誰かいるとは思っていなかったのか、驚いた様子でこちらを見ていた

「話は夢希から聞いたわよ、水臭いじゃない代表」

「そうだよ?代表」

「私が頼んで来て貰ったんです。親しい人達にも聞いて貰ったほうがいいかと思って。……駄目でしたか?」

私が不安げに聞くと姉さんは柔らかい表情で

「ううん、大丈夫。優子や愛子にも聞いて貰おうと思っていたから」

「それで、何に悩んでいるの?代表」

優子が問いかけると、どうやって切り出せばいいか分からないようで、しばらくしてからようやく姉さんの重い口が開いた

「……Fクラスの思惑、ううん、雄二の思惑にあえて乗りたいの」

第十三話　悩み（後書き）

ああ、スラスラと書ける文才が欲しいです（一・一；）　ご意見、ご感想お待ちしてます

第十三話　悩み　その２（前書き）

相も変わらずのグダグダな作りですが、良かったら見てやって下さいm（＿＿）m

第十三話　悩み　その２

「Ｆクラスの思惑、ううん、雄二の思惑にあえて乗ろうと思うの」

姉さんのその一言で一瞬時が止まった

「な、何を言っているの！？代表！！Ｆクラスの策の要のＢクラスはＣクラスに抑えて貰ったことによって策は封じてるし、このままＦクラスが宣戦してきたら簡単に勝てるのよ？；」

優子が慌てて姉さんに問いかける。確かに優子の言うとおりだ、わざわざリスクを背負ってあっちの思惑に乗る必要性はどこにもないのだから

優子にそう言われても姉さんは慌てることなく冷静だった。まるで、そう言ってくることを予想していたかのように

「だから、こちらの言う条件を飲ませる」

「条件？」

「負けた方は勝った方の言うこと聞くこと…」

「それならさ?Fクラスが Cクラスにしたようにさ、ボクらがFクラスを挑発して、向こうの策に乗らずにこっちの条件を飲むように仕向けてみるのは?」

愛子がそう提案すると

「そうよ!代表!Fクラスはバカの集まりだから上手くいくかもしれないわよ?」

優子もその提案を推したが

「…ううん、それだと雄二は条件を飲まないと思う。

雄二は自分が関係ない時はやる気出さないけど、自分が関係している時の雄二はそのやる気は半端じゃない。

昔言われていた神童そのものなの、だから挑発のような小手先じゃ雄二は動かない」

「でも、神童って言ってもそれは昔の事でしょ?今は違うでしょ」

「ううん、やる気を出した時の雄二は今でも神童」

きっぱりと優子にそう言った姉さん

付き合いが長く、よく見ていないと言えないことだ

「まあ、坂本君がどんな人物かはわかった。それで？向こうの思惑に乗ってまでして、代表は何がしたいの？」

「雄二には私と付き合ってもらう」

「……は？」

姉さんのいきなりの発言に思考がついていけてないのか、優子は唖然とした表情していた

「やっぱりそうでしたか姉さん」

「やっぱり？一体どういうこと？夢希」

「姉さんは小学生の頃から雄兄のことが好きなんだよ」

『えぇぇぇぇ！？』

優子と愛子が大声をあげて驚いた、まあ同性愛者だとか噂が流れて

いたので変な誤解していたのも無理はないけど；

「じゃあ、どうして女の子だけ見つめてたりしたの？」

愛子がそう尋ねると

「雄二に悪い虫が付かないように見張ってた」

「あ、あはは；、そうなんだ；；」

「だったらこんな面倒くさい方法しなくてもすぐ告白すれば良いんじゃないの？」

そう優子が姉さんに疑問をぶつけてみると

「雄二には何度好きって言っても、断られてる」

「え；？そ、それって誰か他に好きな人がいるとかじゃないの？；」

「まあ、雄兄に好きな人がいれば姉さんもあきら「絶対に諦めない」…；；」

諦めるだろうと言おうとした所を姉さんが強い口調で打ち消した；

「ま、まあ雄兄に好きな人がいるわけじゃなくて、姉さんの想いは誤解だとか、勘違いだとか言って姉さんの事避けてたの」

「なるほどね、それで今回この勝負に勝って晴れて付き合って貰おうってこと？」

合点いった様子で優子が姉さんにそう聞いた、勿論姉さんもそうだと言うはずと姉さんを見ると何故か姉さんの表情が曇った

「…うん、でもこのままやっていいのかなと思うのもあるの。

試召戦争はクラスの命運かけて一団となって行うやるものそれを私個人の我が儘で危険をおかして、……それでもし負けることになったりしたら…

でも、雄二が向こうから来るチャンスなんてそうはないし、もしこれを逃せば次いつ巡ってくるか分からない……

優子、愛子、夢希、私やってもいいのかな？」

「優子、どうする？」

「優子…」

私と愛子は優子の返事を待った

しばらく目を閉じて思考を巡らせていた優子だったが、結論が出たのかゆっくり目を開けると姉さんのほうを見ると

「……やっても良いんじゃない？代表」

「優子…」

「代表、私達Ａクラスは常に勝利のみよ、敗北なんて言葉は私達には存在しない

不利な条件？いいじゃない上等よ！不利な条件から勝利してこそＡクラス！……だから、代表は安心してやればいいのよ」

「まあ、ボクたちが頑張ればいいだけだしね～♪」

「そうだね♪」

「愛子、夢希…」

「クラスのみんなには私から説明しておくわね。不満が出ても何とか説得して見せるから安心なさい♪」

「優子、本当にいいの？」

「まあ、Ｂクラスを抑える作戦が使えないのは惜しいけど、不利な条件から勝てば次にまたＦクラスがこっちに戦争を起こさす気を無くさせることが出来るかもしれない。

あそこさえ大人しくなればそうそう試召戦争は起きやしないだろうし」

「優子、愛子、夢希…、ありがとう」

「代表、絶対に勝ちなさいよ♪代表の想いの大きさ、坂本君に思い知らせてあげなさい！」

「うん！任せて」

……何故だろうか、なんだか雄兄に命の危険が迫っていそうな気がするのは；；

私がそんな事を考えている時、隣にいた愛子がなにやら思い付いたことが浮かんだようで優子に耳打ちしていた

（あのさ、優子、もう一つの恋も実らせない？（ニヤニヤ））

（もう一つ？……ああ、なるほどね～♪（ニヤニヤ））

なにやら優子と愛子がこちらをニヤニヤしながら見ている…、どうしたのだろうか？；

まあ、なにはともあれこうして、Ｆクラス戦に向け動き出したのであった

第十三話　悩み　その２（後書き）

ご意見ご感想お待ちしてます（＜＿＞）

第十四話　駆け引き（前書き）

バカテスの９．５巻のカラーページを見て驚きました、そこに書かれてある翔子がまさしく夢希のイメージそっくりでした！まだ９．５巻読んでない方は見てみて下さい（＾Ｏ＾）

相変わらずな出来ですが良ければ見てやって下さいｍ（＿＿）ｍ

第十四話　駆け引き

姉さんの強い要望からあえてＦクラスの策に乗る、という方針で固まり優子がクラスのみんなにＦクラスの策に乗ること、その策に乗ることになった原因、雄兄と姉さんとの関係などの経緯などを説明をした上で採決を取ると満場一致で可決された

その理由は、女子は『代表が可哀想』

『代表の想いを一方的に決めつける坂本君酷い！』

『代表の長年の想いを叶えてあげよう！』

などなど恋する乙女を応援するぞという感じで全面的に姉さんを支持し、男子は

『憧れていた霧島さんにそんな仕打ちを…、坂本、コロス』

『霧島さんに何度も好きだと言われただと！！…坂本、コロス』

『憎き坂本雄二、こうなれば試召戦争のどさくさに紛れてやつを…』

などなど、殺意的に一致し、可決されたという形である

まあ中には

『吉井君！吉井君と戦うなんて！許して欲しい、マイスイートハニ～』

となにやらかなり危険な独り言を言っていた久保君を見たような気がするが……

うん♪見なかったことにしよう♪知らないほうが幸せなこともあるよね♪

可決され一段落したところに

「Aクラス代表はいるか？俺はBクラス代表のピーーー（効果音）だ」

モザイクの掛かったBクラス代表のピーーー（効果音）が来ました

え？何故モザイクとピー音が入っているのか？

そんなの自主規制にきまってるじゃないですか♪

モザイクを入れたのは心臓の弱い方があんな女子の制服をきたおぞましいモノを見たらそれだけで即倒しちゃうかもしれませんし、ピー音入れたのは同姓同名の人の名誉を汚さないためですよ♪

「夢希、誰と喋ってるの？；」

愛子につっこまれてしまったのでこの辺にしておきましょう

「代表の代理で、わたし、！？…が、聞かなきゃ駄目よね；」

姉さんの代理に受け持とうとした優子が前にいるアレを見て後ずさる

その顔には『しまった；受けるんじゃなかったかも；』といかにも書いてありそうな表情だった

「Bクラスは、Aクラスに対して戦争の用意がある。今日は警告を言いに来ただけだ」

「そ、そう；わかったわ；」

アレがそう言うとFクラスの生徒に連行されていた

「キリキリ歩け、これから撮影会もあるんだからな」

「き、聞いていないぞ！」

……撮影会？どうやら私の知らない所で恐ろしいことが進行しているようです；

「優子、大丈夫？；」

「だ、大丈夫；、ただこの一週間はうなされそうよ；」

優子が心配で声をかけて見ると、少し青ざめた表情だった

「でもまあ、読み通りＢクラスを脅しに使ってきたわね」

「うん、だとするとそろそろ…」

「失礼するぞ、Ａクラスの代表はいるか？」

「来たわね」

教室の入り口のほうを見るとそこには雄兄を中心に吉井君、瑞希、土屋君、美波、秀吉君とFクラスの中心グループがやってきた

「俺はFクラスの代表の坂本だ。Aクラス代表はどこだ？」

「私が代表の代理に聞くわ」

優子がそう言うと前に出た

「そうか、……、俺達FクラスはAクラスに一騎打ちを申し込む！」

「一騎打ち？」

「そうだ、俺達Fクラスは試召戦争としてAクラス代表に一騎打ちを申し込む」

「うーん、何が狙いなの？」

優子が訝しい目で雄兄を見ていた。

裏に何かあるのか見破ろうとせんとばかりに

「もちろん、俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

「……、面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのは有り難いけどね、わざわざリスクを冒す必要もないかな」

「賢明だな、ところでCクラスの連中との試召戦争はどうだった？」

それを聞いた優子は眉毛をビクンと動き、一瞬ギロと秀吉君を見ると秀吉君は蛇に睨まれた蛙のように動けずガタガタと震えていた

「時間は取られたけど、それだけだったよ？何の問題もなし」

「Bクラスとやりあう気はあるか、ってだ、大丈夫か？；なんだか顔色が悪いが；」

Bクラスと聞いた時、優子の表情が青ざめたものになっていた

「B、Bクラスってさっき来てたあの変態女装の；」

「ああ。アレが代表やっているクラスだ。幸い宣戦布告はまだされてないよいだが、どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、3ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよね？」

戦争に敗北したクラスは3ヶ月の準備期間を経ない限り自ら戦争を申し込むことができない。

これは負けたクラスがすぐさま再戦を申し込んで、試召戦争を泥沼化しない為の取り決めである

「知っているだろ？実情はどうあれ、対外的にあの戦争は「和平交渉にて終結」ってなっていることを。規約になんの問題はない。…BクラスだけではなくDクラスもな」

雄兄が悪役みたいな態度で交渉を仕掛けてきた。しかし…

「へえ～、それは奇遇ね。私達もCクラスとの戦争は「和平交渉にて終結」なのよね。」

「なんだと!?」予想していなかった事態だったのだろう、雄兄が大きい声を出して驚いていた

「…Bクラスに戦争の用意があると警告して、もしくは攻めてて条件つきでね♪

果たしてBクラスは動けるのかしら?まあ、Dクラスがこちらに仕掛けてくるなら別に良いけどね、Bクラスに比べたら楽な相手だしね」

優子はこう言っているが攻めろとは言ってはいない。恐らく雄兄の動揺を誘うためのブラフ…優子恐ろしい子!?

これにより自分たちに有利に交渉するカードがなくなり慌て始めるFクラスに対してAクラスから魅惑的なカードが切られる

「こちらの条件を呑んでくれるなら、今回の試召戦争、五対五の団体戦にしてあげる」

駆け引き　その2（前書き）

今回は短めです（－．－；）　今月は忙しく更新が遅れるかもしれませんがご了承下さいｍ（＿＿）ｍ

駆け引き　その2

「こちらの条件を呑んでくれるなら、今回の試召戦争、五対五の団体戦にしてあげる」

「条件だと？」

優子がにこやかにそう言うと今度は雄兄が訝しい目で優子を見ていた、何が狙いだと言わんばかりに

「ええ、こちらの条件は二つ、まず一つは、先鋒はこちらは霧島夢希　そちらはうちの弟　秀吉を出すこと」

「ちょ、ちょっと！優子！？」

いきなり出てきた事に驚きを隠せなかった

しかも対戦相手が自分の想い人なのだからなおさらだ

「ちょっと；、優子！そんなの」聞いてない、と言おうとしたところを姉さんの

「…もう一つは、負けた方はなんでも一つ言うことを聞くこと」

姉さんのこの一言で、私の抗議の発言は打ち消された

『『え?…』』

『『負けたほうは……なんでも……』』

カチャカチャカチャカチャカチャカチャカチャ

「ムッソリーニ、まだ撮影の準備は早いよ!というか、負ける気満々じゃないか!」

「明久、そう言いながらもお主もカメラのレンズを磨いておるではないか!ムッソリーニ!何故儂のほうにもカメラを向けて調整しておるのじゃ!;」

姉さんのあの一言で慌てだすFクラスの面々……、まあろくなことではない事は確かだろう;

「わかった、その条件呑もう」

「雄二!!なにを勝手に!まだ姫路さんや秀吉が了承してないじゃないか!」

「なんでそこに儂が入っておるのじゃ!?明久!」

「心配すんな。絶対に二人に迷惑はかけない」

自信満々の台詞。そこまで勝利を確信させる秘策でもあるというのだろうか

「ただし、勝負内容はこちらで決めさせてもらう。それくらいのハンデがあってもいいだろう?」

「う;;、う〜ん…」

「…構わない」

「ちょ;;、代表?」

「…お願い、優子」

そう言われ、にこやかな顔から悩み顔になった優子が色々思考した

結果

「じゃあこうしましょ、勝負内容の五回の内三回をそっちで決めさせてあげる。それでどう？」

「まあ、それが妥当か…、交渉成立だな。それでいつやる？」

「そうね…、明日、いや明後日の放課後にしましょう」

「ほう、結構間が空くが？」

「構わないわ、この間に勉強してベストな点数で挑んで来なさい！返り討ちにしてあげるから」

「ふっ、Ａクラスには素敵なちゃぶ台をプレゼントしてやるから楽しみに待ってな」

両陣営火花を散らしながら交渉は終了した

第十五話　決意（前書き）

このお話の秀吉は演劇の参考に歌舞伎座など見ていたりしている、という設定にしていますのでご了承下さいｍ（＿＿）ｍ

相変わらず出来ですが良かった見てやって下さい

第十五話　決意

「やれやれ…、えらい事になってしまったのう；」

「そうだね；」

そう溜め息混じりに秀吉君と同じことを呟いていた

あの交渉の後、私は屋上に向かい、そこで秀吉君と合流した。演劇部が休みの日はこうして屋上で秀吉君のお手伝いをするのが当たり前のようになっていた

しかし今の空気はどんよりとしていた。それもそうだ、いきなりそれぞれのクラスの代表の先鋒として指名され戦わねばならなくなったのだから

「しかし、何故姉上は儂らを戦わせようしたのじゃろうな？」

「な、なんでだろうね；あ、あはは；」

秀吉君の疑問に適当に受け答えしていた

まさか優子や愛子にあんな事言われるなんて；

今から１０分前に遡る……

「ちょ、ちょっと優子、あれは一体どういうことなの！？；あんな話聞いてないんだけど；」

Ｆクラスとの交渉が終わって私は優子に質問をぶつけていた

「そりゃあそうよ、こういう風になるまで言うつもりなかったし」

と、さも当たり前のような顔であっさりと答えた

「な、なんで言わなかったのよ！？；」

「言ったらあんた反対するでしょうが」

「反対するに決まってるよ！？；」

あっけらかんとそう言う優子に噛みつこうとしていると

「まあまあ、落ち着きなよ夢希。よく考えてみなよ？これはチャンスなんだよ？」

「チャンス？」

愛子にそう言われて考えてみる、この状況で私にとってはチャンス？と考えているところに愛子がヒントとばかりに

「それじゃあね、代表がなんて言ったか覚えてる？」

姉さんが言ったこと？え、え～と、確かあの時姉さんが言ったのは

『負けた方は何でも一つだけいうことを聞くこと』だったような…うん？うんん！？これってもし私が勝ったら秀吉君のことを！？

「どうやら気付いたみたいね、夢希が勝ってアレを彼氏にしたら良いじゃない」

衝撃的な事実がわかったところに優子が爆弾発言を持ってきた

「な、な、な、なに言ってるのよ;;;優子!?」

「何って、夢希あんた告白する機会狙ってたじゃない?ちょうどいいチャンスじゃない?」

「う;;、そりゃあそうだけど;;」

「うかうかしてたら他の誰かに取られちゃうわよ?……特に男子から」

「へ?男子?」

「そうよ、あいつよく朝学校に行く途中で男子中学生から告白とかされてるらしいし。あととても不愉快だけど三年の先輩からラブレター預かったことがあるわ……弟に渡してくれって…」

そう言うとプルプルと震えだし

「なんでアイツのほうがモテるのよ!?っていうかなんでアイツへのラブレターなんか預からないといけないのよぉぉぉ!!!!」

それはまさしく魂の叫びだった。優子も色々と苦労してたんだな;

「まあまあ；優子落ち着きなよ；　なんにせよ弟君と戦うことになっちゃたんだから前向きに考えていけば？」

「前向き、か…、でも、もし告白して断られたらどうしよう；」

「大丈夫だって；上手くいくよ；（ほぼ両想いみたいなものなのに、どうしてこういうことに関しては疎いかなこの子は；）」

なんだか少し呆れた目で愛子に見られているようなのは気のせいなのだろうか？

そして今に至る

（うーん；告白か、上手くいけばいいけど…ああ；でも、もしだめだったどうしよう；）と　うーんうーんと唸っていると

「どうしたのじゃ？夢希、うーんうーん唸って頭でも痛いのかの？」と心配そうに秀吉君が私の顔を覗き込むように見ていた

「な！？な、なんでもないよ？；気にしないで；、あはは；」

顔を真っ赤にさせながらなんとか誤魔化した；

ふと顔を見上げたらそこに大好きな人の顔があったら誰だって真っ赤になるよ；

「それにしても儂と夢希を戦わせても夢希が勝つに決まっておるのにのう」

「……どうして？」

「ど、どうしてじゃと？そりゃあ儂がＦクラスで夢希がＡクラス、戦力の差は明らかじゃろ？」

「やる前から諦めちゃうの？私がリハビリで苦しんでいるときに助けてくれたように今度は私が秀吉君を助けるから頑張ろ？」

「夢希…、そうじゃな！何もせずに諦めるのは駄目じゃな！いっちょやってみるかの！」

そう言うと秀吉君は可愛らしく力こぶを作る格好をした、相変わらず可愛いな♪

「しかし、夢希には悪いが手伝いはいいのじゃ。その気持ちだけ受け取っておくのじゃ」

「どうして！私秀吉君の力になりたいのに；」

「いや；、儂の対戦相手、夢希じゃろう？；その対戦相手に教わるのはちょっと不味くないかの；」

「あ…；」

そうでした；、すっかり頭に血がのぼっちゃって忘れてた；

「儂のほうで出来るだけのことはやってみるつもりじゃ。ただし、やるからには夢希に勝つつもりでやるからの」

「…うん！私だって負けないよ。…秀吉君は演劇の参考とかで歌舞伎座とか見たりしてよね？」

「うむ、そうじゃが？」

「なら古文あたりなんかいけるんじゃないかな？」

「まあ嫌いな教科ではないの」

「なら当日は、古文で勝負しよう」

「儂はそれでいいのじゃがいいのかの?夢希の得意科目ではなくて?」

「うん、秀吉君とは対等な状態で戦いたいしね。…、そ、それでね?もし、その、私が勝ったら聞いて欲しいことがあるんだけど…、いいかな?(〃〃)」

「まあ、負けたほうが言うことを聞くのが今回の条件じゃからの」

「いや;、そういう条件じゃなくて、私個人の純粋なお願いなんだけど、いいかな?」
私がそう話すとこちらの心情を汲み取ったのか真剣な表情で

「わかったのじゃ、じゃが」と言ったと思ったら柔らかい表情になって

「それは勝負に勝ったらじゃろ?儂は負けんぞ♪」と言った。それは本当に優しげな顔だった

第十五話　決意（後書き）

なんとか更新出来ました（^―^；）
なんとか更新早く出来るように頑張っていきたいと思います（ノ△T）

第十六話　決戦に向けて（秀吉編）（前書き）

今回は秀吉目線のお話となっております。いつも通りの出来ですが良かった見てやって下さい；

第十六話　決戦に向けて（秀吉編）

Ｓｉｄｅ　秀吉

あの後、夢希と二人で互いに戦いに向けて精一杯努力すると約束し別れた

「勝つと言ったものの今のままではどうしようもないのが現状なのじゃ；」

決戦まで今日を入れてもあと2日と当日の補給試験までの数時間…、その間で夢希と対等に並べる点数を取るのはまず無理じゃろうな；

ならば、対等な点数にするのが無理でも少しでも近づけるよう点数を稼ぎ、足りない分を召喚獣の操作性で補わなくてはならなぬ…

しかし、お世辞でも儂は召喚獣の操作性それほど上手くはないし得意科目もこれと言ってないしの；うーん；これは不味いのじゃ；

うーんと唸りながら自分の教室に戻るとそこにはいつもの光景が飛び込んできた

「吉井！貴様、また学校にゲーム機を持ち込んだな！」

「げ！？鉄人！？；」

「西村先生と呼べと言っているだろうが！」ドガ！？（頭にげんこつを）

「痛っ～！？可愛い生徒に手を挙げるなんて！教師がやっていいんですか！？」

「吉井、勘違いするな…」

「　へっ？」

「お前は不細工だ」

「最低の教師だぁぁ！？」

やれやれ、またやっておるの明久は；。大方教室でこっそり携帯ゲーム機で遊んでいた所を鉄人に見つかった、といった所かの；

そんなことをやっておるから観察処分者の仕事がどんどん増えるというのに…、……観察処分者？

確か観察処分者のおかげでいろんな先生の雑用で召喚獣の操作性が飛躍的に向上した明久、そして隣にいる鉄人、もとい、西村教諭

鬼の補習で恐れられておる先生じゃが召喚フィールドを全科目担当出来るらしいのでかなりの学力を持っているのは間違いないのじゃ…

今儂が必要としている2つの要点がここに揃っておる。

二人ともある意味曲者じゃが短期間で効果を出すにはこれほどうってつけな人材いまい。ならば儂が取る道は一つしかない！

「西村教諭！！明久！！折り入って頼みがあるのじゃ！！」

「ど、どうしたの秀吉？；そんな大きな声出して」

「なんだ？一体どうした？木下」

いきなり大きな声で話しかけられたせいか驚いた様子でこちらを振り替えた

「西村教諭、儂に古文の補習をして欲しいのじゃ、Ａクラスと互角に戦えるくらいな点数を取れるくらいに！」

「何？Ａクラスだと？木下、確かに大きな目標を持つことは良いことだがいきなりすぐは無理に決まっているだろう？こういうものは時間をかけ少しずつ」

「それでは駄目なのじゃ！！２日後の補給試験で取れるくらいにならねばならんのじゃ！！西村教諭！この通りじゃ！」

そう言うと儂はその場で座り込み頭を床に付けた

「秀吉！？いきなり何やってるの！？；」

明久の慌てる声が聞こえる。まあいきなり土下座をするのだから驚くのも無理はないが

しばらくするとそんな儂を何も言わずただ黙って見ていた鉄人が口を開いた

「木下、理由はなんだ？普段勉学そっちのけで演劇に没頭している

お前が自発的に俺の所で補習をしてくれとは考えにくい…理由はなんだ？」

そう言われ顔を上げると、そこには儂の真意を見抜こうと目つきが普段より厳しくなっている鉄人がいた

「…約束を守るためじゃ」

「約束？誰とだ？」

「……」

「言いたくはないか……、理由は個人的な約束を守るために俺に補習をしろ、と…、動機はまったくもって不純……。

だが他の先生方ではなくあえて鬼の補習と恐れられている俺に補習を頼むその心意気、気に入った！

いいだろう！望み通りこの俺が教鞭をふるってやる！ただし！いつもやっている補習よりも数倍キツいものだと覚悟しておけ！いいな！！」

「いいのかい！？秀吉！？鉄人の補習なんだよ！？生きて戻って来

れるかどうか…」

隣で明久が慌てふためいていると

「吉井、特別に貴様も参加させてやる、ありがたく思え」

「いいです!?結構です!?日常的に受けてるんで間に合ってます!?」

「明久よ、今回お主の力も貸して欲しいのじゃ!」

「へ?僕の力?」

「そうじゃ、儂の召喚獣の操作性を上げるためにはどうしてもお主の力が必要なんじゃ!頼む!明久」

儂はそう言うと両手を明久の両肩に置き、強い決意の目(のつもり)で明久を見た

明久ビジョン

ど、どうしよう!?いきなり秀吉が両肩を掴んでまるで恋する乙女

のような目で上目使いでこっちを見ながら力を貸して欲しいと言ってきている！

この目でお願いされて断るなんて僕には出来ない！！

「フッ、わかったよ…、女の子にここまでお願いされたら断れないよ。火の中、水の中、補習の中、何処でも付き合うよ秀吉（キリッと）」

「そうか！礼を言うぞ明久！って儂は男じゃと言うておるじゃろうが！！；」

とまあこんな感じで儂等二人の補習という名の特訓が始まった

第十六話　決戦に向けて（秀吉編）（後書き）

次回は夢希編を予定しています。なんとか早めに更新出来るように頑張ります（＾―＾；）

決戦に向けて（夢希編）

屋上で互いに精一杯の努力をしようと約束して秀吉君と別れた私はその足で本屋に向かった

本屋に着くと真っ先に古文の参考書や問題集が置いてあるコーナーに向かった

参考書や問題集は色々あり自分に合った本を吟味し時間をかけてようやく買う本を決めレジに向かおうとした時見知った顔を見つける

「あれ？もしかして瑞希？どうしたのこんな所で？」

「え？あ、夢希ちゃん！ちょっと参考書を買いに来てたんです。夢希ちゃんもですか？」

「うん、って！？瑞希、結構な数買うんだね；参考書」

「あ；、はい；」

瑞希の買い物かごを見るとそこには幅が太い参考書が五冊ほど入っていた

その後会計を済ませると、私と瑞希は近くのファミレスに立ち寄ることにした

「しかし、たくさん買ったね；、……やっぱりＡクラス戦に向けての学力アップのため？」

「あ；、は、はい；」

ちょっと気まずそうに瑞希はそう答えた

まあ無理もないだろう、次に戦うクラスの一人にこう聞かれたら答えにくいものだろう

「……私、Ｆクラスが好きなんです。Ｆクラスのみんなのための力になりたいんです」

「Ｆクラスのどこが気に入ったの？」

「人のために一生懸命になれる所とかです」

「ふ～ん……」

私がじーと見つめていると耐えられなくなったのか

「な、なんですか？；」

「そのＦクラスが好きの気持ちの大半は、吉井君なのかな～？」

「え？…えええ！？え、えっと、それはその（〃〃）」

ニヤニヤしながらそう聞いて見ると顔を真っ赤にさせ、どう答えていいかわからずあたふたしていた

分かりやすいなと思っていたら

「そ、そういう夢希ちゃんこそ木下君とはどうなんですか！？」

「え！？えっと、それは、そのね、って！ど、どうしてそんなこと知ってるの！？」

「愛子ちゃんから教えて貰いました♪」

愛子のやつ～；、いつの間に；

「夢希ちゃん、顔が真っ赤になってます♪分かりやすいですね」

ううう；やり返されてしまった；

「あ、あはは；まあお互いそういう面は苦労してるみたいだね；」

「まだ夢希ちゃんはいいですよ、木下君そういうのにも気づいてくれそうですもん。私のほうは……はあ；」

「あ、あはは；、吉井君そういうの鈍感そうに見えるよね；」

「見える、じゃなくて鈍感なんですよ；」

瑞希もなんだかんだで苦労してるんだな

そして、次の戦いは自らの想いや好きな人のためにも負けられない戦いなんだなと思いつつ互いのコーヒーを飲み終わると

「さてと、そろそろ帰りますかね！帰ってこれやらないとね」

さっき買った参考書をチラッと見ながら立ち上がる

「私はここでちょっと解いたら帰りますね」

そう言うとさっき買った参考書を袋から出すとさっそく参考書を開いた

「そっか、それじゃあまたね。…お互い頑張ろうね！」

「はい！」

そう言って私は瑞希と別れ帰宅した

帰宅して、夕飯を済ませ、さっそく買った参考書を開き勉強してしばらく経った頃、姉さんが私の部屋にやってきた

「…夢希」

「姉さん？どうかしましたか？」

「どこか解らない所ある？あれば教える」

何か期待する目でそう言ってくれる姉さん。うーん；、大変ありがたいのだけれど

「すみません；姉さん、一人でなんとか頑張ってみようと思います。」

「…そう。わかった」しょんぼり

↑グサッ↑グサッ↑グサッ、うぐぅ！？ざ、罪悪感が；

罪悪感に陥っているところに姉さんが一杯のコップを私の机の上に置いた

「これ飲んで頑張って。余り無理はだめ」

コップの中身はレモネードだった。気を使ってくれたのだろう

「ありがとうございます、姉さん♪　姉さんの言うとおりに無理はしませんよ」

私がそう言うと安心したのか堅い表情が柔らかくなったように見えた

「…夢希」

「なんですか？姉さん」

「今度の勝負、絶対に勝とう」

「はい、勿論ですよ姉さん」

私達は必ず勝つことを心に誓った

第十七話決戦！！試召戦争Ｆクラス戦

Ｆクラスとの交渉から2日が経ち、補給試験を済ませ決戦まであと数時間後に迫っていた

Ｓｉｄｅ　Ａクラス

「いよいよＦクラスとの試召戦争が始まるわ！

今回はクラスの代表五名の五対五の代表戦で勝負をつけることになっているわ。

この勝負でＡクラスとＦクラスの力の差を見せつけ、Ｆクラスが二度とこちらに試召戦争を起こさせないようにするわよ！」

優子がそう言うと『おおー！！』と教室内のボルテージが上がった

「こちらの代表メンバーは、霧島夢希、佐藤美穂、工藤愛子、久保利光、そして代表の霧島翔子、うちはこの五人でいくわ」

Aクラスの代表メンバーが発表されると教室内から

「Fクラス相手に木下さんも容赦ないな～♪」

「Fクラスも可哀想に」

などとFクラスに対して余裕や見下す発言が飛び出したが優子は少しも表情を変えずに代表メンバーを自分の前に集めた

「いい？今クラス内はたかがFクラス程度と思っているけどDクラスもBクラスもそう思って隙を突かれて敗北しているわ。

だから格下相手だとは思わず同格の相手として戦って。決して油断しないように」

「わかりました！」

「分かったよ、全力を持って相手にするよ」

優子にそう言われ気合いを入れ直すメンバー

「でも初戦は大丈夫じゃない？こう言っちゃなんだけど夢希と弟君じゃ点数差がありすぎて勝負にならないんじゃないかな？」

愛子がそう言っても優子の表情は変わらなかった

「確かに以前のままのアイツならべつに気にすることもなかったんだけどね」

「というと？」

「アイツこの2日家に帰らず学校に泊まり込んでたみたいなの。なんでも西村先生の特別補習を受けるとかで」

「特別補習？」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

2日前の夜

「はい、もしもし木下ですが？」

『おお、姉上か？儂じゃ、秀吉じゃ』

「なんだ秀吉か、それでどうかしたの？」

『うむ、実は今日から2日間学校に泊まり込んで西村教諭の特別補習を受けることになっての。

それで姉上から母上達に学校に泊まり込むことを伝えて欲しいのじゃ』

「特別補習？学校に泊まり込んで？」

『うむ、西村教諭が宿直室に寝泊まり出来るように学園長に掛け合ってくれての、って！？あ、明久！？お主頭から煙がでておるが大丈夫か！？気をしっかり持つのじゃ！明久！？明、プッ、ツーツーツー』

「ちょ；、ちょっと！？秀吉！？秀吉！？」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

「と、まあこんなことがあってね；」

「そ、それで吉井君は大丈夫だったの？；」

「だ、大丈夫じゃない？……多分；」

「ま、まあそれで今朝、アイツ帰ってきたんだけどその時の目つきがね」

「目つき？」

「うん、まるで演劇の本番に臨む時と同じ目つきになってたの。もしかしたらもしかするかもと思ってね」

「ふ～ん、ところでさっきから黙ってばかりだけど大丈夫？夢希」

「へ！？、あ、ああ；大丈夫だよ；」

いきなり話を振られたので変な声をあげてしまった；

「いや；全然大丈夫そうには見えないんだけど；」

苦笑いしながら愛子にそう言われてしまった；　他人から見ても分かるくらいガチガチに緊張しているようだ；

「あとちょっとで試召戦争が始まると思うと緊張しちゃって…」

「優子の弟君と戦うと思うと緊張しちゃう？」

「ま、まあね…」

苦笑いでそう答えると、こちらの心情を察するとスッとこちらの背後に回り込むと

「フゥ～」

「ひぃや!?にゃ、にゃに!?今首の辺りに生暖かいなにかが…」

振り返るとそこにはいたずらが成功してニヤニヤしている愛子がいた

「愛子!!…」

「あはは、どう？緊張はほぐれた？」

「え？」

気がつくとあんだけガチガチになっていた身体の緊張がいつの間にか解けていた

「あんだけガチガチなってたらいつも通りの力出せないよ？リラックス♪リラックス♪　難しく考えないで楽しめばいいんだよ」

「楽しむ？」

「そうだよ～、ボクは楽しみにしてるんだよ？ムッツリーニ君と戦うこと。

どっちが保健体育上か！ってね♪

だから夢希もあまり難しく考えないで楽しめばいいんだよ」

「そっか、…うん、そだね♪ありがとうね愛子♪」

「どういたしまして♪」

そして時間が経ち、Ａクラスの教室にＡクラスとＦクラスの全員がそれぞれに分かれ集合していた

「それではこれよりAクラスとFクラスの試召戦争代表戦を行います！先鋒前へ！」

高橋先生にそう言われ、Aクラスからは私が、Fクラスからは秀吉君が前にでた

「では、教科は何にしますか？」

「古文勝負でお願いします！」

かねてからの約束通り古文勝負を選択した

「わかりました！承認します！」

高橋先生がそう言うと教室内にフィールドが展開した

「いくよ！！秀吉君！」

「うむ！！全力で参るぞ！」

『試獣召喚（サモン）！！』

こうしてAクラスとFクラスの試召戦争が幕を明けた

Fクラス戦　その2（前書き）

今回、オリジナル設定が入っていますのでご了承下さいm（＿＿）m

いつも通りの出来ですがｆ＾＿＾；

Fクラス戦　その2

『試獣召喚（サモン）！！』

二人が同時にそう言うと互いの召喚獣が姿を現した

Aクラス　霧島夢希
古文　３２７点

ＶＳ

Fクラス　木下秀吉
古文２７１点

そう表示されるとクラス内に『おぉぉぉ！！』とどよめきが走った

Fクラスは歓喜、Aクラスは驚愕の声で

「やってくれるじゃない、あの馬鹿」

「そう言ってるわりには嬉しそうな顔してるけど？」

愛子にそう言われると顔を真っ赤になった

「べ、べつにそういう訳じゃないわよ！；、夢希とぶつけて少しは効果があったなとあたしの判断は間違ってなかったと思ってただけよ！！；」

「やれやれ、素直に喜べないのかな～このツンデレお姉ちゃんは」（小声）

「何よ？」ギロリ

「べつに～♪」

「それにしてもまさか約５０点差まで追い上げてくるなんてね」

「そうだね、これはボクも予想外だったよ」

「これはあいつの努力を誉めるべきなのかしら？それとも…」

「それとも？」

「あいつの点数をあそこまで引っ張り出した西村先生の鬼の補習の恐ろしさを再確認すべきなのかしら；」

「あ、あはは；どっちだろうね？；」

Ｆクラス　Ｓｉｄｅ

「凄いじゃない木下！あともう少しでＡクラス級じゃない？」

「木下君頑張ってましたから」

「あの好成績は秀吉の努力の賜物とそして…」

雄二がそう言って隣に目をやると

「エラーデスえらーですＥｒｒｏｒ…デス」

脳内エラーが起きて頭から煙をあげている明久がいた

「このバカがこんな風になるくらいな想像絶する鉄人の補習のおかげなんだろう」

「アキ朝からずっとこの調子よ；大丈夫なの？」

「そうだな、そろそろ起こさないとな。ここはショック療法でいくか」

そう言うと雄二は明久の耳元で

「明久、このまま起きないと姫路にお前のために特製のスペシャルジュースを作らすぞ」

雄二がそう呟いた瞬間

「命だけは助けてくださぁぃぃぃ！！」

「お、帰ってきたか」

「ゆ、雄二何てこと言うんだよ！？もう少し友達」

「なんなら本当に姫路に作らせてもいいんだが？」

「友達思いの友人を持って僕は嬉しいよ！雄二」ニコッ

「そうか、分かってくれて何よりだ」

と明久と雄二が漫才みたいなことをしている一方で

「アキ、また坂本とあんなにくっついて…やっぱり坂本はウチらの敵なのかしら？」

「明久君はやはり男の子でもイケる口なんでしょうか！？；（泣）」

などとトンでもない誤解をされていることに二人は気付いていなかった

「ムッツリーニ、秀吉にあのことは伝えたか？」

「…すでに伝達済み。映像を通して教えてあるからバッチリ」

「ねえ雄二あのことって？」

「この一戦で押さえておかないといけないポイントだ」

夢希　Ｓｉｄｅ

召喚獣を召喚した直後、私は一気に秀吉君の召喚獣に向かって私の召喚獣を突っ込ませた

秀吉君の召喚獣の武器は薙刀。

薙刀の長所はその長さによる間合い！

ならばその間合いを生かせない接近戦で一気に勝負を決める！！

開始直後ということもあってかいきなりの突撃に秀吉君の召喚獣の動きが一瞬止まった

その一瞬の隙をつき接近することに成功し、トンファーによる連続攻撃を試みた

「ハッ！！」

「くッ！？；」

こちらの連続攻撃に薙刀で防戦に入る秀吉君

ガードの上からお構い無しにトンファーの連続攻撃を入れつつガードの隙間を探し、そして

「そこ！！」

「しまっ！」

ガードの隙間をうまくつき、崩れたガード

「貰った！！」

出来た隙間にすかさず蹴り技を打ち込んだ

すごい音と共に後ろに飛ぶ秀吉君の召喚獣

決まった！と思ったらすぐに立ち上がった。手には縦に持ち替えた薙刀があった

蹴りを受ける一瞬、薙刀の持ち方を縦に変え蹴りを防いだようだ

「そんな！完璧に捉えた筈なのに…」

秀吉　Ｓｉｄｅ

あ、危なかったのじゃ；　ムッツリーニからの情報がなければ間違いなく貰っていたのじゃ；

開戦数時間前

「…秀吉」

「ん？どうしたのじゃ？ムッツリーニ」

「…見て欲しい物がある」

ムッツリーニが持ってきたデジタルカメラにはＡクラスとＣクラスの試召戦争が映されていた

「これがどうかしたのかの？」

「…この場面に注目」

そこに映っていたのは夢希の召喚獣の戦闘場面だった

「ここのダメージ数に注目」

そこには夢希の召喚獣がトンファーで攻撃しているシーンだった

トンファーで攻撃を受けた相手の召喚獣にダメージ数２０が出ていた

「…そしてこの攻撃シーン」

トンファー攻撃で怯んだ相手に追い討ちに蹴り技を打ち込んでいた

その時のダメージ数は

「１５０！？」

「…どうやら霧島妹の召喚獣は脚に多く攻撃力が設定されている。

なので武器のトンファーも注意だけどあの蹴り技はそれ以上に警戒」

そう言うともう一つのデジタルカメラを出し

「こっちにトンファーの攻撃から蹴り技に移るいくつかの予測パターンを編集した。

これを見て対策を錬るといい」

「わかったのじゃ、恩に着るのじゃムッツリーニ！」

「…b」

◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

とにかくあの蹴り技だけは貰わないように気をつけるのじゃ

じゃが、守りに入ればいずれ追い詰められるのは必至……ならば！

今度は秀吉の召喚獣が夢希の召喚獣に向かって突撃した

「はぁぁ！！」

勢いにのせて薙刀の刃を横にして放った

「なんの！！」

片手のトンファーで防ぐと、すぐさま回し蹴りを放つが

「その攻撃パターンは既に解析済みじゃ！」

その場でしゃがみ込んで回避すると薙刀を縦に持ち替え振り上げた

「くっ！？；」

突然の反撃に両手に持っていたトンファーをクロスするように構え
なんとか防ぐが衝撃を殺すことは出来ず後ろに大きく飛ばされた

「…やるね、秀吉君」

「…そっちも、の」

激戦必至の戦いがスタートした

Fクラス戦　その2（後書き）

感想を頂けたら幸いです（＜＿＞）

Fクラス戦その3（前書き）

たくさんの評価を下さった方々、感想を下さった方々、本当にありがとうございました！また再開しようとおもいます＾＾　相変わらずの出来ですがよろしければ見て下さい

Fクラス戦その3

夢希と秀吉の戦いは開始早々激しい戦いが繰り広げられていた。それは一見互角の戦いに見えたがしかしそれは小さく、しかし確実に現れ始めていた

FクラスSide

「まずいな、これは・・・」

「まずい?なんでだよ?雄二、見てのとおり秀吉はあんなに善戦してるじゃないか?もしかしたら勝てるかもしれないのに」

「確かに善戦していているな、「今は」な」

「今は?ど、どういうことだよ雄二?;秀吉があんなに善戦してるのに」

「そうよ!どういうことなの?坂本?」

「わからないなら二人の表情を見比べてみろ」

雄二にそう言われ明久と美波が前で激戦を繰り広げている両者の表

情を見てみるとそこに汗をかきながら少し苦しそうな顔で攻撃している秀吉。それとは対象的に落ち着いて冷静に秀吉の動きを見ている夢希の姿がそこにあった

「え?こ、これって一体どうして?;」

「そういえばお前ら知らなかったみたいだが夢希はカポエラをやっていて格闘技経験者だ」

「えええ!?、・・・っていうかカポエラってなに?」

「カポエラってのは本来は間違った呼び名で正しい呼び方は「カポエイラ」もしくは「カポエィラ」と呼ぶらしい。足技を中心とした格闘技で本来は相手に攻撃を当てるのではなくプレッシャーを与える物らしいんだがそこをあいつは一戦交える物で護身術として身につけたらしい。」

「へえ~詳しいんだね雄二」

「夢希が向こうにいた時からよく翔子に話を聞かされていたからな。まあそれでだ、格闘経験があり姉の翔子と同じく天才肌の夢希のことだCクラス戦で召喚獣の操作性のコツを掴んだはずだ。それに対して秀吉はいくつか試召戦争を経験しているがまだ召喚獣の操作にまだ不慣れなところがある。だがそれにも関わらず今こうして秀吉

が優勢を保っていられるのは明久、夢希が秀吉の動きを観察しているからだ」

「え?、そ、それじゃ・・」

「そうだ、夢希が観察をやめ攻勢に出たら間違いなく形勢は逆転するだろうな、お前との特訓をして召喚獣の操作性が上がったとしても所詮付け焼き刃でしかない。それに体力面精神面に関してもまずいしな」

「そうよ、どうして木下はあそこまで体力を消耗しているの?攻勢に出て優勢なのに」

「忘れたのか?島田、決戦ギリギリまで秀吉は夢希との点数差を少しでも埋めるために鉄人の特別補習を受けた上に明久との召喚獣の操作の特訓までやっているんだ。家に帰ったとしてもすぐにまた出て試験を受けた身だ、ろくに体力は回復できてはいないはずだ。そして今攻勢にうって上手くカウンターを喰らわないようにいつも以上の集中力を出してやってるんだ精神的にも疲れは出てくる」

雄二がそう説明すると周囲はさっきまでとはうって変わって静まり返っていた。いやな空気がFクラスに流れようとしていた

Fクラス戦その3（後書き）

今後もよろしくお願いします＾＾

Fクラス戦その4

戦いの形勢は雄二が予想していた通り、秀吉の動きを観察していた夢希がそれをやめ
攻勢に転じると一気に形勢は逆転し秀吉は押され始めていた

「ま、まずいよ雄二;!、このままだと秀吉が!」

「わかっている!、が俺たちにはどうすることもできない・・ここまでよく善戦したんだ、よくやったものじゃないか」

夢希Ｓｉｄｅ

時間をかけて秀吉君の召喚獣の動きを観察することに専念していたおかげで、召喚獣の動きは今のところ見切っている。

そして、私との点数の差を埋めるために無理をしてしまったため体力を消耗してしまったのか反撃する余力がないのか防御に徹している。

防御の上から攻撃を加えてるとよろける場面があった。

秀吉君の召喚獣の目をみると疲労してみえた。

召喚者と召喚獣はリンクしているため召喚者の表情がそのまま召喚獣に現れるので、召喚者の様子がわかるということ。

…つまり今、秀吉君は体力的に疲弊しているということ、それも防御してよろける位の

ならばここで勝負を決めようと私は自分の召喚獣を秀吉君の召喚獣に向かって翔らせた、決着をつける一撃を入れるために！

教室内にいた者達はこれで勝負に決着がついたと見ていた

そう、皆がそう「見ていた」・・・

秀吉の召喚獣に向かって駆け出す夢希の召喚獣

俯いて表情はわからないが立っているのがやっとに見える秀吉の召喚獣

そして

秀吉の召喚獣に接近し、勝負を決めるべく回し蹴りを放つ！

その時

回し蹴りを放つ瞬間、夢希は我が目を疑った。

さっきまで、疲労で生気のない目をしていたはずの秀吉の召喚獣の目が

生気のある目に変わっていたことに。

次に夢希の目に映っていたのは、回し蹴りを回避され秀吉の召喚獣の攻撃をまともに受け

横に飛ばされる自身の召喚獣の姿だった

Ｆクラス Ｓｉｄｅ

おおおおおおお！！とクラス内に驚きと共に歓声が起きた。

それもそうだろう、もうこれで終わったと思っていたところに予想外の展開が起きたのだから

Ａクラス　霧島夢希
２１１点

ＶＳ

Ｆクラス　木下秀吉
１９８点

「すごいよ秀吉!!でもどうしていきなりあんな生きた攻撃が出来たんだろう?さっきまであんなに立つのがやっとに見えたのに」

「・・「見えた」・・、そうか!そういうことか!やってくれるぜ!秀吉のやつ!」

「え?どういうこと?雄二?」

「どういうことなの?坂本?」

「どういうことなんですか?教えてください坂本君」

意味がわからない明久、美波、瑞希は声を揃えて雄二に問いた

「なんだわからないのか？

おい明久、秀吉の特技は何か忘れたのか？」

「忘れるわけないじゃないか！そんなの「演技」に決まってるじゃないか！秀吉は演劇部期待のホープ・・・・、ってまさか！？」

「やっと気がついたか？そう、秀吉のやつ今まで「演技」してやがったのさ。死んだふりっていえばいいか、全く俺たちを含めこの教室内にいる全員を見事に騙すとな」

「今までのあれ全部演技だったの？ウチは全然気がつかなかった；」

「すごいです、木下君；；」

秀吉Ｓｉｄｅ

「な、なんとか上手くいったのじゃ；」

少々卑怯な手ではあったが夢希の召喚獣に確実に重い一撃を入れるにはワシにはああするほかがなかった。

明久との特訓で多少召喚獣の動きがよくなったがそれでも明久ほど動きが早くなったわけではない。かといって姫路やムッツリーニのように強力な攻撃をもっているわけでもない。

そんなワシの武器はただひとつ！演劇で培ってきた演技力がワシの武器じゃ！この唯一の武器でこの戦い必ず勝つのじゃ！

Fクラス戦その5

思わぬ反撃を受け一瞬唖然とした夢希であったがすぐに意識を取り戻し、瞬時に秀吉の召喚獣との間合いを取り体勢を整えた

そしてもう一度戦いの流れを自分のほうに引き戻そうと攻撃を仕掛けるがさっきとはまるで別人のように平然とした顔つきで攻撃を避ける秀吉の召喚獣がそこにいた

夢希Ｓｉｄｅ

完全にしてやられた！今までのあれは演技だったということをあの一撃を喰らうまでわからなかった！

今こうしてこちらの攻撃を難なく避けるこの姿がなによりもの証拠だおそらく私が観察している時に向こうも私の動きをよく見ていたのだろう

観察していると思っていたら逆に私のほうも観察されているなんて・・・

でもなんだろう・・・この感じ

秀吉君に上手くやられてピンチのはずなのに・・

なんだかとっても

すごく楽しい！本来ならクラスの施設やプライドを賭けた大事な戦いなんだけど、今この時だけはそんなこと抜きでこの時間を楽しみたい！

そうか、これが愛子が言ってた「楽しむ」ってことなんだ

ＡクラスＳｉｄｅ

今Ａクラスは騒然としていた。楽勝で終わるかと思っていた戦いが思わぬ展開がおきそして今形勢が逆転しようといるからだ

だがここにきてもとある三人は慌てることなく落ち着いていた

「やってくれるわね、あのバカ。あの戦いの最中で演技してたなんてね、全くその努力を勉強のほうにも廻しなさいっての」

「アハハ、でもこの試合のために弟君すごく頑張っていたじゃん？これ終わったらちょっとは褒めてあげたら？お姉ちゃん？♪」

「ま、まあ確かにあのバカにしては頑張ってたみたいね；、っていうかお姉ちゃんいうな；」

「…優子は相変わらずのツンデレ。少しは素直になったほうがいい」

「だ、代表までなにいってるんですか！？それに私はツンデレなんかじゃありません！？」

・・・・こんな風に二人で優子をいじっているくらい落ち着いていた；；

「まあ、優子で遊ぶのもこのへんにしてっと。夢希いい顔になったね」

「全く二人とも人をおもちゃに;、・・たぶん余計な考えがなくなって逆に集中できるようになったんでしょう」

「…本当に。夢希今とっても生き生きしてる」

ＦクラスＳｉｄｅ

騒然としているＡクラスとはうって変わってＦクラスは歓喜で沸いていた

さっきまでの絶望的な状況から一転して反撃転じそして今向こうの攻撃を苦もなく避けているその姿は余裕の姿と見られた

「一時はどうなるかと思ったけどなんとかいい感じで木下が巻き返したわね」

「はい、なんだか余裕すら感じられるのでいけるかもしれませんね！」

「さて、そいつはわからんぞ姫路」

目の前で行われている戦いをじっくりと見ながら雄二がそう応えた

「うん？どういうこと雄二？あんなに余裕すら窺えるくらいうまく攻撃をかわしてるのに？」

今見ている状況を否定するかのような雄二の発言に不思議そうに明久は質問した

「確かに余裕を持って避けるように見えるがそれがさっきと同じようにこれもまた「演技」だとしたらどうする？」

「え？それどういうこと雄二？どうして余裕ある風に「演技」しなきゃいけないの？」

「夢希に奇襲するために行ったあの「演技」だがあそこにいくまでに秀吉の奴がかなりの精神力と体力を削っていたらどうする？」

「それじゃあ今のあの秀吉は余裕を装って手を休め回復に努めている、と？」

「まあ俺の推測に過ぎんがな。だがあの一撃以降秀吉は夢希からの攻撃を回避するだけに専念しているのは確かだ」

雄二の言ったことを照らし合わせるように行われている戦を目を凝らして見てみる

よく見ると確かに秀吉の召喚獣の表情は余裕そのものなのだけどそれを操作している秀吉は表情は変わっていないが少なからず汗をかいていた

戦いのほうは秀吉が表情を変えたりとフェイントを織り交ぜ向こうの攻撃に合わせて小出しのカウンターで徐々に点数を減らしていた

このまま流れが秀吉のほうに傾くかと思っていた時、妹さんの動きが変わった！秀吉の動きを警戒しながらの攻撃から勢いのいい攻撃のスタイルに変わった

それはカウンターをもらってもいいくらいそれくらいおもいっきりのよいものだった

「ねえ雄二？なんか妹さん動きがよくなったように見えるんだけど？；」

「そうだろうな、あいつの顔を見ればわかる」

そう言われて見てみると

「笑ってる？」

そう、それは本当に楽しそうな笑顔だった

「おそらくあいつの中にあった余計な考えが吹っ飛んでこの試合を楽しむだけ考えるようになったんだろう」

「それってまずいことかな？やっぱり；？」

「ああ、かなりな。カウンターもらう気で突っ込んでくる奴に「演技」やフェイントなんざなんの効果もないからな」

まずいよ；まずいよ；と狼狽する明久をよそに雄二は秀吉のほうを見るとにやりと笑うと

「明久、どうやら秀吉もそうするつもりのようだぞ？」

「え？」

雄二にそう言われ秀吉のほうを向くとそこには

さっきまでとは別人のように顔を綻ばせて自身の召喚獣を突っ込ませる秀吉がそこにいた

Fクラス戦その6　決着！そして・・・（前書き）

ＰＶが１０万アクセスを超えていました！これらもすべて見に来てくれた皆様のおかげです！これからも相変わらずの出来の物ですがよろしくお願いします

Fクラス戦その6　決着！そして・・・

秀吉Ｓｉｄｅ

夢希に奇襲の一撃を入れたワシはひたすら夢希からの攻撃をかわしていた

それは奇襲のまでの間夢希に悟られぬように「演技」と夢希の攻撃で致命傷を受けないようにかなりの集中力を使い、そのためかなりの体力と精神力が削られてしまいその回復に努めるためじゃった

しかしそう上手く回復を図ることは無理じゃった

こちらが疲労していることを隠すために余裕の姿を「演技」しながら向こうの攻撃をかわし続けないといけない

そのような状況の中で回復できるはずもないのでワシは夢希の攻撃に合わせ表情の切り替えやフェイントで小出しのカウンターにより夢希の点数を減らし夢希に警戒感を植え付け疑心暗鬼になっているうちに回復に努めようと図った

だがそうしようとした矢先、夢希が戦いのスタイルを大きく変えて突っ込んできた

さっきと同じように表情を変えいかにも反撃するものにし攻撃することを躊躇させようと誘った

しかし、ワシの狙いとは裏腹に夢希は迷うことなく攻撃を行いきつい一発をもらうことになった

予想外の事に驚きながらも攻撃をうけ怯んだ隙にたたみ掛けようとする夢希の召喚獣にカウンターを打ち込み間合いを取った

カウンターを受け一瞬召喚獣の表情が険しいものに変わるが、それがすぐに楽しそうな顔つきになっていた

いきなりの変化にワシは思わず夢希のほうを見た

そこには子供のように楽しそうな夢希の顔がそこにあった

そんな夢希の顔に思わず見とれていた。そしてそれとは別に羨ましいとも思った、あんなに楽しそうにこの試合を楽しんでいることに

そんなことを考えているとふと目蓋が重くなり意識が失いかけたがなんとか踏みとどまった

・・・どうやらワシが動ける時間もそう長くないようじゃ。ならば！残りの時間すべてこの時間を楽しむために使うとしよう！そう楽しもう、夢希とのこの時間を

二人は中央で再び激突した

しかし戦い方がさっきのそれとはまるで変わっていた。その戦いには全くといっていいほど駆け引きみたいなものはなく純粋に打ち合いになっていた、二人とも楽しそうな顔つきで

そしてお互い見る見るうちに点数を減らしていき

Ａクラス霧島夢希
４２点
ＶＳ
Ｆクラス木下秀吉
３９点

お互いあと一撃で終わるところまでになっていた

お互い次の一撃が最後になるものだとわかってあえてお互いに間合いをとり何を繰り出すか思考していた

そんな二人の空気を読んでか教室内は静まり返っていた。最後となるであろう攻防に固唾を呑んで二人を見ていた

そして動いたのは夢希のほうだった。夢希の召喚獣が一気に間合いを詰めると右のトンファーで攻撃、と見せかけ左足の上段回し蹴りを放っていた

しかし、秀吉の召喚獣は倒れこむかのようにそれをかわしていた

夢希Ｓｉｄｅ

回し蹴りをかわせれた時私は、ああ終わった私の負けかと来るであろう敗北を決定付ける攻撃に自身の召喚獣が吹っ飛ぶさまを見たくなく思わず目をそむけていた

しかし聞こえてくるであろう打撃音が一行に聞こえず変わりに聞こえてきたのはバタン！となにかが倒れた音だった

思わず前を見てみるとそこには倒れている秀吉君の召喚獣、そしてその奥にも倒れている秀吉君の姿があった

「秀吉君！？」私はすぐに秀吉君の元に駆けつけた。そして私の後に続くように両クラスから何名か駆けつけてきた

「夢希！あのバカなにかあったの！？」

「弟君大丈夫なの？夢希」

「妹さん！秀吉どうしちゃったの？大丈夫なの？」

「木下君！木下君どこか悪いんですか？；」

「どうなの？夢希？」

みんなが私たち二人を取り囲むかのように心配そうに見てきた

「う、うん；。それがね・・・・・、寝ちゃってるの；」

「「はあ？」」

そこにあったのはすぅすぅと可愛らしい息使いと顔で寝ている秀吉君があった

「よ、よかった～；」と思わず座り込む瑞希と美波

「全く、変な心配させるんじゃないわよ；」といいつつ瑞希たちと同じく座り込んでいる優子

「まあ、この試合のために結構無茶してたんだ。いろいろ疲労も溜まってたんだろう」と雄兄の言葉にその場にいたものは納得した

「木下君は大丈夫ですか？」と高橋先生に聞かれ、「大丈夫です、疲労が溜まっていたらしく寝ちゃったみたいです」と答えるとほっとした表情になったがすぐにきりっとした顔つきに戻ると

「では、この試合の判定はＦクラス木下秀吉君の戦闘続行不可能とみなし、勝者Ａクラス！」

こうして初戦は私たちＡクラスの勝利で終わった

どうしてこうなった；；？

じーーーー（＊´∇｀＊）とニヤニヤと両クラスの視線が私のほうに集まり正に針の筵状態になっていた

その原因になっていたのが私の膝の上ですぅすぅと寝ている秀吉君だった；；

なぜこうなったのかは今から１０分前のことだった

１０分前

「しかし、本当によく寝てるわねこのバカ」

「あはは、そうだね。本当に可愛らしい寝顔だね～♪。女の子にしか見えないよこれは」

優子と愛子がそんな風に秀吉君を見ながら談笑していた

秀吉君が倒れて一時騒然となっていたので１０分間の休憩をとることになった

「そうだね、本当に可愛い寝顔だよね～」と私がいうと

「愛子」

「優子」

とお互いをみて頷きこっちをみるとにや～とした顔つきに変わっていた；

う：、猛烈にいやな予感しかしない；；

「だったら夢希、膝枕してやんなさいよ？（ニヤニヤ）」

「えええ；、そ、それはちょっと恥ずかしいし、そ、そうだ！保健室で寝かしてあげたほうがいいんじゃない？；」

「夢希、今はＡクラスとＦクラスの決戦の最中なんだよ？それなのにひとりだけのけ者のように保健室に送るなんて寂しいじゃない？それとも夢希は膝枕弟君にしてあげるのいやなの？（ニヤニヤ）」

「べ、べつに嫌なわけないけど；」

「じゃあ決まりね♪大丈夫よ高橋先生には私が説得しとくから」

そういうといつの間にか優等生モードになった優子がどんな言い方をしたのか知らないけど高橋先生を説得させ今に至る；；

なんなんですかこれは；、突き刺さる視線、下を向けば可愛らしい秀吉君の寝顔、これでは天国と地獄の板ばさみだよ～；；

そんな風に一人苦悩してる中試合は着々と進んでいった

第二試合

Ａクラス佐藤美穂　ＶＳ　Ｆクラス吉井明久

この戦いは戦う前に吉井君が「そろそろ本気を出そうか」と言い佐藤さんを戦かせたが、「・・・実は僕は左利きなんだ」というオチで終わる

試合は佐藤さんが一撃で吉井君を撃破しＡクラスが二勝目を上げた

吉井君は「体が真っ二つになるくらいの痛みが～～～～～！！！」とのた打ち回っていた；

一撃で吉井君を撃破していた時の佐藤さん笑顔だったのだがその笑顔がすごく怖かったのは私の気のせいなのだろうか？；

第三試合

Ａクラス工藤愛子　ＶＳ　Ｆクラス土屋康太

この試合を取ればＡクラスの勝利が確定するこの試合、Ａクラスのみんなは愛子の保健体育の点数の高さを知っているためこの試合の勝利を確信していた。やはりＡクラスの勝ちだと

しかし結果はＡクラスの確信を裏切り土屋君が愛子の点数を上回る点数で撃破し、Ｆクラスはなんとか首の皮一枚繋がる

愛子は悔しがり「今度は絶対にムッツリーニ君に勝つからね！」と言いスカートをチラリとさせ土屋君から赤い噴水を出させた；愛子ただでは起きない恐ろしい子；

第四試合

Ａクラス久保利光　ＶＳ　Ｆクラス姫路瑞希

学年二位と学年三位との戦い、ＡクラスとＦクラス試召戦争が始まる前は総合科目で２０点しか差がないほど二人の成績は拮抗しているという

なのでこの戦いは激しいものになると予想されたがこの戦いは瑞希の一撃であっけなく終わることになる

Ａクラス久保利光
総合科目３９９７点

ＶＳ

Ｆクラス姫路瑞希

総合科目４４０９点

Ａクラスのみんなはこの結果に驚きを隠せなかったが私はそれほど驚きはしなかった。それは瑞希が大好きなクラスのため、そして大好きなひとのためにいっぱい努力をしていることを知っていたから

これで二対二となりこの試合の行方は大将戦に委ねられることになった

第五試合

Ａクラス代表　霧島翔子　ＶＳ　Ｆクラス代表　坂本雄二

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

雄兄の宣言でＡクラスが騒然となる

「上限ありだって？」

「しかも小学生レベル。百点は確実だぞ」

「となると集中力の勝負になるな」

この条件だとＦクラスにも勝利の可能性があることに気づき騒ぎ始めていた

「夢希、坂本君の狙いがどこにあるかわかる？」

「雄兄、どうやら賭けに出たみたい」

「賭け？」

「そう、姉さんは歴史の年号で一つだけ確実に間違えるものがあるの。それが出れば雄兄は勝てると踏んだみたいだね」

「確実に間違える？それって一体なんなの？」

「大化の改新の年号、姉さんはそれを６２５年で覚えてしまっているの。姉さんは一度覚えたことは忘れない記憶力の持ち主だから」

「だったら覚えなおして記憶の上書きをすればいいんじゃない？」

「ほかのことだったらそれも出来たかもしれないけど、それだけは無理なの。それは「雄兄に教えてもらったこと」だから上書きは無理なの」

「上書きが無理？どうしてよ？」

優子にそう聞かれると私は少し困った顔でこう答えた

「姉さんの中では雄兄のことが最優先事項だからほかのことはどうでもいいの、あはは；；」

「はあ！？それだけの理由なの！？はあ、そこまで坂本君に惚れちゃった訳ね；坂本君ほかの女子に手を出そうものなら殺されるんじゃない？」

「あはは；、・・・・・・否定はできないかも；；」

「まあ、私たちが出来ることは大化の改新が問題に出ないことを祈るだけね」

「そうだね」

そうしてしばらくして高橋先生が問題集を作成して戻ってきた

「では最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室向かってください」

「・・はい」と言い教室を出ようとした姉さんを私は呼び止めて

「姉さん、・・・片思いに終止符をｂ」

「・・・うん、行って来る」

姉さんはそう言うと視聴覚室に向かっていった

そして教室に残った私たちは教室に備え付けられているモニターから視聴覚室の様子を見守ることになった

これが泣いても笑っても最後の勝負ということもあって双方のクラスは静かに固唾を飲んで見守っていた

そんな中モニターに次々と勝負に出題される問題が表示されていく

（　　）年　平城京に遷都
（　　）年　平安京に遷都
（　　）年　鎌倉幕府設立

（　　）年　大化の改新

問題に大化の改新が出たとたんFクラスから歓声が上がった。どうやら雄兄の狙いはやはりこれだったようだ

大化の改新が出たとき私と優子は思わず苦渋の表情をしてしまった。これが出たということはもう姉さんの満点は無理だということ、そしてもし雄兄が満点を取ればその時点でAクラスの負けが決定してしまうということに

そんなことを考えているとふととある疑問が浮かんできた。昔神童と呼ばれていたときの雄兄ならともかく今の雄兄ってたしか・・・

その疑問の答えはモニターに映った

Ａクラス　霧島翔子９７点　ＶＳ　Ｆクラス　坂本雄二５３点

この表示で解消されることになる

「・・・雄二、私の勝ち」

「・・・殺せ」

「いい覚悟だ！殺してやる！！歯を食いしばれ！！」

「吉井君！落ち着いてください！！」

ＡクラスとＦクラスの代表戦試召戦争はＡクラスの勝利で終わり、
床に膝をついた雄兄に飛び掛らんとする吉井君を瑞希が後ろから抱

きつき止めに入っていた

まあ、吉井君の気持ちもわからんでもないけどね；あれだけ大口叩いていざやってみたら５３点しか取れてなかったら怒りたくなるもの；；、と教室の角（すみ）でそれを見ながらそんなことを考えていると

「う、ううん？ワシいつの間に寝ておったのじゃ？」

どうやら眠り王子一（姫のほうが合ってるかも）がお目覚めのようだ

「おはよう、秀吉君」

「あ、ああ、おはようなのじゃ、って！な、なんでワシ夢希にひ、膝枕されておるのじゃ！？」

顔を真っ赤にさせて急いで起きようとする秀吉君を私は秀吉君の肩を抑えて静止させた

「だ、だめだよ；まだ休んでなくちゃ。試合の途中で倒れちゃったんだけど覚えてない？」

「そうか・・、ワシは倒れてしもうたのか。となるとワシは負けた

ということか、なら夢希の言うことを聞かねばならんの」

「え!?いいよ;それは。それにあの時もし秀吉君が倒れなければこっちが負けていたはずだし」

「うーん・・・それならばお互いに一つ言うことを聞くというのでどうかの?」

「え?う、うん;秀吉君がそれでいいなら」

「ならワシからいくぞい。ワシは・・」

秀吉君がその後に言ったことは私の予想外のものだった

「夢希がワシに話そうとしていたことを今ここで聞かせて欲しいのじゃ」

え?それって私が秀吉君にお願いしようとしていたことじゃ?

私は秀吉君が言ったことに唖然としていると

「夢希はワシの言うこと聞いてくれないのかの？」と楽しそうな顔で秀吉君が言ってきた

秀吉君・・・

「う、うん；言うね。わ、わ、わ、わたし、き、きき、きり、きりしまゆきはは；；」

頭が完全にテンパッていた；；秀吉君にどんな風に告白するか色々家で練習してきたはずなのにいざ本番になると頭が真っ白になり言葉が出てこない；；

そんな風に慌てている私に秀吉君は私の手を握ると

「目を閉じて深呼吸して落ち着いたらゆっくりと話してくれればよいから」と微笑みながらそう言ってくれた

秀吉君の言われた通りに目を閉じて深呼吸し心を落ち着かせた。下を向き秀吉君の顔を見る

秀吉君の顔を見るとさっきまでの緊張感は嘘のようになくなり、そして自然と口が動いていた

「私、霧島夢希はずっと前からあなたのことが好きでした。私と付き合ってくれませんか？」

ずっと言いたかった言葉がすんなりと口から出ていた

私の告白に秀吉君は一瞬目を大きくさせ、その後顔を真っ赤にさせると

「女の子からこうやって告白されるというのはこんなにもドキドキして、そして嬉しいものなのじゃな（／／／／）」

「えっと？それはどういう？」

「ワシ、その；よく男から告白されるのが多かったからの？」

ああ、なるほど；；

「そ、それで、その、答え、聞かせてくれるかな?」

私は期待と不安が入り混じりながらそう尋ねた

「ワシも夢希のこと好きじゃぞ。両思いじゃったのじゃな・・・、言葉にすると結構恥ずかしいのう(／／／)」

秀吉君も私のことが好き?両思いだった?一瞬なにを言われたのか分からなかったが次第に言っていることを理解すると張り詰めていた不安からの安堵からか私は目から涙が出て堪えきれずに泣き出していた

「ふぇっ・・・ひぅ・・、よ、よかった、本当によかった」

「夢希」

そういうと私の頬に手を添え

「夢希には笑顔でいてほしいのじゃ。ワシは夢希の笑顔が大好きだから」と言ってくれた

「秀吉君・・・・うん！」

私の顔は涙を流しながらも笑顔になっていた。そして

「うん？どうしたのじゃ？夢希？顔をちか、ん！？んんんんんんん！！！！」

自然と体が動き気がつくと秀吉君とキスをしていた

それは2，3秒くらいのものだったけど私には長い時間に感じられた

秀吉君から顔を離して自分の唇を触って秀吉君の唇柔らかかったなどと思っていると

おおおおおおおおお！！！！と私たちの周りがどよめいていた。

周りをみると

「ゆ、夢希ちゃん大胆です（／／／／）」

「す、すごかった（／／／／）」

顔を真っ赤にさせているFクラス女子二人

百合キターーーー!!と叫ぶFクラスの男子、その中には大量の鼻血を出して倒れている者も・・・

「そ、そういうことはもっと人目のないところでしなさいよ（／／／／）」真っ赤になっている優子

「やるね～夢希♪見せ付けてくれちゃって♪」楽しそうに笑っている愛子

「あ、あのさ愛子・・・ちょっと聞きたいことが;;;」

「うん？なにかな～？」

「あ、あのさ・・・もしかしてさっきの全部、・・・みんなに見られてた？;;;」

「もちろん♪」

「ぶっ!!ど、どど、どうしよう;;;秀吉君;;;あれ？秀吉君？」

さっきから秀吉君が大人しいことに気がつき下を向くと

「キュ～～～～～@ｗ@」と顔を真っ赤に目を回しながら気を失っていた

「だ、大丈夫!?秀吉君!?秀吉君!?」

秀吉君の肩を揺さぶって起こそうとしていると「・・・夢希」と呼ばれて振り向くと

「姉さん・・・、それと・・雄兄？」

そこには姉さんと首元をガシッと捕まれ気を失ったいる雄兄がいた

「・・・夢希、おめでとう」ニコッと姉さんは私の恋が実ったことを祝ってくれた

「ありがとうございます！姉さんもよかったですね」

「・・・ありがとう。それじゃこれからデートにいってくる」

そういうと姉さんは雄兄を引きずりながら連行していった

そんな姉さんを見送っているとガシッと誰かに肩を掴まれ振り返ると

「さあ、私たちも生徒指導室に行きましょうか?夢希さん?（ニコッ）」

そこにはすごく怖い笑顔で私の肩を掴んでいる高橋先生がいた

「ひゃ、ひゃい!!!」

その後私は高橋先生からありがたいお説教を受けることになった

と、とにかく試召戦争は私たちAクラスが勝ち、そして、わ、私霧島夢木は秀吉君の彼女さんになりました（／／／／）

Fクラス戦その6　決着！そして・・・（後書き）

過去最高の長文でした・ｗ・；ところどころかなり力押しのところとかありましたがなにとぞご容赦を；；；　戦闘描写とかが上手く書けない；；；上手くなりたいです；；；
感想お待ちしてます＾＾

第十八話　初デート

Ａクラスとｆクラスの試召戦争から数日が経ったある日。気持ちのいい青空が広がるこの日私は公園のベンチで一人座っていた

試召戦争があったあの日、晴れて秀吉君の彼女になれた私はさっそく休日にデートをしようと秀吉君を誘い、公園で待ち合わせをし今に到る

「変なところないよね？」と家で何度もチェックしたがやはりまた気になってきたので自分の服装を再度チェックした

今の私の服装は上から春物のグレーのハイネックの上に小花柄キャミソール下はジーンズといった組み合わせで髪形はいつものトレードマークのポニーテールではなく髪を下ろしストレートにしている

一通りチェックを終え時計を見るとまだ約束している時間の３０分前を示していた

今日のこの日を楽しみにしていたため一時間はやく来てしまっていたのだ；

秀吉君が来るまでの時間、私は今日のデートでどこに行こうか考え

ていた

デート前に予め計画を立てておくのもよかったが、もしなにかの事情で計画通りにいかなくなるとせっかくのデートが楽しめなくなるので、それだったらその日の気分気のままでいくことにした

しばらく待ってふと遠くを見るとこちらに近付いて来ている秀吉君を見つけたので私はお～いと手を振るとこちらに気がついたのか駆け足でこちらに向かってきた

「はあ、はあ；すまん；夢希、待たせてしまったかの？」

「大丈夫だよ秀吉君。それにほら」

そう言って自分の腕時計の時刻を秀吉君に見せた。そこに示された時刻は約束の時刻より１０分前を示していた

「よ、よかったのじゃ；、夢希がもうおるからワシはてっきり時間を間違えたものかと；」

「あはは；ごめんね、実は一時間早く来てたんだ；。それじゃあ早速行こうか♪」

私は手を差し出すと秀吉君は一瞬なんのことか分からずにいたが私の意図に気づくと私の手を優しく握ってくれた

「な、なんかこういうの恥ずかしいね（／／／）」

「あ、あはは、そうじゃな（／／／）」

私たちはとりあえずこの広い公園内を歩くことにした

「ところで夢希、その服装なのじゃ」

「ど、どうかな？変かな？」

「そんなことはないのじゃ、よく似合っていて可愛いのじゃ。それに髪形もいつもと違うしなんか新鮮な感じなのじゃ（／／／）」

「そ、そうか。ありがとう（／／／）」

「あ～；ごほん；それで夢希よ、これからどうするのじゃ？」

「そうだね、この公園を抜けたら町のほうにいってみよう?それで欲しい物やおもしろそうな物があったら立ち寄ってと、まあウィンドウショッピングみたいな感じでどうかな?」

「うむ、それでいくかの」

そうして私たちは街中に入ると

「１０代の女性にアンケートをお願いしてるのですが・・」

「ワシは男じゃ‥」

「新商品のファンデーションが発売になりました。お試しにいかがですか?」

「ワシは男じゃ!:;:;」

「君たち可愛いね~、どう?アイドルとかって興味ない?」

「だからワシは男じゃぁぁ!!:;:;」

とまあこんなこんなで

「ううー、ワシは男らしくなりたいのじゃー」Ｏｒｚ

秀吉君絶賛凹み中なのである。。。

ここはフォローを入れておくとしよう。せっかくのデートなんだし楽しい日にしたいしね

「だ、大丈夫だよ秀吉君。。そこまで気にしなくても」

「ううー、そうなのかの？」

「そうだよ、最近は男の人でも化粧する人がでてきたし、歌舞伎の女形やってる男の人で綺麗な顔の人とか見たことあるからだからそこまで男らしさを求めなくてもいいんじゃないかな？」

「おお！そうか！今はそうなのじゃな！そこまで気にしなくてもよいのじゃな！なんだか元気が出てきたのじゃ！ありがとの夢希」

「あ、あはは；；どういたしまして」

なんかかなり無理やりな論説で納得させてしまったような気がするけど；；まあ本人が納得してるならそれでいいか；；

秀吉君が立ち直りウィンドウショッピングを再開した

おもしろそうな物を売ってるお店に入ったり、興味を惹かれる店内に入ってみたりと適当にブラブラしていると途中で映画館を発見し一本見ていこうと立ち寄った

そこに顔見知りが三人いた

「あれ？吉井君に瑞希に美波までこんなところでどうしたの？」

「え？霧島さん？それに秀吉？」

「残念♪妹の夢希だよ♪」

「夢希ちゃん髪下ろしたところ初めて見ますね」

「本当に姉妹瓜二つなのね。見分けつかないわよ」

「ところで秀吉とふたりでどうしたの？」

「吉井君、お二人はきっとデートなんですよ♪」

「いいわね～♪デートなんて♪」

「ううう（／／／）お、おぬしらはどうして映画館にきたのじゃ？」

「それはもちろん映画見に決まってるじゃない、アキのおごりで♪」

美波が満面の笑みでそう言うと瑞希と何を見るか相談しにいった

一方吉井君はと言うと

「ううう、映画の後にクレープまでおごると今月の僕の食費が～；；

」

・・・どうやら映画見終わった後にクレープおごるはめになってるんだな吉井君;;;

しかもあの様子だと今月かなりピンチらしいな;;;仕方ない助けてあげるか

「吉井君ちょっといい?」

「ううん、どうしたの?妹さん」

「うん、私ね映画のポイントカード持っていてね、それね貯まるとペアー一組様半額になるやつなんだけどよかったらいる?」

それを聞いた吉井君の目が輝きだし

「それ本当!?もらってもいいの!!」

「いらないんだったら別にいいんだけどな~♪」

ちょっと悪戯心が刺激されて意地悪をしてみると

「どうかこの小汚い私めに、どうか！どうか！お恵みを～；；」

そう言って顔が地面に着くくらいに土下座していた；；

「そ、そんなことしなくてもちゃんとあげるから；；」

色々切羽詰ってるんだな；；

「じゃ、ちょっと待ってね、今出すから」

バックから財布を取り出してそのポイントカードを取り出そうとするのだが

「あ、あれ？えーとどれだけ？これでもないし、あ、これは洋服店のやつか」

出るわ出るわのポイントカード。その他にクーポンなども出てきている

「ねえ？秀吉？」

「なんじゃ？明久？」

「妹さんって霧島さんの妹だからいい所のお嬢様だよね？」

「そうなるの」

「でも、あれを見ると；；」

「主婦じゃな；」「主婦だよね；」

明久と秀吉がそんなことを言っている内に目的のポイントカードが見つかった

「はい、吉井君。もう少し計画的にお金使わないとだめだよ？」

「あ、あはは；面目ない；；」

ポイントカードも見つかり私達も見る映画を決めようとしたときジャラジャラと鎖で何かを引っ張るような音が聞こえ振り返ると

「・・・雄二何が観たい？」

「・・・俺の希望は叶えられるのか？」

手元を拘束されている雄兄とそれを繋いでいる鎖を持って先導している姉さんがいた

「・・・じゃあ戦争と平和」

「ちょ、ちょっと待て！それ７時間４分もあるぞ！？」

「二回見る」

「１４時間８分も座ってられるか！？」

「退屈なら隣で寝てていい。一緒にいられることに変わりないから」

そう言うと姉さんはどこからともなくスタンガンを出して雄兄に押し付けた

「そ、それ気絶、あばばばばばΣ（゜д゜lll）」

姉さんはそれぞれ二回分のチケットを購入すると気絶した雄兄を引きずりながら映画館の奥へと消えていった

「夢希よ…、あれは少しやりすぎではないかの?…」

「え?何がですか?仲慎ましいラブラブなカップルじゃないですか♪」

「え?…;…」

本編であまり書かれなかった基礎知識！　この話の主人公の夢希は雄二が翔子にスタンガンでやられようがぼこられようがそれらをじゃれ合ってるカップルにしか見えない少し（少し!?）変わった女の子である（ｂｙ作者）

「な、なんかこういうの見るとああ、霧島さんの妹さんなんだなって思うよね…」

「・・・そうじゃな…」

私達は恋愛物の映画を見ることにした

映画を見終わった後吉井君達と一緒にクレープを食べることにした

各自好きなものを注文しテーブルに座った。吉井君は味にはうるさいからと何も買わなかった

まあ、本当はただ単にお金がないからというのは女性陣には内緒だが；；

食べ始めて少しすると美波が少し食べてみる?と一口分のクレープをはい、あ～んと男の子なら一度は夢見るシュチュエーションが広がっていた

それに触発させたのか瑞希まで一口分のクレープを差し出した

これFクラスのあの覆面の人たちに見られたら間違いなく吉井君だじゃ済まないなと苦笑しつつクレープを食べようとしたとき

シュッ！と私の真横を何かが飛んできてドスドスドス！と壁に突き刺す音がしたので見てみるとフォークが４本ほど突き刺さっていた

・・・はい？《。Д。》

「いけません！お姉様！」

振り返るとそこには両手にナイフとフォークを４本ずつ持ち武装した髪を両サイドクルクルロールにしている女の子がいた

「豚がこれ以上狼藉を働かないようにここで成敗します！」

そう言って吉井君に襲い掛かり吉井君は慌てて店を飛び出し、武装少女はそれを追い、瑞希達はそれを追いかけるように店を後にしたいきなりの展開に私達は置いてけぼりだった；；

「な、なんだったの？あの子；；」

「あれはＤクラスの清水美春じゃな；；」

「秀吉君の知り合い？」

「う、う～ん；、知り合いというかなんというか；；」

「じゃあ清水さんってどんな子なの？」

「さっき見たとおり島田一筋の女子じゃ」

「・・・ああ、そういうタイプなんだね；うん理解した；；」

クレープ屋を後にした私達はウィンドウショッピングを再開した

楽しい時間はあっという間に流れ、空は青空から綺麗な夜空に変わっていた

遅い時間帯になったので送っていくと秀吉君が言ってくれたので私はそれに甘えることにし家の玄関口まで戻ってきていた

「送ってもらちゃってごめんね？秀吉君」

「気にしなくてもよいのじゃ♪ワシがしたかっただけじゃから」

「・・・そっか♪それじゃあまた明日♪」

そう言って家に戻ろうとしたとき後ろから「夢希」と秀吉君に呼ばれ

「うん?どうかし・・」

振り返った瞬間唇に柔らかい感触がし目の前には顔を真っ赤にしてい
る秀吉君がいるわけで

「そ、それじゃあまた学校での!(／／／)」

そう言うと全速力で帰っていった

唇に指を当ててさっき起こったことを確認し、ようやく理解すると

「や、やられた~;;(／／／)」

顔を真っ赤にしそう叫んでいると姉さんが帰宅し

「・・・さっき帰る途中で顔を真っ赤にして走ってる木下を・・・・・
夢希?どうかした?」

「にゃ、にゃんでもないですぅぅ;;」

今日起きた出来事は忘れられない思い出になりました

第十八話　初デート（後書き）

初々しい二人を書こうとして気がつくと口から砂糖を吐き出しそうなものになっていた≪。Д。≫でも後悔はしない！
感想お待ちしてます（。Д。）ノ

第十九話　清涼祭　準備

桜の花びらが通学路から徐々にその姿を消し、少しずつ季節が変わろうとしているこの時期

私が通う文月学園では教室内の装飾、展示物の制作、調理器具の手配など学園全体が活気に包まれていた

新学年最初の行事「清涼祭」の準備である

私のクラスのＡクラスはメイド喫茶をやることになった

気になるお店の名前は「ご主人様とお呼び！」・・・だれが考えたんだろう；；

と、とにかく私にとってはこの文月学園に転校してきて初めての学校行事。とても楽しみにしていた

そう、楽しみにはしているんだけど・・・

「ね、ねえ？優子；やっぱり私も着なきゃだめ？私厨房のほうにいくからさ～；；」

「だ・め・よ！あんたも着るのよ、メ・イ・ド・服！！」

すごい凄みのある顔でそういわれた；；

「あはは、あれちょっと着るの恥ずかしいからね。一人でも巻沿いが欲しいんだろうね；」

ヘルメットを被った愛子が苦笑いでそう答えた

「あれ？どうしたの愛子？ヘルメットなんか被って」

「ああ、今回の清涼祭で使う教室の内装工事を見に行ってたんだよ」

流石ＡクラスというべきなのだろうかＡクラスの教室の大半をいま清涼祭のためだけに内装工事を業者に依頼して行われているのだ

清涼祭が終わったら次の週にはもう元の教室に戻すらしい。お金のかけ方が半端無いな；；

「で、どうだったの工事のほうは？」

「うん、大方は終わってるから今日中には完成するって業者の人がいってたよ」

「なんか予想してたよりも早く終わりそうだね」

「お店のメニューのほうはどうなったの？」

「メニューのほうは単品がショートケーキ、モンブラン、ガトーショコラと後その他五品の計八品、あとはドリンクとのセットメニューと単品ドリンクが三品っていったところかな」

メイド喫茶をやること決まったときメニュー開発を優子が私を推薦してきたのが始まりだった

優子によくお菓子作りをしているとうっかり口を滑らせたのと愛子が美味しかったと密告したのが原因なんだけど；；

メニューは喫茶店に合いそうなケーキをいくつか作りドリンクは教室で用意されている物でケーキと合いそうな物を選んで貰って試食してもらい決定したものだ

試食が終わった際にクラスの女の子達に他にはないのかと迫られたことをよく覚えている‥‥

「ところで夢希は清涼祭はやっぱり予定とかあるかな?」

「うーん、今のところはないかな」

「へー意外だね、てっきり優子の弟くんと一日清涼祭巡るものかと思ってたんだけど?」

「本当はそうしたかったんだけどね;;。愛子はFクラスが何をやるか知ってる?」

「うん?ううん、知らないけど何をするの?」

「中華喫茶やるんだって。お店の名前は・・・ヨーロピアン」

「え?;;中華なのに何故ヨーロピアン?」

「さ、さあ?;;、まあそれはいいとして秀吉君ホールで接客するみたいなんだけど」

「ふんふん、それで？」

「その時の秀吉君の服装・・・男物の制服だと思う？あのＦクラスで」

「ああ・・・・、間違いなく女物でウェイトレスだね；；」

「そうなると秀吉君はＦクラスの看板娘（？）になって」

「それを男子が目当てにやってくると」

「そうなるとお店を空けるわけにもいかなくなるから時間が取れなくなるって訳ですよ；；Ｆクラスは女子の数が圧倒的に少ないから」

「なるほどね；；」

「あ、でも後夜祭は一緒に過ごそうって予約入れておいたけどね♪」

「あはは、抜け目ないね夢希は♪でもそうならボクにとっては好都合かな」

「うん？どういうこと？」

「夢希、ボクと一緒に試験召喚大会に出場しない？」

「試験召喚大会？なんなのそれ？」

「全校生徒の選抜チームで戦うランダムトーナメント戦だよ。もちろん優勝者には景品もあるよ♪」

そう言うと召喚大会のチラシを見せてくれた

えーとなになに優勝賞品は「白金の腕輪」に「如月ハイランドプレオープンプレミアチケット」？

「愛子はこの優勝賞品が欲しくて出場するの？」

そう聞くと愛子は苦笑いしながら

「いや～；ボクはお祭り感覚で出るつもりだったから賞品にはあまり興味なかったんだけど、・・・代表に頼まれてね；；」

「姉さんが？」

「うん、もちろん代表も出場するみたいだけど万が一に代表が負けるということもあるかもしれないから」

「でもなんで姉さんそのチケットそんなに欲しがるんだろう？」

「このプレミアムチケットなんだけどこれ如月ハイランドでウェディング体験が出来るみたいなんだよね」

「ああ・・なるほど：、だから姉さんあんな風になってるんだね：：」

そう言って振り返る。そこには

凄い眼差しで食らいつくように試験召喚大会のチラシを見る姉さんが：：

殺気とも闘気ともどちらと取ればいいか分からないような気のようなモノを出し、それに気が付いたのかクラスの皆は姉さんから離れ

ていた…

「う～ん…もし代表がチケット手に入れたとして坂本くん大丈夫かな？坂本くんが素直に代表と一緒に行くとは思えないんだけど…」

「大丈夫だよ♪その時はスタンガンで気絶させるかもしくは鈍器のような物で殴って気絶（？）させてから拘束具をつけて連れていくと思うし♪」

「いやいやいや…、それ暴行だよ？…一歩間違えたらそれ殺人だから！？」

「えー、大丈夫だよ♪ただじゃれ合ってるだけだよ」

「いや、それじゃれ合うとか言わないから…」

夢希の予想より斜め上の答えに愛子は思わずツッコミをいれていた…

試験召喚大会の出場を了承し愛子と清涼祭について話しているとクラスの子が

「夢希ちゃん、彼氏さんが呼んでるよ～♪」と呼んでいた；；

あのFクラスとの試召戦争で秀吉君との関係はクラスの皆にはバレバレな訳で；；

私は顔を赤らめながら教室を出るとそこには私と同じく顔を赤くしている秀吉君となんだか元気がない様子の美波がいた

「す、すまんの夢希（／／／）急に呼び出してしまって」

「い、いや別に大丈夫だよ（／／／）ところで美波どうしたの？なんだか元気ないみたいだけど？」

「あのさ、夢希は試験召喚大会のことは知ってるわよね？」

「うん、ついさっき愛子からそのこと聞いたし」

「Aクラスからは誰が出るか聞いてない？」

「とりあえず私と愛子がペアーで出るよ。あと姉さんも確実かな、

だれとペアーで組むかまでは知らないけど」

私がそう言うと沈んだ面持ちになる美波。どうかしたのだろうか？

「あのね夢希、無理を承知で協力して欲しいことがあるの！」

「一体どうしたの？なにかあった？」

「えーとね一応秘密の話だから内密にね」

そう言って美波から聞いた内容はFクラスの設備が余りにも悪いため身体の弱い瑞希を心配した親が瑞希を転校させようと考えていること、それを阻止するために今回の清涼祭の売上で設備を向上させまた試験召喚大会で優勝して瑞希の親を説得させること

確かにFクラスの設備は最悪と言ってもいいし、それに衛生面的に見ても厳しい環境と言わざるえない。そんな中に身体の弱い自分の娘を置きたくないという瑞希のご両親の気持ちもわからなくはないが

「清涼祭の売上のほうはワシらの努力次第でどうにか出来るかもしれぬが召喚大会に関してははっきり言ってワシらは姫路の足を引っ張ることしか出来んのじゃ。例え姫路が霧島に次ぐ高得点者と言えど強敵ぞろいのこの大会で優勝を狙うのは至難の技と言っても良い・

・・・それで、なんじゃが」

「なるほどね、とりあえず事情はよくわかったよ。それで協力して欲しいと、具体的にはもし美波達と当たった場合は棄権することかな？」

「・・・うん。すごくウチらの勝手の事情で申し訳ないんだけど」

凄く申し訳なさそうにする美波

「気にしないで♪そういうことなら私も協力するけど私の一存では決められないから愛子にもこのこと話さないといけないけどいいよね？」

「うん、ごめんね無茶言って；；」

私は愛子を呼び出しそして事の事情を説明した

「なるほどね、そういうことならボクも協力するよ♪せっかく知り合ったのにすぐにお別れなんてなんか悲しいもんね。でも、それだとチケットのほうはどうしようか？代表には協力するって言っちゃったしな」

「その件に関しては問題ないとおもうよ」

「うん？どういうこと？夢希」

「ふふ、雄兄の行動を知り尽くしているのはなにも姉さんだけじゃないってこと♪」

そう言っている私の顔は愛子が言うには新しい悪戯を思いついたような子供みたいだったそうな‥

「あはは、少しは加減してあげなよ？」

「さあ？どうでしょう？♪」

「二人とも何の話をしておるのじゃ？」

「ああ、こっちのことだから気にしないで。まあ後々何のことだったのかわかると思うから」

「？？？」美波と秀吉君はなんのこと？と首を傾げていた

「とりあえず私と愛子は協力するから安心して」

そう言うと美波と秀吉君はほっと胸をなでおろした

「良かったわ、Aクラスに協力してくれる人がいるだけでも心強いわ」

「Fクラスからは誰が出るの？」

「ウチからは私と瑞希のペアーと私たちをサポートするアキと坂本のペアーね」

「なんだムッツリーニ君出ないのか残念；せっかくこの前のリベンジができると思ったのに」

そう言って残念がる愛子に美波が

「でもウチの店のメニュー土屋が作るから土屋の手料理が食べられるかもよ？」

「ムッツリーニ君の手料理か～♪ムフフ、時間空いたら是非行くね」

さっきまでの残念顔から一転笑顔になる愛子。土屋君のことが気になるのかな？

試験召喚大会での協力を約束し教室に戻ると優子がダンボールから新品のメイド服をだしていた。おそらく以前注文していたのが今日届いたのだろう

「ああ、丁度いいところに来たわね。今ちょうど制服が届いたから試着してくれない？当日になって合いませんでしたじゃ遅いからね」

「私達姉妹は大丈夫。だって私達は双子の姉妹、体格も同じのはず」

そう言う姉さんを見るときっちりとメイド服を着こなしていた。周りの男子はそんな姉さんに見とれていた

「でももしかしたらって事もあるかも知れないから一応着てみたら？夢希」

愛子にそう言われ試着室に行き数分後、メイド服を来て姉さん達がいる所に戻ってきた

「どう？着心地は？」

優子にそう聞かれ私はちょっと気まずい気持ちで

「実は・・・ちょっと・・」

「う～ん？もしかして・・・太った？にやにや」

愛子が悪そうな顔で私のお腹を見ながらそう言うのだが実は・・・

「えーと・・・お腹じゃなくて・・・その・・胸が；；」

そう言った途端姉さんがガーンΣ（゜Д゜｜｜｜）といった顔になって恐る恐る私に

「ゆ、夢希、もしかして・・・また大きくなった？」

「え、えーと・・・そうなりますね；；」

そう言った次の瞬間シュッと姉さんの姿が消えたと思ったら私の後ろに回り込み、そして

「また姉である私を差し置いて大きく・・・、私にも少し分けるべき」

そう言って姉さんは私の胸を力一杯揉む、のではなく握ってきた・・・

「そ、そんなこと言っても無理で、痛い！痛い！！姉さん痛いです！？・・・」

そんな光景をじーと見ている優子に愛子が優子の肩に手を置き

「・・・大丈夫私達にも需要はあるから　（にっこり）」

「変な慰め言うなーーーー！！・・・」

そうしてあれやこれやで清涼祭の準備期間は過ぎ遂に明日、清涼祭一日目を迎えることになる

第十九話　清涼祭　準備（後書き）

感想お待ちしてます♪ヽ（´▽`）／

第二十話　清涼祭　開幕　一日目（前書き）

※今回の清涼祭はＯＶＡの設定を軸に小説のネタを加えたちょっとカオスな物になってます；；※

第二十話　清涼祭　開幕　一日目

雲一つない晴天の中、清涼祭は開幕した

２－Ａクラス

「モンブランとドリンクのセット２つ入ります！」

「ショートケーキとレモンのタルトそれぞれ２つ入ります！」

「ブレンドコーヒー３つ入ります！」

厨房に対間なく注文が入ってきていた

「ひえ～ヽ（´Д`；）ノ何時まで続くのよ；；この注文の嵐は」

「夢希！口を動かす暇があったら手を動かす！」

「ううう；、アタシ腕痺れてきたかも；；」

厨房は戦場と化していた

厨房は上手く回すために人手を多くまわし開店時のときは夢希を含む料理上手１０人でシフトを組み万全の体制を整えていたが予想以上の客足に悪戦苦闘していた

「・・・私、これ終わったら秀吉君とデートするんだ」

「夢希、それ死亡フラグだから；；」

その後１０人はなんとか客足が落ち着くまで耐え抜くことができ、ついでに夢希の死亡フラグも回避された

ようやく出来た休憩時間に休憩室でへばっていると優子が入ってきて

「あ、夢希悪いんだけどホールのほう手伝ってくれない？」

「あ、あの優子さん？；；私さっきまで厨房という名の戦場で１０人の戦友と共に激戦を耐え抜いてきたばかりなんですけど；；」

「分かってるわよ；；、少しの間だけでいいから。それが終わったらほかのお店見回ってきていいからさ」

苦笑しながら優子にそう頼まれたので更衣室でメイド服に着替えるとホールに向かった

「優子、着替えてきたけどどうしたらいいの？」

「代表と一緒にお客様をお出迎えしてくれる？代表は入口当たりにいると思うから」

優子にそう言われ向かおうとした時、やけに大きな声の喋り声が聞こえてきた

それは教室の中央の席から聞こえてきていた。客は二人で一人は頭が坊主頭でもう一人は髪の先がピンピンに尖った頭、クラスの皆によるとこの二人は三年生らしい

その会話の内容はFクラスの所は汚く、出てくる品は不味いだとかウェイトレスは態度が悪く接客になってないなどFクラスのお店の風評を下げるようなことをまるで周りに聞こえるかのように大声でわざとらしく話しているように見えた

「優子、あれは？」

不機嫌な視線を中央の席に向けてそう聞くと

「ああ・・・あれね、もう一時間前からあの調子よ。正直いい迷惑よ、はあ・・」

そう言うと優子は疲れたため息を吐いた

なんとかしたいが下手に動くと相手を刺激しかねないので今は放置しかなく打つ手がないことに歯がゆいのだろう、ため息を吐いたあと表情が怒りに満ちていたがすぐに優等生モードに切り替え接客に当たった

なんとかあの上級生二人を止めたかったがFクラスのことをあまで大声で楽しそうに言う連中のことだ、もしこちらが何か言えば今度はAクラスに対してありもしない悪評を流すかもしれない。私は込み上げる怒りを抑えて姉さんがいる入口に向かった

「姉さん、手伝いに来ましたよ」

「ありがとう夢希、・・・・夢希気持ちはわかるけど顔に出しちゃだめ、怖い笑顔になってる」

「ええ!?・・・そんなに怖い顔してました?・・・いけないいけない・・・」

姉さんにそう言われ頬を両手で軽く叩き固くなっていた表情を柔らかくした

そうしていると教室の入口に近づいてくる足音が聞こえてきた。どうやらお客様が来たようだ

あ、ちょっとしたサプライズでもしてみようかな♪

最初に入ってきたのは小さな可愛らしい女の子だった

『おかえりなさいませ、お嬢様』

出迎えたのは容姿も顔も髪型も全く同じの二人のメイドだった

・・・・・・

・・・・・・・・?あれ?反応がない?いくら待っても反応がないので顔を上げてみると

「同じ顔のお姉さんが二人いるです？？？」

私と姉さんを見比べて混乱してきたのか教室に踏み出した足をまるでビデオの巻き戻しのように戻していく

「ああ！？；；ごめんなさい；；」

「なんだお姉さん達双子さんだったのですか。葉月びっくりしちゃいました♪」

「ごめんね；；驚かせちゃって；；」

「全く、ちびっこ相手になにやってるんだお前は」

振り返るとそこにはあきれ顔の雄兄と吉井君がいた

「あ、雄兄この子と知り合い？……まさか隠し子？」

私がそう言った瞬間、後ろから身の毛もよだつ殺気が；；；

「……雄二、どういうこと？」

「夢希！？変なこと言うんじゃねぇぇ！！翔子落ち着け！；；；そんな事あるわけないだろうが！？」

「落ち着いて霧島さん。この子は美波の妹ちゃんだよ」

「島田葉月です♪よろしくです♪バカなお兄ちゃんとは将来を誓い合った仲です♪」

・・・・・・・・・・

「吉井君・・・・」

思わず犯罪者を見るような目で吉井君を見ていた

「妹さん!?違うから!?ロリコンじゃないから!だからそんな目で見ないで～;;;」

「・・・まあ、吉井君のロリコン疑惑はとりあえず置いておいて」

「置いておかないで～;;;誤解だよ～;;;」

「天邪鬼な雄兄が素直にここに来るとは思えませんし、なにかあったんですか?」

「誰が天邪鬼だ;;;　・・・うちの店が何者かの悪評のおかげで客足が途絶えちまってな、そんな時このちびっこがこのＡクラスでその悪評を言いふらしている奴らを目撃したらしくてな」

「奴らってもしかしてあの人たちのことですか?」

視線を教室中央の席で大声で話している二人組に合わせる。すると葉月ちゃんが指を指し

「あ!あの人達だよ!!あの大きな声で中華喫茶は汚いって」

「やっぱり常夏コンビの仕業だったか。どうやらまた「交渉」しなきゃいかんらしいな」

そう言うとぽきぽきと拳を鳴らし雄兄の目は敵意に満ちていた

「交渉？何の交渉ですか？雄兄？」

「な～に、パンチとキック、そしてプロレス技による交渉術だ　（ニヤリ）」

「なるほど」

いい笑顔になりましたね雄兄。・・・とびっきり黒い笑顔ですが

「しかしその常夏コンビというのは？」

「あいつらの名前が常村と夏川で頭文字をとって常夏コンビってことだよ」

ああ、なるほどね；；

「とりあえず席に案内しますね、ここにいてあの二人に見つかってもいけませんし」

そうして私達は雄兄達を席に案内した

「こちらがメニューになります♪何になさいますか？」

吉井君はメニューを一通り見て、出した注文が

「それじゃ～・・・・・水で；；」

・・・どうやら今月も食費は厳しいようだ；；

「・・・、わかりました。レモンのタルトと紅茶のセットが2つですね♪」

「え？ええ！？妹さん！？；；僕、注文、水なんだけど」

「大丈夫、私の奢りだよ。でも女の子と一緒なら本来は吉井君がこれくらいはしなきゃいけないんだからね？」

「あはは…はい…」

「葉月ちゃんもそれでいい？」

「はいです♪ありがとうですお姉さん♪　（にっこり）」

ああ・・なんて可愛い笑顔なんだろう♪なんか癒される～♪・・・
持って帰っちゃダメかな？と危ないことを考えている時隣では・・

「ご注文はお決まりですか？旦那様」

「あ、あのな翔子？…なんだこのメニューは？…」

「メイドとの新婚旅行、メイドとのラブラブデート、メイドとの甘いキス？、限りがあるので早めに注文して」

「頼むか！！」

などと夫婦漫才みたいなことをしていると

「いや～ここは綺麗でいいな～」

「さっきの2年Fクラスの中華喫茶は酷かったからな～」

どうやらまた常夏コンビが悪評を流し始めたようだ、飽きもせずによくやること・・・

「店は汚いわ、変な臭いはするわ、店員はブサイクだわとあんな店に行く奴の気がしれないぜ」

「あいつら！！嘘ばっかりいいやがって！もう許せない！！」

常夏コンビの根も葉もない発言に怒った吉井君は常夏コンビに喰ってかかろうとするが雄兄に止められた

「待て、ここで殴りかかったら余計に悪評が広がるようなもんだ。頭を使え」

「ならどうするんだよ？」

「そうだな・・・、翔子メイド服を貸してくれ」

「わかった！」

そう言うと姉さんはメイド服のボタンをひとつ、またひとつと開けてって！ええええええ！！・・・

「だあぁぁぁぁ！！！待て！！待て！！な、なにやってるんだお前！！！」

「だって、雄二が私を欲しいと言ったから　（／／／）」

「雄兄・・・、姉さんとは愛し合っているのはわかりますが、そ、その、そういうことはあまり人目の無いところで　（／／／）」

「ごめん夢希迂闊だった。雄二今日は我慢して」

「夢希！？周りに誤解を与えるようなこと言うんじゃねえ！！；；；翔子！！お前も変なこと言うな！！俺が言ったのはお前じゃなくてメイド服だし、予備があったら貸してくれという意味だ！！；；；」

雄兄にそう言われると姉さんはすごく暗くしょんぼりとした表情になり

「・・・わかった、今持ってくる」

とぼとぼと教室の奥に消えっていった

「あからさまにしょんぼりするな!!;;;」

「メイド服なんかどうするですか?まさか・・・・着るんですか?;;;」

思わず如何わしいモノを見るような目で見ていた

「着るか!!・・・・秀吉に応援を頼む」

・・・・・・・・・・・・・

「とにかく汚い教室だったよな~」

「ま、バカ共が集まる教室だし、教室のある旧校舎自体も汚ねえから当然だな」

相変わらず悪評を流し嫌な笑い声を上げるそんな二人の元にとある
美少女が迫っていた

第二十話　清涼祭　開幕　一日目（後書き）

さてこの後どうしようｗ
今回から活動報告も書き始める事にしたので良かったらそっちも見てやってください、（＊´∀｀）ノ

清涼祭　一日目　その2

突然現れた謎の美少女は迷うことなく教室内でひときわ大きな声で周りに聞こえるようにわざとらしく話している常夏コンビの元に向かった

「お客様」

そう言われふたりが振り返るとそこにはさっきまで教室内にはいなかった美少女メイドがそこにいた

「なんだ?…へえ、こんな子もいたのか」

「結構可愛いじゃねえか」

舐めるような視線で美少女を見る二人。それを受け心なしかその美少女は青ざめてブルブル震えて見えた

「お、お客様、足元を掃除しますので少々宜しいでしょうか?;」

ぎこちない笑顔でそう言うが幸い顔までは見られていなかったため二人はすんなりと立ち上がる

「さっさと済ませてくれよ？」

「ありがとうございます、では・・」

了承を得るとスッっと坊主の三年生をいきなり後ろから抱きついた

「ん？なんで俺の腰に抱きつくんだ？もしや俺に惚れ」

「くたばれぇぇ！！！！」

「ごばぁぁぁ！！！」

公衆の目の前でいきなり三年生にバックドロップを食らわす謎のメイドの正体はバカのランドマークこと吉井明久、通称アキちゃんだった

アキちゃんが誕生したのは今から２０分前のこと

２０分前～

雄二からの要請でＡクラスの休憩室に緑色の可愛らしいチャイナドレスを着た傍から見れば誰がどう見ても女の子にしか見えない男の子、秀吉が訪れていた

「何故じゃろうか、今何か凄く嬉しくないことを言われたような？」

「どうした？秀吉？…やはりこいつを一人前の女にしてやれないか？こいつのたっての希望なんだが」

「雄二！？誤解を招くようなこと言わないでよ！！それになんで僕が着なきゃいけないんだよ！メイド服は秀吉のような女の子が着るべきだよ！！」

「明久！！ワシは男じゃ！！」

「秀吉は無理だ奴らに面を割れているからな。だからお前しかいないんだがやはりいやか？」

「いやに決まってるよ！！；；」

「そうか、・・・よし少し待ってろ」

そう言うと雄二は携帯電話を取り出しどこかにかけ始めた

「ああ、俺だ。実は・・・明久が・・・なので・・・そこで・・・頼めるか？」

「雄二、誰と電話してるの？」

「明久、お前に勇気と自信を与えてやる、ほれ」

そう言って自身の携帯を明久に押し付けてきた

「なんだよ全く、もしもし？」

「吉井君ですか？」

「姫路さん！？姫路さんがどうして？　（雄二のやつ一体なにを？）

」

「坂本くんから話を聞きました。詳しい状況は知りませんが吉井君がとある問題にぶつかって勇気と自信を無くしていると聞きました。勇気を持ってください！吉井君ならきっと出来ます！自信を持ってください！」

姫路さん、状況を詳しく教えられてないのに僕を励ますためにそんなに

「大丈夫です！！吉井君なら綺麗で可愛らしいメイドさんになれますから！だから勇気を、そして吉井君の女装姿に自信を持ってください！」

「そんな勇気と自信嫌だぁぁぁ！！！！；；；」

姫路の斜め上の発言に明久が狼狽しているうちに雄二が携帯を奪うと

「迷惑かけたな姫路。ああ、もう大丈夫だ明久は勇気と自信がついたようだ。それは任せてくれバッチリ撮っておこう。それじゃな」

そうして電話を切るのだった

「どうだ?勇気と自信が湧いてきただろう?」

「湧くわけないだろうが!!!」

「しょうがないな、ならあっちむいてホイで決めるぞ。俺が勝てば着てもらう、お前が勝てばほかの代案を考える、それでいいな?」

「何でしょうがないのか反論したいけどまあいいや;;この勝負絶対勝ってやる!!」

「ではいくぞ?ジャンケン、ポン!!」

明久パー　雄二チョキ

「あっちむいて」

そう言いながら明久のほうに向けて人差し指を差し向ける

「(バカめ!そうやってして避けようと顔を背けたところの方角を指して勝つ気だな、その手には乗らない!)」

明久は人差し指の行方を目を開いて追ってゆくが

「ほい」　ブスっと

「ぎぃやぁぁぁ！！目が、目がぁぁ！！」

「フッ、俺の勝ちだ」

「卑怯者め～～！！；；」

「では約束通り着てもらうぞ。秀吉、綺麗に仕立ててやってくれ♪」

「任せるのじゃ！明久を美少女に仕立てて見せるのじゃ！」

普段からメイクも演劇の技術の一つと語っている秀吉ゆえにその腕前はかなりのものでたった数分で明久の顔は可愛らしい女の子の顔に変わっていた

メイクも終わり次に着付けに移ろうとしたとき今まで何処かに行っていた夢希が帰ってきた

「秀吉君～、言われたとおり演劇部から借りてきたよ」

「おお、すまんのう夢希」

「ん？何持ってきたの？」

明久にそう聞かれ夢希は持ってきた包みを開くと

「じゃ～ん、これだよ♪」

「見えない！僕には上下揃っている女物の下着なんて僕にはぜんぜん見えないからね～；；」

「しかしよくすんなりと貸してくれたな、なんて言って借りてきたんだ？」

雄二にそう聞かれると夢希は

「うん、Ｆクラスの吉井君に必要だからって言ったらすぐに貸してくれたよ？」

「妹さんなんてことを!?これじゃあ僕の社会的信用が～;;;;」

「いや、既にないじゃろ?」「そんな物お前にあったか?」

明久のことを良く理解している友人達であった

「もうお婿にいけない;;」

「存外似合っておるぞ明久」

着付けが終わった明久は可愛らしいメイドになっていた。ちなみにその下は本人の強い抵抗もあってとりあえずブラだけということになった

「それじゃあワシは喫茶店にもどるぞ。悪党どもを存分に懲らしめるが良い」

「了解～、それじゃあ悪党を懲らしめにいきますか」

・・・　　・・・　　・・・

そして現在

「お、お前はFクラスの！まさか女装趣味の変態までいっていたのか！」

「（チッ不味いなんとかしないとますます僕の社会的信用が；；援軍を呼ぶとしよう）、きゃあ～この人私のスカートの中覗いてます～」

「なっ；；、なに言ってやが、ぶはぁぁぁ！！」

「公衆の面前で破廉恥行為とはこのゲス野郎が！！」

痴漢退治という大義名分を持って現れた雄二が常村を殴り飛ばした

「何見てやがったんだ！明らかにこっちが被害者だろうが！！」

こうやって二人が言い争いをしている間に明久は気を失っている坊主に駆け寄ると秀吉に押し付けられたブラに接着剤を付けると坊主

の頭に取れないようにしっかりとブラを押しつけ

「きゃあ～、この人私の胸を揉んできました」と言うと雄二の元まで避難した

「う、ううん、何があったんだ？」

明久の大声で気を失っていた夏川が目を覚ました。そしてその直後に己の頭の上に違和感を覚えた

「な、なんだこれ！？と、取れねえぞ！？」

頭に張り付いたブラを取ろうとそれはもうモミモミと揉みまくる

「ほら、揉んでいるだろうが？」

「かなり違うだろうが！！！」

ざわざわ・・・ざわざわ・・

こんな風にやり取りをしている内に周りの視線が明久たちに集中し

ていた

「チッ形勢が悪い、逃げるぞ夏川！」

「くそ～本当にこれ取れねえぞ！？覚えてやがれ！！」

「逃がすか！！追いかけるぞ！アキちゃん！」

「了解！！ってその呼び方は止めて；；」

逃げる常夏コンビに明久達は追撃を開始した

夢希Ｓｉｄｅ

常夏コンビと雄兄達によるドタバタ劇によって周りは一時騒然となったが今は落ち着きを取り戻していた

「やれやれ、やっとあの三年コンビが出ていったわね。これで少しは落ち着けるってものよ」

優子がほっと安堵した表情で呟いていた。常夏コンビによってこちらにも悪評が立つのではないかと内心冷や冷やしていたのだろう

「それじゃあ優子、私外回ってくるね？」

「ええ、いいわよ。・・メイド服のままで行くの？」

「うん、着替えるのめんどくさいし何より宣伝にもなるでしょ？」

「なるほどね♪でも羽目外し過ぎないようにしなさいよ？」

「わかってるって♪それじゃあ行ってくるね」

そう言って行こうとしたとき、視線の下から声が

「うう、お兄ちゃん達のバカ！！」

凄く不機嫌になっている葉月ちゃんがそこにいた

「あれ？葉月ちゃん？どうしたの？」

「せっかく葉月と一緒に来てたのにバカなお兄ちゃん達、葉月を置いて何処かに行っちゃったです！！」

ああ；；多分あの常夏コンビを追いかけるのに夢中になって葉月ちゃんのこと忘れてるな；；あの二人；；

「ごめんね？一人は自分に素直になれないおバカさんで、もう一人は物凄くバカなお兄ちゃんだから許してあげてくれないかな？」

私は葉月ちゃんの機嫌を治そうとしゃがんで葉月ちゃんと目線を合わすと葉月ちゃんの頭をやさしくなで始めた

最初は子供扱いされたと思い不機嫌な表情になっていたがなで続けると徐々に表情が緩みだし、最後は葉月ちゃんの顔から笑顔が帰ってきた

「何だかお姉さんにこうされるととっても気持ちいいのです♪」

「そう？喜んでもらってよかったわ♪」

「バカなお兄ちゃんが凄くバカなのは知ってるですけどあの赤い髪のお兄ちゃんもおバカさんなのですか？」

「ええ。自分の気持ちを誤魔化しちゃうホント困ったおバカさんよ♪」

そう言って葉月ちゃんと目を合わすとくすくすと笑いがこみ上げてきて気が付くと二人で笑っていた

「お互いバカなお兄ちゃんで苦労してるね♪」

「はいです♪」

「葉月ちゃんはこれからどうするの？私これからFクラスの中華喫茶に行こうと思うのだけど良かったら一緒に行く？」

「葉月も戻ってお手伝いしようと思っていたところです！」

「へえ？葉月ちゃんお手伝いしてるの？」

「はいです♪お姉ちゃんともう一人綺麗なお姉さんと一緒にウェイトレスやってるのです♪」

「そっか、なら一緒に戻ろうか」

「はいです♪」

そうして葉月ちゃんと手を繋いでFクラスに向かうことになった

廊下に出るとこの清涼祭に訪れている人や生徒らでごった返していた

「ところで葉月ちゃんは文月学園来たの初めてだよね?どうやってFクラスまで来れたの?」

「色んな人に教えて貰ったからです」

「教えてもらった?どんな風に?」

「やって見せるので見てて下さいです♪」

そう言うと葉月ちゃんは近くにいた女子生徒に声をかけた

「お姉さん！お姉さん！ちょっといいですか？」

「うん？お姉さんになにかようかな？」

「えーとですね、すごーくバカなお兄ちゃんがいる教室知りませんか？」

葉月ちゃんがそう聞くとその女子生徒は迷うことなく

「ああ、それならあっちね」と指さした

これと同じように会う人に聞いていくうちに気が付くといつの間にかFクラスの前まで来ていた

「ほ、本当にここまで来れたね；；」

「バカなお兄ちゃん本当に凄いです♪」

「あ、あはは；；そ、そうだね；；」

葉月ちゃん…胸を張って言えることじゃないから…

そんなことを考えながら中に入ろうとしたとき、中から土屋君が慌てた様子で飛び出してきた

清涼祭　一日目　その2（後書き）

葉月ちゃんの可愛らしさを上手く出せていたかな（；・∀・）

感想お持ちしてます、（＊´∀｀）ノ

よければ活動報告のところも見てやってください

清涼祭　一日目　その3

明久Ｓｉｄｅ

「くそ！見失ったか！」

雄二が悔しそうに周りを見渡しながらそう叫んでいた

僕達は僕らの店の悪評を流している三年コンビ、常夏コンビがＡクラスにいると葉月ちゃんの情報を受けＡクラスに向かい僕の社会的信用の危機というリスクを引き換えに行われた高度な作戦により常夏コンビを追い詰めたが常夏コンビが逃げ込んだオバケ屋敷の中でやつらを見失ってしまったのだ

「どうするの雄二？あの常夏コンビのことだよ？また何処かで悪い噂を流すに決まってるよ？」

「ああ、そうだな。早く奴らを見つけないとな」

廊下で僕らが焦り始めているとムッツリーニが慌てた様子で息を荒くさせながらこちらに向かってきた

「どうしたのムッツリーニ？何かあったの？」

「た、大変！！ウェイトレスが誘拐された！」

「なんだと！？どういうことだムッツリーニ」

ムッツリーニによると常夏コンビは僕らが奴らを見失っている間に店に来てウェイトレスを連れ去ったらしい

それを聞いた僕の中からグツグツと怒りがこみ上げ始めていた

・・・あの野郎ども！！

「ムッツリーニ、奴らの居場所分かるか？」

「・・・少し時間が掛かる」

「構わない、頼む」

雄二がそう言うとムッツリーニは何処かに向かい走り出し僕らもそ

の後を追った

少し走った後ムッツリーニにはとある場所に入っていった。そこは二年生の男子更衣室だった

ムッツリーニはその中にあったロッカールームの一つを開けるとそこには無数のコードと繋がっているノートパソコンがあった

ノートパソコンを起動させると物凄い指さばきでプログラムを動かすと画面に色んな学園内の映像が映っていた

「ムッツリーニ、この映像はなんなの？」

「Ｍｙ監視カメラ」

ムッツリーニはそうきっぱりと言ったがその映像全てがローアングルになモノばかりだが今はそんなことを突っ込んでる場合じゃない

だが残念ながらそれらに常夏コンビが映っているものはなかった。するとムッツリーニが音声モニターに切り替えた

監視カメラの他にも音声まで学園中に付けたらしい。ここまでやる

とは流石寡黙なる性識者（ムッツリーニ）

僕らは目を閉じ聞こえてくる音声に耳を傾けた

しばらくするとムッツリーニが何かを捉えたらしく数多い音声モニターの中から二つのモニターを選別した

その中の一つから聞き覚えのある忌々しい声が聞こえてきた

「いやがったな！常夏コンビ！ムッツリーニ、奴らがいる場所は？」

「ここは・・・体育倉庫！」

それを聞くと僕は自然と体育倉庫に向かって走り出していた

廊下はこの清涼祭に来た来客や生徒で混雑していて通り抜けるのも難しい状況だが構うものか！！

待ってて！！姫路さん！美波！

体育倉庫に向かう途中色んなモノにぶつかって今の僕の容姿は凄い

ことになってるだろうがなんとか体育倉庫前にたどり着いた

そして体育倉庫の扉を思いっきり開いた

「姫路さん！美波！無、・・・・・事？」

僕の目に映っていたのはボロ雑巾のように床に伏せている常夏コンビ、そして体育倉庫の中央で一際異彩を放つ殺気ダダ漏れの妹さん、それをそばで見て苦笑いする秀吉が映っていた

「え、え～と；；；、秀吉これは一体どういうこと？；；；」

「うむ；；；、無理やり連れてこられてボードゲームの相手をさせられておったのじゃが」

「そんな中に夢希が突入して常夏コンビを伸した、って所か」

「・・・容赦ない」

振り返ると僕を追って追いかけてきた雄二達がこの惨状を見て唖然とした表情でそう言っていた

「夢希、お前どうやって常夏コンビがここに居るって分かったんだ？」

雄二がそう妹さんに問うと妹さんがギロりと殺気に満ちた目でこちらを振り返ったので僕らは思わずビク！！となったがそれは一瞬で次の瞬間にはいつもの妹さんに戻っていた

「ああ、それはね・・・」

それは明久達が体育倉庫に向かう少し前に遡る

夢希Ｓｉｄｅ

私と葉月ちゃんがＦクラスの前まで来たとき教室から土屋君が慌てた様子で飛び出してきた

「土屋君！？どうかしたの？そんなに慌てて」

「厄介なことが起こった！」

それだけを言うと土屋君は何処かに行ってしまった

「厄介なことってなんだろう?」

「さあ?葉月にもわからないです;;」

教室に入ってみるとそこには心配そうな顔で俯いている瑞希と美波の姿があった

「お姉ちゃん、どうかしたのですか?」

葉月ちゃんが美波にそう尋ねるといきなり抱きついた

「良かった!!葉月無事だったのね!心配したんだからね;;」

「お、おねえちゃん!?どうしたですか!?;;」

「瑞希、何かあったの?」

「それが実は・・・」

「ウェイトレスが一人あの常夏コンビに連れて行かれた!?」

「ええ、いきなり喫茶店に現れたと思ったら連れていっちゃって;;」

「それで葉月の帰りが遅いからもしかしたら葉月もあいつらに連れて行かれたかと思って」

なるほどね、だからあんなに心配そうな顔してた訳だ・・・、うん?ウェイトレスが一人?確かこの中華喫茶のウェイトレスは瑞樹に美波にあと一人は・・・・

「あ、あのさ瑞希?その連れて行かれたウェイトレスってもしかして?」

「はい、木下君です；；」

バキ！！と激しい音が鳴りその場にいた者たちがその音がなった場所を見るとそこには机の角を強く握り机に少しヒビを入れている夢希の姿があった

美波達は夢希の後ろにいたのでその表情を伺うことは出来なかったが不幸にも夢希の正面にいた瑞希が顔を青ざめてガタガタと震え出しているのと夢希から発せられる殺気からかなり怒っていることを察した

「あいつら・・・、よくも秀吉君を・・・、こうなったらたっぷり彼らとは「交渉」しなきゃいけませんね」

「ゆ、ゆ、夢希？落ち着いて；；人殺しは犯罪よ？木下だって悲しむから止めなさい！？；；」

その場の空気からやりかねないと思ったのか美波が落ち着くように言うと

「ええ？何言ってるの美波？そんなことしないし私は冷静だよ　ニコッ」

それはもう満面の笑で答えたという

「いや･･;その笑顔が逆に怖いわ･･;」

「じゃあちょっと秀吉君連れて帰ってくるね」

「ちょ、ちょっと!場所分かってるの?あの三年コンビが隠れてる場所」

「ううん♪」

「ううん♪って･･;それじゃどうやって見つける気よ?」

「こうするの♪」

そう言って教室を出て廊下に向かうと

「すみませ～ん!!!」と大声で言い廊下にいた人々の視線をこちらに集めると

「頭にブラを付けたボウスの変態どこに向かったか知りませんか～！！！」とそう聞くと

目撃者が大勢いたらしくそれぞれが一斉にボウズが向かった先を指さすとそれが一本のルートに繋がっていった

あはは；；言ってみるもんだなと思いながらそのルートに向かって走り出そうとした時、Ｆクラスの入口付近に落ちてあったある物を見つけた

秀吉Ｓｉｄｅ

ああ、もう帰りたいのじゃ；；

喫茶店に戻りウェイトレスの手伝いをしておったらまたあの常夏コンビが現れて、姫路や島田と可愛い女子がおるにも関わらず迷わずどういう訳かワシを連れ去り無理やり体育倉庫まで連れてこさせるとボードゲームの相手をさせた

坊主のほう　（何故頭に女性物の下着を付けておる）はまだいいの

じゃ何故かあの相方の視線が妙にこっちを熱い目線で見ているように感じて寒気を感じるのは気のせいじゃろうか・・・

いい加減帰してくれんかのうと思っていた時、バァン！！と扉が開かれた

「「誰だ！！」」と常夏コンビが振り向くとそこには

ＦＦＦとロゴが入った覆面を被ったメイド（？）らしき人物がそこにいた

清涼祭　一日目　その４（前書き）

相変わらずの出来ですが良かったら見て下さい、（・∀・）ノ

清涼祭　一日目　その４

秀吉Ｓｉｄｅ

バァン！！と体育倉庫の扉が開くとそこにはＦＦＦのロゴが入った覆面を被ったメイド（？）らしき人物がいた

「なんだてめえ、ぶふぉぁぁぁぁ！？」

「へ？」

そのメイドらしき人物はいきなりこっちに向かって走り出しこっちに妙に熱い視線を送っていたボウズの相方にローリング・ソバット（飛んで旋回する後ろ蹴り）を叩き込んで吹き飛ばしおった；；

いきなりの事にボウズのほうは今起きている事に頭がついてこない様子のようじゃ；；

「お取り込みのところすみませ～ん先輩方。ちょ～と「交渉」しにやってきました♪」

「こ、交渉だと!?ふ、ふざけるな!!」

口では強気なことを言っておるボウズだがさっきの相方が吹き飛ばされているところを間近で見ているためか少し震えておった;;;

しかしこの覆面を被ったメイドの声、どこかで聞き覚えが・・・

「ふざけてませんよ?あれはローリング・ソバットから始める交渉術です♪」

「そんな交渉術あるか!!って、ちょっと待て;;;確か同じことが今日何処かであったような;;;」

ボウズは何か思い出したのかゆっくりとそのメイドから離れようとする

「あれ~?どこに行こうとしてるんですか?先輩。まだ交渉が終わってませんよ?」

「い、いや、もうそれは常村ので十分だ;;;交渉事はスマートに終わらせないとそっちに迷惑かけちまうしな;;;;」

「いえいえ～ご遠慮なさらずに～♪、という訳でこれがアルマーダ（相手を見ながら体をひねり、ひねった反動で相手を蹴るカポエラの蹴り技）から始める交渉術！！」

「へぼはぁぁぁぁぁ！！！」

相方に全てを押し付けようとしたが無駄な抵抗も虚しくボウズもまた飛んでいった

「・・・これにて交渉終了」

まるで雄二のような交渉にあの強力な蹴り技、やはりこの人物は

「秀吉君、大丈夫だった？」

そう言って覆面を取り出てきた顔はやはり

「やっぱりお主じゃったか；；；夢希」

「やっぱり？バレてた？；；；」

「当たり前じゃ、それにしてもちとやりすぎではないかの？；；」

「いいの、いいのこれ位。これに懲りて自分たちがやってきた事に反省するでしょう。・・・ところでさ秀吉君？」

「なんじゃ？」

夢希の目がフッと見るからに危ない目付きでボウズの相方を見て

「この人いつかまた秀吉君に害をなすと私の本能が、第六感が警笛を鳴らしているんだけど・・・やっちゃってもいいかな？」

「ま、待て待て！！；；待つのじゃ夢希！！；；」

あの目はやりかねなかった；；；

秀吉Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「・・・とまあこういうことがあったのじゃ・・・」

「秀吉、君は一人の人間の命を救ったんだね・・・誇ってもいいことだよ」

明久の言葉に頷く雄二とムッツリーニ

「さてと、それじゃあ店に戻るか。あの様子だと常夏コンビの妨害もこれでなくなるだろう」

雄二がボロ雑巾と化した常夏コンビを見ながらそう言った

「ところで雄兄、ちょっとお願いがあるんですけど？」

「お願い？」

Fクラス

「中華喫茶ヨーロピアンにようこそ♪」

チャイナドレスを来て客を出迎える夢希の姿があった

「しかし良かったのか?他のクラスの手伝いなんかやって?」

「大丈夫ですよ雄兄、他のクラスとの交流を踏まえての事だって言えば先生達も何も言いませんて♪」

「悪知恵が働く奴だな」

雄二がニヤリとした顔で言うと

「ええ、昔からよく悪知恵を働かせていた幼馴染から学びましたからね〜」

とニヤリと言い返した

「悪かったな、悪知恵が働く幼馴染で」

「あはは、でもまあそのおかげで」

ふと視線を動かすとそこにはウェイトレスとして働く秀吉の姿が

「あの姿が見れるから役得ですしね～♪」

「・・・なるほど；；」

そうして夢希は時間いっぱいまで働きFクラスの利益に貢献した

「それじゃあそろそろ戻らないと優子に何言われるかわからないからそろそろ戻るね？」

「すまんかったな夢希。助かったのじゃ」

Fクラスに来た時と同じ服装のメイド服に着替え、夢希が秀吉とふたりきりでFクラス手前の廊下で話していた

雄二達がお礼を言おうとしたが気を使い二人きりにさせたのだ

「いやいや♪こちらこそいいもの見せてもらいましたし♪」

「何の事じゃ？」

「あはは、何でもない；；こっちのことだから；；それじゃあね！」

そう言ってFクラスを出て自分のクラスに戻ろうとした途中、何かを持ったムッツリーニが現れた

「土屋君？どうしたの？」

「霧島夢希、今回のことは本当に助かった。これはほんのお礼」

そう言って夢希に手渡したのは

「こ、これは！！」

今日ウェイトレスとして働いている秀吉の写真だった；；

「今回のは無料、次からは有料。ところでこんなモノもある・・・」

それから少し時間が経って再びFクラス

Fクラスでは今日の売上の計算が行われていた

「どうだ島田?売上の方は?」

「凄いわよ坂本!これならシステムデスクも買える金額よ」

美波の発言に歓喜に湧くFクラス

「どれどれ?・・・・、なんだこの巨額の売上は?;;;」

そこに書かれていたものの中には明らかに喫茶店のものではない利益が加えられていた

「清涼祭限定版」

そう言ってムッツリーニが取り出したのは豪華な作りになっている女装して明久の写真の商品だった

これには明久も苦笑いするしかなかった…

「・・・ん？それとなんだこの「木下秀吉プレミアムレアＢＯＸ限定生産」てのは？」

「なんじゃと!?ムッツリーニ!!あれほどワシに無断で」

売るなと秀吉が言おうとしたところに

「ムッツリーニ!!まだそれはあるの？」

明久が今までないくらいの真剣な顔でそう尋ねていた

「明久、お前これ買えるのか？」

雄二がそう言って金額が書かれている紙を見せると明久が固まった

そこに書かれていた数字は明久の食費半年分に相当するものだった

「命かそれとも夢に生きるのか、う～ん；；」

と明久がバカなことを考えていたのは秘密である

なにはともあれこうしてFクラスの夢は二日目に続くのであった

「えへへ～ヽ（＊、∀、）ノ」

「夢希どうかしたの？帰ってきてからずーとあんな調子だけど；；

？」

「さあ……？」

購入者はもちろんこの人

清涼祭　一日目　その４（後書き）

とりあえず夢希こんな風にしてみました（；´д｀）

どうだったでしょうか？感想お待ちしてます♪ヽ（´▽｀）／

召喚獣の設定（前書き）

オリジナル設定も含まれていますのでおかしいところがあるかもしれませんのでご注意を；；

召喚獣の設定

服装

黒の法衣服に黒のブーツを履いている

武器

トンファー

シルバーのトンファーを両手に装備。実はトンファー自体には余り攻撃力は設定されておらずその大半は召喚獣の足に集中している

戦闘スタイル

カポエラに夢希のアレンジが入った型で思わぬ体勢からの強烈な一撃を貰い補習行きになった者の数は少なくない

一気に相手に接近し小回りの利くトンファーで相手の動きを封じ最後に得意の蹴り技で終わらせるのがいつものパターン

接近戦の相手なら得意だが遠距離戦の相手は苦手

腕輪の能力

「幻影」

自らの周りに霧を発生させてその中で自分の召喚獣そっくりな影を作り出し敵を混乱、錯乱させるだけなので攻撃性はない。しかも敵味方の区別なく掛かる為、試召戦争では一対多数戦、敵クラスの足止め、味方の撤退の殿位にしか使う機会がない

しかし攻撃性がない分継続時間が長く燃費のいい能力ではある

清涼祭　二日目

慌ただしかった清涼祭一日目が終わり、二日目のこの日は試験召喚大会があり結果次第では瑞希が転校してしまうかもしれない大事な日でもあった

本日もＡクラスの客足はよく大勢のお客様でてんてこ舞いだったがどうにか切り抜けきりのいいところでクラスの子と変わって貰い愛子と共にメイド服姿で召喚大会の会場に訪れていた

そこには大勢の観客に中央には大きなモニターそして召喚獣達が戦う広いステージが用意されていて学園がこのイベントに力を入れていることがよくわかるものだった

「うわ～すごい人だね、こんな大勢の前で戦うとはね～」

「観客の中には今日の清涼祭で来てるお客さんも含まれているからね」

そんな風に愛子と雑談をしていると会場にやってきた雄兄と吉井君を発見した

「こんにちは雄兄、吉井君」

「あ、妹さん！昨日は助かったよ。妹さんのおかげで売上もアップしたってムッツリーニも言ってたよ」

「あはは、それは良かった。どの位の売上になったんですか？雄兄」

「かなりの売上だったぞ・・・まあ喫茶店以外の売上も含まれていたみたいだがな；；。まあ島田によるとシステムデスクを買える位にはなるそうだ」

「凄いじゃないですか！あとは試験召喚大会に優勝すればいいわけですね♪」

「秀吉から話は聞いてるよ、ごめんね何だか僕らの問題に巻き込んじゃって；；」

「ううん、気にしないで。私も瑞希の転校は嫌だしね♪ところで勉強はしてきた？少しでも点数稼いでおかないと苦しいよ？」

私がそう言うと「うっ；；」と吉井君の表情が曇ったように見えた

「ああもちろんだ、こいつなりに明久は精一杯勉強してきたのさ・・

・・・日本史を」

え?日本史?雄兄に言われて私は召喚大会のチラシを見るとそこには今日の対戦科目にどこにも日本史は記載されていなかった

「だってそんなの知らなかったんだよ～;;」と泣いていた;;

少しは確認しようよ吉井君;;

「そんなことで本当に大丈夫なのかな?ボクちょっと心配になってきたよ;;」

苦笑いを浮かべながら愛子がやってきた

「まあ吉井君は残念な感じになっちゃったけど」

「残念な感じって言わないで～;;」

・・・それは否定できないな;;

「坂本くんはどうなの?しっかり勉強してきた?」

「そこの残念男と一緒にしないでもらおうか。俺はつぎこそAクラスに勝つために日々勉強しているんだ」

あ、また凹んだ

「へ～まだ懲りてなかったんだ?でも今度はボクだって負け、ん?坂本くん?」

あれ?なんか雄兄の様子が

「お、俺は!自分の将来、そして未来を守るためにも絶対Aクラスに勝たなきゃいけないんだ!!」

過去一番の真剣な顔で雄兄は自分にそう言い聞かせるように言っていた;;;

「あ～;;なんだかこっちもこっちで大変みたいだね?夢希;;」

「そうみたいだね;;」

姉さん何か言ったなアレは…；

そんなことをしているとアナウンスが流れ

「これより試験召喚大会を行う！！」

ドスの聞いた声、西村先生の開幕の宣言ともにファンファーレが流れ召喚大会の幕が上がった

すると中央のモニターに

第一試合
Ｆクラス吉井明久　Ｆ坂本雄二　と表示されていた

「あ、雄兄早速試合みたいですよ？」

「よし！締まっていくぞ明久！！」

気合十分の雄兄に対して吉井君は

「お～（一＿一；）」

かなりテンションダウンしていた；；

「全く、当てが外れたくらいで落ち込むな、ほらさっさと行くぞ！」

雄兄はテンションが下がった吉井君を立ち直らせるとステージに向かった

「大丈夫かな～？；；」

不安そうに言う愛子、大丈夫！とは言えない自分がいた；；

すると雄兄達の対戦相手にEクラスが表示され

「ほら、対戦相手はEクラスだから成績は拮抗してるし教科次第ではいけるんじゃない？」

なんとか希望が持てそうな状況で私がそう言っていると

Bクラス岩下律子　Bクラス菊入真由美

突然対戦相手が変わっていた

「対戦相手が変わった!?どういうこと?」

いきなりの事に驚いていると愛子が詳しい状況を聞きに行ったらしく

「さっきステージの機材担当の子に聞いたんだけどなんでも機材のトラブルでああなったって」

トラブル?それにしてもタイミングが良すぎない?

「この試合の後にもたくさん試合が控えてるし時間も押してるはずだから、もうこうなったらこのまま試合が始まっちゃうよ?坂本君達勝てるのかな?」

愛子の不安をよそにお互いが召喚獣を召喚した

対戦科目数学

Ｂクラス岩下律子　Ｂクラス菊入真由美
１７９点　　１６３点

さすがＢクラス！点数が高い！雄兄達のほうは

Ｆクラス　坂本雄二
１７９点

Ｂクラスと互角！！これはこれで凄いことなのだが・・・

「理由が理由なだけに必死に勉強してたのがよくわかる点数だよね？；；」

「そうだね；；」

素直に驚けなかった私達だった；；

吉井君はと言うと

Ｆクラス　吉井明久
６３点

・・・・・どうしようもなかった

「・・・これ勝てるのかな?・;・;」

「た、確かに向こうのほうが点数が高いけどお互いのコンビネーションなら雄兄達のほうが」

ステージ上の二人はお互いが相手をまかせていた・;・;

「坂本くん達のほうが?」

「う、上だといいな~・;・;」

その後雄兄達は真っ向勝負に切り替えたようで互いに一対一の戦いが始まった

吉井君は岩下さんに当たり最初は点数が圧倒的に高い岩下さんが攻勢を仕掛けたが観察処分者で普段雑用をやらせれている為召喚獣の操作が段違いに上手くなっている明久君に攻撃が当たるはずもなく逆に少量ではあるがダメージを受けつづけていた

一方雄兄は菊入さんに当たりこちらは点数が拮抗してはいたが召喚獣の操作は雄兄のほうが一枚上手のようで押していた

そして雄兄が菊入さんの召喚獣を吹き飛ばし、吹き飛んだ菊入さんの召喚獣が相方の岩下さんの召喚獣にぶつかり一ヶ所に固まると雄兄達の召喚獣は

袋叩きを始めていた…

「夢希？あ、あれなんか坂本君達悪役ぽく見えるんだけど？…」

愛子はステージ上で行われている惨劇？を指さしていた

ぽくじゃなく私には悪役にしか見えないよ愛子…

もちろんそんなことに対して観客からは物凄いブーイングが巻き起こっていた…

そうしている内にＢクラスコンビの点数がなくなり召喚獣が消滅し雄兄達の勝利が決まった

そうなると益々ブーイングが酷くなっていったのは言うまでもなかった；；

色々とあったがこうして第一試合が終了した

私達は第三試合で登場したのだがその時の相手がＥクラスでどうやら私たちの本来の相手はＢクラスのようだった

Ｅクラスに私たちが負ける要素はなく難なく一回戦を突破し、雄兄達と私達は順調に二回戦に進出した

清涼祭　二日目　その2

私達と雄兄達は共に勝ち進み次の第二回戦に駒を進めた

Ｂクラス※※※※　Ｃクラス小山友香

第二回戦の雄兄の相手はＢクラスとＣクラスのペアーだった

またＢクラス、やっぱりこれは誰かが対戦カードをいじっている？
それにしても・・・

「あれ？う～ん？？」

「どうしたの夢希？そんなに目を凝らして坂本くん達の対戦相手見ちゃって」

友人の行動に不思議そうに愛子が尋ねると

「えーとね？Ｃクラスの小山さんはしっかり姿も名前も見れるのにその相方のほうが顔も名前もモザイク掛かっちゃって見れないんだよ？どうしてだろうね？愛子」

「あ、あはは…そうなんだ…機材の故障とか光の屈折具合によるものじゃないかな～…　（まだ根に持ってたんだね夢希…）」

モザイク処理されていたのはＢクラス代表の根本恭二だった
試召戦争の時に女装姿でＡクラスに乗り込んで来たときに夢希の瞳のファイヤーウォールが働き今もその働きは稼働しているようだ…

対戦科目英語
Ｂクラス※※※※　Ｃクラス小山友香
　１９９点　　１６５点
ＶＳ
Ｆクラス坂本雄二　Ｆクラス吉井明久
７３点　　５９点

「夢希…、坂本くんＡクラスに勝つために勉強してるって」

「うん…・・・たぶん全教科は無理だったんだね…」

「どうするの？あれじゃあまともに勝ち目ないよ？」

愛子が心配そうに言っていると舞台下から土屋君が現れ何かを雄兄に渡した。一体何を？

すると

「※※！！（根本！！）これを見ろ！！」

雄二が何かを前に出してきた。それは中央のスクリーンに映し出された

映し出されたのはＢクラス代表の女装写真集だった

「うっ；；うわ～；；これはちょっと酷いかも；；ボクあまり見たくなかった、ハッ！・・・夢希？；；」

愛子がゆっくりと夢希のほうを振り返るとそこには

「ウン、ナニモミエテナイヨ？ワタシナニモミテナイヨ？」

死んだ魚の目のような瞳で呟いている友人の姿があった。いきなりの衝撃映像に瞳のファイヤーウォールがもたなかったようだ；；

「ゆ、夢希！？しっかりして！！ちょ、ちょっと！？何だか目に生気が感じられないんだけど！？もどってこ～い；；」

「う～ん、ねえ愛子？あの後何かあったの？私あの後の記憶だけごっそりなくなってるんだけど？」

「や、やだな～夢希ったら；；あの後いきなり寝ちゃうんだから。きっとクラスのお店の手伝いで疲れてたんだよ？アハハ；；」

あの後愛子の懸命の呼びかけになんとか夢希が反応し事なきを得る。そして自身に降りかかった悪夢の映像は脳内処理で記憶ごとを抹殺したようだ

雄二達の試合は交渉という脅迫により雄二達が勝ちを収めた

「ま、まあ試合前までに意識が戻ってきてよかったよ；；」

「ところで私達の二回戦の相手は？」

機械がランダムに選び出した相手の名がモニターに映った

Dクラス清水美春　Dクラス玉野美紀

「Dクラスコンビか、油断しなければ勝てる相手だね」

「うん、そう・・・」

そうだねと言おうとした時背筋が凍りつく視線に気付き振り返るとそこには鋭い目付きでこっちを見ているDクラスコンビが；；

「どうしたの？夢希」

気付いていない愛子にアイコンタクトでそっちを向くように指示し振り向かせた

「うっ；；なんか物凄く睨んでる；；、そう簡単にはいかないみたいだね；；」

「そうだね；；」

「試合開始！！」

「「試獣召喚（サモン）！！」」

対戦科目英語

Ａクラス霧島夢希　Ａクラス工藤愛子
３０４点　　２９１点

ＶＳ

Ｄクラス清水美春　Ｄクラス玉野美紀
１２６点　　１３７点

点数では夢希達が上だったがいざ試合を始めるとＤクラスコンビの異常な気迫の前に押されていた

「くっ；；何なのこの娘の気迫！尋常じゃないですけど！？」

それにしてもこの娘何処かで見たような・・・・・・

あ！思い出した！秀吉君とのデートの時に吉井君達に襲撃したあの

武装少女!!

「美春は!この大会で優勝してお姉さまと添い遂げると決めたのです!!お姉さまとの熱い夜を過ごすため負ける訳にはいかないのです!!」

やっぱり危ない娘だった!!;;というかあっちの召喚獣から黒いオーラみたいなのが滲み出てるんですけど!?

一方愛子のほうは

「アキちゃんとの生活!アキちゃんに色んな服を着させて過ごす生活が私を待っている!!」

「こっちも凄く危ない娘なんだけど!?っていうかアキちゃんって誰!!;;」

トランス状態の玉野に悪戦苦闘していた;;

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「あ、妹さんに工藤さんどうだった？二回戦勝った？」

「アキ、なんか二人ともグッタリしてない？・・・」

お互いに勝ったことを確かめ合っていた吉井と美波がとぼとぼとステージから降りてくる二人を見つけて声をかけたのだが二人から疲労の空気が漏れていた

「一応、勝ったけど・・・」

「アレはもう二度と戦いたくないかも・・・」

「そんなに苦戦したの？相手は誰だったの？」

「Ｄクラスの清水美春さんと」

「Ｄクラスの玉野美紀さん」

二人が対戦相手の名前を言うと吉井と美波は思わず口から「「うっ；；」」と呟いていた

「えーとなんて言ったらいいか；；」

「そ、そうね；；、・・・・とりあえず」

「「何か色々と・・・・・ごめんなさい；；」」

吉井と美波は二人揃って謝った

清涼祭　二日目　その2（後書き）

原作ではかなり後ろに登場の玉野さんを出して暴走させて見ました（一―一；）うーんもっとキャラを活かせるようにかけるようになりたいです；；

お正月ネタ丶（＊´∀｀）ノ（前書き）

このお話は勢いで書いたやつです＾＾；本編とは関係ありません；；
あくまでネタ話として見てやってください＾―＾；あとこのお話の
設定はオリジナルです

お正月ネタ丶（＊´∀｀）ノ

日が昇り年の始まりの日、元旦

木下家

「起きなさい、秀吉。お父さんもお母さんも待ってるんだからね！」

「う、う～ん？姉上？」

そこに立っていたのは着物姿の優子だった

「姉上着物を着ておったのか」

「せっかくのお正月だしね。あんたの分もあるから」

「ほう、ワシの分もあるのか。袴か何かかのう?」

「ここに置いておくからはやく着替えなさいよ?」

そう言うと優子は部屋から出ていった

ドダドダと物凄い音を立てて階段をおり一階のリビングのドアを激しく開く人物

「あ、姉上!!これは一体なんじゃ!!」

着物を綺麗に着こなしている美少女がいた

「あら、良く似合うじゃない?」

「そ、そうかの？……、ハッ（。ロ。）！そうではない！！何故ワシに女物の着物を渡すのじゃ！！」

「嫌がるにしては綺麗に着こなしているじゃない？」

「そ、それは演技の技術の一つとして身体に染み付いておるからじゃ！！」

「ふーん（ー＿ー）まあ良いじゃない？それしかないし」

どうでも良さそうにそう言うとおせちをつまみ食い始める優子

「これしかないじゃと！？何故じゃ姉上！！」

「知らないわよ、私が買ってきた訳じゃないんだし」

「それじゃ誰が買ってきたのじゃ？」

「お母さん」

「母上！！どうして女物の着物を買ってきたのじゃ？」

秀吉は台所で作業している母親を問い詰める

「いやね～、この前デパートでいい感じの着物を見つけたからアンタ達に買ってあげようと思ってね♪優子の分はあっさり決まったんだけどね？」

「けど？」

「秀吉、アンタ可愛い顔してるから男だったのか女だったのか忘れちゃって♪どうせ可愛いんだから女物でいいや♪ってことでね」

「……母上、自分の息子のことくらい覚えておいて欲しいのじゃ……」

ガクと膝をついている秀吉の肩に手を置く人物が

「綺麗に成長してくれて父さん嬉しいぞ♪秀吉♪」

息子に対して失礼なことをいう父親が居た……

「父上、それは男のワシではなく女子に言うべき言葉じゃ……」

「あ、そうだ秀吉。アンタに電話があったわよ」

「電話？誰からじゃ母上？」

「ほら、アンタの彼女の夢希ちゃんだっけ？」

「夢希が？」

「初詣に行きませんか？って電話があったのよ～、えーとあと１０分位で来るから用意しなさいね？」

「あと１０分!？母上!!何故それをはやく言わぬのじゃ!!ワシは今着物姿じゃぞ？」

ドタバタと慌ただしく用意しようとするがそこに非情のインターホンが鳴る

「秀吉君準備出来たかな？」

玄関前で夢希が待っているとガチャとドアが開く

「あけましておめでとう♪秀吉……くん？」

「すまぬ、少し支度に手間取ってしまってのう；；」

夢希が目の前で見たのは着物を綺麗に着こなしている秀吉の姿だった。普段なら喜びを露にするのに何故か悔しがる表情を浮かべていた

「ど、どうしたのじゃ？夢希？」

普段とは違うリアクションに戸惑いながらそう聞くと

「カメラとレフ板忘れた・・・・！！」

その表情から凄く悔しい気持ちが読み取れるモノだった

「あら夢希、あけましておめでとう♪」

「あ、優子♪あけましておめでとう♪優子も着物なんだ～♪綺麗だよ～」

家の玄関から優子が出てきた。優子の着ていた着物は秀吉の着物の色違いのやつだった

「ありがとう♪お世辞でも嬉しいわ」

「そんなことないって。私達これから初詣に行くんだけど優子も一緒に行かない？」

「う～ん、嬉しいけどこの後愛子達と行く予定があるからやめとく

わ。それに・・」

夢希と秀吉の顔を見るといかにも意地悪そうな顔になり

「元日早々から二人の邪魔をするような野暮な真似はしないわよ♪」

「あ、姉上!?・・・」

「ゆ、優子!?・・・」

優子にそう言われ意識してしまったのか顔を真っ赤にさせる二人

「それじゃいってらっしゃ～い」

そう言って優子は家の中に戻っていった。残されたのは顔を真っ赤にさせている男女ひと組み

「・・・、行こっか」

「そう、じゃな…」

二人は手を繋いで初詣が行われている神社に向かった

神社に着くとそこには家族連れ、恋人、友達などで初詣に訪れている人でいっぱいだった

「うわ～凄い人集りじゃなこれは…」

「そうだね…、はぐれないようにしっかりと手を繋いでおこうね」

ぎゅっと手を握ると思わず顔を真っ赤にさせて苦笑いする二人。そんな中夢希がふと前を見るとそこには見慣れた男女三人組みの後ろ姿を発見した

「お～い、吉井君、瑞希、美波～」

夢希が大きい声でそう言うと聞こえたのか三人が後ろを向くと気が付いたのかこちらに向かってきた

「あけましておめでとう♪二人とも」

「おめでとうございます♪夢希ちゃん♪」

「今年もよろしくね、夢希♪」

とわいわいと話す女性陣

「ひ、秀吉!!その格好は!!」

「う、うむ;;母上が間違って買ってきてのう。仕方なく」

「くぅぅ!!カメラとレフ」

「それはもういいのじゃ；；」

相変わらずの会話の男性陣

三人と合流した夢希達は一緒に行くことになった

「あのさ妹さん、雄二どこにいるか知らない？携帯が繋がらないし」

「ああ、雄兄だったら除夜の鐘が鳴り始めた辺りから行方をくらましたらしいよ？あと偶然かな？姉さんもちょっと出かけてくるっていってから帰ってこないんだよね？まあ雄兄と一緒だと思うし大丈夫でしょ♪」

「そ、そうなんだ；；。・・・秀吉」

「うむ」

そう言うと二人は黙って手を胸の上に置いて祈りを捧げた

「アキ何やってるのよ？」

「学校が始まった時に友人とまた無事に再開出来ることを祈っていたのさ」

明久がそう言うと秀吉も黙ってそれに頷いた

「？？？」

それを見て首を傾げる美波だった

その後四人はお賽銭を済ませると（一人はお金がないので）運試しにとおみくじを引くことにした

「あ、みてみて秀吉君！ほら大吉だよ♪」

「お、ワシもじゃ♪」

「えーと、待ち人来るってもう来てるけどね♪」

「そ、そうじゃな　（／／／）」

と大吉を引きラブラブしているところもあれば

「き、凶…；；、そ、そうだ金運は？」

金運・・・そんなモノあるわけないだろう

「ううう；；、せ、せめて恋愛運は？」

恋愛運・・・ある意味修羅場？同性に狙われる節あり

「いやーーーーーーーーーー！！；；；」

「奢ったおみくじがそんな悲惨なものしか引かないのが明久らしいのかもしれんのう；；；」

こんなものもいたりする；；；。ちなみに瑞希達は二人とも中吉だった

明久の凶を枝に巻きつけて境内をしばらく回っていると

「美波ちゃん、そろそろ」

「うん、そうね瑞希。アキ私達はこの辺で夢希達と別れましょう？」

美波がウィンクしながらそう言った。最初はどういう意図なのか解らなかった明久だったがすぐにその意図と理解した

「うん、そうだね。それじゃあ妹さん、秀吉またね♪」

そう言うと吉井達は夢希達とは別の道を歩いていった

「なんか気を使わせちゃったみたいだね；；」

「そうじゃな；；。ちょっと街にでも行ってみるかの」

「秀吉君！！」

そう言って街の方角に歩き出す秀吉を呼び止めると

「今年もよろしくね♪」

「・・・、うむ♪こちらこそよろしく頼むぞい♪」

こうして二人の新しい年が始まった

清涼祭　二日目　その3

なんとか私達と雄兄達は三回戦まで勝ち残っていた

しかし、この大会の対戦カードには雄兄達を潰そうと誰かがランダムに選ばれる対戦カードをいじり雄兄達に高ランクのクラスを当てて来ているのは明らかだった

おそらく雄兄もこの事に気がついているはず

ならばそれに対して策を打つだろう

雄兄が打つであろう策は既に読めていたので私もそろそろ動く事にした

「愛子、ちょっと出てくるね？」

「それはいいけど試合前には帰って来てよ？」

「わかってるよ♪」

そう言うととある場所に向かった

そしてその場所でしばらく待っていると予想通りの人物達が現れた

「やっほー♪、秀吉君、土屋君」

「夢希！？」

「……どうしてここにいる？」

「どうしてって変なこと聞くね土屋君♪だってここ、Ａクラスの女子更衣室なんだけどな～？逆に土屋君がここに居ることが変じゃないかな？」

「……クッ……」

「ちょ、ちょっと待つのじゃ夢希!?じゃあワシはここに居ることは変ではないのか!?」

「え!?……、えーと……」

「何故口ごもるのじゃ!?……」

何故か言うのを躊躇う自分がいた……

「ま、まあそれは置いておいて……」

「いや、ワシにとっては置いておいて欲しくないのじゃが……」

「秀吉君達がここに来るということは雄兄の作戦を実行しに来たと言うことかな？大方秀吉君が優子と入れ替わって姉さんを辞退させようて作戦かな？」

「……完璧に読まれてる」

これは大会が始まる前から予想出来た事だった。雄兄達も優勝を狙ってくるなら姉さんと当たるのは避けられない。景品の中身を知れば姉さんが必ず参加するのは向こうも予想出来たからだ

戦力的に勝ち目のない雄兄は姉さんと戦う前に何らかの策を打つだろう。そして考えられる策の中でも可能性が高かったのが容姿がそっくりの優子と秀吉の入れ替わり作戦だった

「私に読まれてるってことはもう姉さんにも読まれてるって考えたほうがいいと思うよ？」

「それならば姉上のことじゃ、入れ替わろうとやって来たワシを捕らえようと待ち構えておるじゃろうな…」

「多分更衣室の前で待ち構えているんじゃないかな？」

その頃更衣室前では

「さあ～はやく出てらっしゃい～♪秀吉♪」

手をポキポキ鳴らしながら笑顔で待機している鬼がそこにいた

ゾクゾク！？！？

「な、なんか今物凄い寒気がしたような…」

背筋をゾクゾクさせて周りを見回す秀吉君

「……本当に更衣室前にいるみたいだね…」

更衣室のドアをほんの少し開けてその隙間から夢希が覗きこむとそこには確かに鬼がいた

「なんじゃと!?」

「……万事休す」

予想外の事に慌てる二人を見てここぞとばかりに夢希が話を持ち掛ける

「あのさ、こっちの要求を呑んでくれるなら助けてあげなくもないよ?♪」

「……要求はなんだ？」

鋭い目付きでこちらを見てくる土屋君

「そんな目で見ないでよ？難しいことじゃないよ。実はね…」

「……ということなんだけどいいかな？」

「……わかった。要求を呑む」

「よいのか？ムッツリーニ、ワシらだけで勝手に決めてしまって；；。」

「呑まないとこちらに勝算はない。それに向こうの提案こちらにデメリットはない」

「まあ確かにこれはこれであやつにとっても良い機会かもしれんのう」

「それじゃあ交渉成立でいいかな?二人とも」

「・・・異議なし」

「うむ」

「よし、それじゃあまず目の前の状況をなんとかしないとね。しかしどうするべきか;;」

何かいい手はないかと考えていると土屋君が何かを取り出した

「これを使って木下優子を遠ざけて欲しい」

渡してきたのは茶色い紙袋だった

「何？この紙袋は？・・・・・ああ（；´∀｀）なるほどね」

「一体何なんじゃ？中身は？」

「これ；；」

「ああ；；なるほどのう；；」

紙袋の中身は優子の大好物だった

「しかし都合よくこんなの持ってたね？土屋君」

「交渉のカードは常に持ち歩いている」

それが普通と言うように平然と言い切った

「あ、あはは…そうなんだ…あ、それと吉井君や瑞希達にも話しておいてね？協力者は多いほうがいいから」

「了解」

「さて、更衣室前にいる鬼を退かせますかね♪」

私は土屋君から受け取った紙袋を手に更衣室を出た

「あ、夢希！更衣室にあのバカいたでしょ！？観念して出てくるように言ってくれない？」

「まあまあ優子、こんな所で立ち話もなんだし別の所で話さない？」

「何言ってるのよ！？私はここであのバカに制裁」

チラ♪　（紙袋の中身を見せる）

「詳しく話を聞かせて貰おうじゃない♪」

物凄く食らいついた（；´∀`）

優子を交渉と言う名の買収で話をつけ愛子の元に戻ることにした。
愛子の元に戻ったのは試合開始五分前だった

「もう！遅～い！！もうすぐ試合始まるんだから急いで！急いで！」

愛子に急かされてステージに立ってしばらくするとモニターに対戦相手の名前が表示された。その対戦者の名前は

Ａクラス　霧島夢希　Ａクラス工藤愛子

ＶＳ

Ｆクラス　島田美波　Ｆクラス　姫路瑞希

「あちゃ～；；瑞希達と当ったちゃったか；；、もう少し後のほうで当りたかったんだけど」

「まあ仕方ないよ、ボク達はここまでのようだね；；」

以前瑞希達と交わした約束を守るため私達は適当な理由と付け西村先生に辞退を宣言した

辞退を宣言しステージから降りると瑞希達が駆け寄ってきた

「夢希ちゃん！愛子ちゃん！私の為にこんなにしてもらってごめんなさい；；」

「いいよ♪気にしないで。私も瑞希の転校嫌だしね」

「ボク達の分も勝って絶対優勝してよね！」

「うん、ウチら必ず優勝するから！ね？瑞希！」

「はい！！」

夢希達がこうしている一方雄二達はと言うと

「西村先生、私達はこの試合棄権します」

Aクラス霧島翔子とAクラス木下優子との試合を行うはずだったが向こうによる棄権により雄二達の勝ちが決まった

「良くやった！ムッツリーニ！秀吉！俺は、俺は！！自分の未来をなんとか守ることが出来たんだ！！」

「おめでとう雄二♪」

雄二は歓喜に酔いしれていた

しかし、彼はそのせいで気が付くことが出来なかった

ステージを去る際に木下優子の右手に茶色い紙袋を、自分の事に関しては誰よりも絡んでくる霧島翔子があっさりと辞退したこと、去り際に雄二を照れる表情で雄二を見つめる翔子。そして何より彼の勝利を称える隣の友人の笑顔が黒いモノであったということにこの時の彼は気が付きはしなかった

こうして夢希達は三回戦で終わり、瑞希達と雄二達は準々決勝へと駒を進めた

清涼祭　二日目　その４

召喚大会三回戦で終了した私と愛子は一旦別れて次の準決勝の試合を一緒に見ることにした

愛子と別れた私は教室に戻って制服に着替えて試合会場の入口で愛子を待っていた

「ごめ～ん；；待った？」

愛子がメイド服のまま息を切らして駆けつけてきた

「あれ？愛子着替えなかったの？何処か行ってたの？」

「うん、ちょっとＦクラスの喫茶店に行って美味しいゴマ団子とお茶を頂いてきたんだ～♪」

それはもう本当に嬉そうに言いこっちまで嬉しくなるような笑顔でそう言った

「へえ～♪、それはやっぱり土屋君の手作りだからかな～？にやにや」

「なっ！；；そんなんじゃないよ！！；；なんでそこにムッツリーニ君の名前が出てくるの！？；；」

珍しく愛子が真っ赤な顔をして思いっきり否定した。・・・・全然説得力ないけど♪

「あれ？愛子は土屋君の事気になるんじゃないの～？」

「べ、別にムッツリーニ君の事何か気にしてないよ；；」

「まあそういうことにしておきましょか～♪」

「夢希～；；ホントなんだからね～；；っていつも弟君のことでからかってるからその仕返ししてるでしょ～？；；」

「知らな～いっと♪」

そう言って慌てる愛子を置いて会場に入り愛子も慌てて私の後をついてきた

「ホントにホントだからね？」

「分かった、分かったから‥」

しつこく否定する愛子を宥めて観客席に座った

しばらくすると準決勝の対戦カードがモニターに表示された

Ｆクラス坂本雄二　Ｆクラス吉井明久

ＶＳ

Ｆクラス島田美波　Ｆクラス姫路瑞希

「あちゃ～Ｆクラス同士が当たっちゃったか…まあ雄兄達がここで棄権すれば瑞希達が決勝にいけるか」

当然ここで雄兄達が棄権すると思っていた所にいきなりモニター画面に葉月ちゃんが映った

「バカなお兄ちゃん頑張るです♪葉月も応援するです♪」

あー…吉井君凄い気まずい顔になってるな…こんだけ応援されて棄権しますって言いにくいよね～…

そんな吉井君の心情を読んで同情している所に突然葉月ちゃんから

爆弾を放り込まれた

「勝ったら大人のキスをしてあげるです♪」

・・・・・一瞬会場の時が止まった…

ゴォォォ!?あ、あれ?…美波と瑞希から危ない殺気のようなものが…

「キスだけじゃなく一緒にお風呂に入るです♪」

ゴォォォォォォ!!!は、葉月ちゃん!?それ以上言うと吉井君の命が危ない!?主に物理的に!!

「あ、愛子!ちょっと葉月ちゃん止めてくる…これ以上言うと吉井君フィードバックで殺されかねないから…」

「ボ、ボクも行くよ…なんかあれまずいよね…」

これ以上爆弾を放り込まれるのを阻止するため私達は葉月ちゃんの所に急いだ…

「葉月が疲れたおにいちゃ、んん!?んんん!?…」

「は、は～い葉月ちゃん?向こうでお姉ちゃん達と一緒に応援してようね?…」

「うんうん…そうしようね～…」

急いで葉月ちゃんの口を手で塞いだ。急いでステージ上の瑞希達を見た、間にあ・・・

ゴォォォォォォォォォォォ!!!!!・・・・間に合わなかったみたいね…

しかも会場の周りがいつの間にか額にFのロゴマークが入っている黒覆面の集団、秀吉君に教えもらった組織異端審問会で埋めつくされていた。って言うか以前見た時よりも数増えてない！？

「「殺セー！殺セー！殺セー！」」殺意のある赤い視線が吉井君に集まる。・・・今日もしかしたら友人を一人亡くすかもな；；

そんな光景を見て不吉な事を考えていると手をペチペチと叩いてくる何かが？下を向くと苦しそうに葉月ちゃんが私の手を叩いて、あ！口塞いでるの忘れてた；；。急いで塞いでいた手を退けた

「く、苦しかったです；；どうして葉月の口を塞いだですか？夢希お姉ちゃん？」

「え？えーと、アハハハ；；ちょ、ちょっとね～；；」

「まあ取り敢えず席に戻ってお兄ちゃん達のカッコイイ所見ようよ

葉月ちゃん？」

対応に困った所に愛子がフォローを入れてくれると葉月ちゃんは愛子の顔を見るなり声を上げた

「あーー！夢希お姉ちゃんの隣でカッコよく戦ってた召喚獣のお姉ちゃん！」

「へ～そんな風に見ててくれたんだ♪なんか嬉しいな♪ありがとね！ボクは工藤愛子っていうんだよろしくね葉月ちゃん♪」

「よろしくです♪愛子お姉ちゃん♪所でお姉ちゃん達に聞きたいことがあるです。どうして葉月のお姉ちゃんはあんなに怖い目してるですか？」

葉月ちゃんにそう質問されると私は葉月ちゃんの肩に手を置いて言った

「いい?葉月ちゃん・・・・・女の嫉妬は時に殺意を生むの」

「火サスのような台詞を幼い女の子に吹き込むのはボクはどうかと思うんだけど?・;;」

愛子に突っ込まれてしまった;;事実なのに(;´Д`)

「って言うか愛子やっぱり戦うしかないかな?雄兄達」

「いや~・・戦うしかないでしょう;;ほらあれ」

そう愛子がモニターを示すとそこには姉さんの姿が

「雄二、わざと負けるのは許さない・・、雄二は優勝したら私にプロポーズしてくれるって約束してくれた」

「翔子！？俺はそんな約束してねぇぞ！？」

「証拠ならここにある」

姉さんがそう言うと取り出したのは一台のビデオカメラ。ピッと再生させるとそこには雄兄の姿が出てきて

「翔子！俺はこの大会で優勝したい！優勝してお前にプロポーズするんだ！だから頼む棄権してくれないか？愛してる翔子～♪」

「これが証拠。だからわざと負けたら即結婚！！」

「待て待て待て！！！；；俺はこんなこと言った覚えないぞ！？・・・明久てめーの仕業か！！」

「え～？何のことかな～？僕わかんないな～；；；；」

「てめー！人の人生危険に晒しやがって！！いや、待て。だとするとあの時点で俺の策は読まれていたことになる・・・、俺の考えを読め明久達に協力させ、なおかつ翔子達を説得させることが出来る奴は一人しかいねぇ」

あ、雄兄がこっちを凄い目付きで見てる；；ワタシハナニモシリマセン、シリマセントモ♪～（´ε、；）

「ど、どうしよう雄二？；；」

「こうなったら俺達が勝って四の五の言わせねぇ！」

こうして一方は命を掛けた、もう片方は己の結婚を掛けた戦いが始まった

清涼祭　二日目　その４（後書き）

今更なんですが；；このお話気に入ったらお気に入りの登録宜しくお願いしますヽ（´Д`；）ノ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9224t/

私と姉さんと召喚獣

2012年1月15日03時47分発行